岐蘓棕子

第十號

長野縣立木曾山林學校
校友會

41 11 10

6

岐蘇校友第拾號目次

增刊の辭　伊藤門次

論說

林業進化小史と木曾の林業　伊藤敎諭
職業論　金田凉友
自然の美を愛せ　長谷部域麓
農民と自由思想　藤田要吾
複雜社會の念をさ　木村岳泉

學術

シュリッヒ氏著森林全書　小松敎諭譯
煙害に就て　由尾忠輔
土橋運搬法　本多清右工門
立木尺〆計算法　伊藤昌琴
もみ、つが識別法　北村播州

文苑詞藻

ブルの說　高木敎諭
喫烟の害　松本松翠
余が理想　宮澤天狗
木曾八景　福田寛二
我が輩は貧乏である　金田凉友
池中の魚　遠山旭子
開校紀念日　澤木嘆月
春の一日　福田寛二

、星放言・　仲澤丶星
觸面記　雄猛突進
思ひ出　木村岳泉
くさぐさ　柳澤章二
小品　新體詩　詩　和歌　俳句

雜錄

行李柳の植栽　森三玄
落葉　宮澤清輔

紀行

修學旅行記　第三學年

端書便り

雜報

校内紀事
第六回卒業證書授與式　○伊藤先生を迎ふ　○始業式　○入學式　○宮島金兵衛氏の講話　○有川敎諭告別式　○創立紀念祝賀式　○實習　○修學旅行　○西澤・河野兩先生を迎ふ　○川嶋本雄君　○職員辭令　○本校職員及受持學科

校友會彙報
本誌改名に就て　○臨時會議に列會　○創立紀念祝賀會　○本年度卒業生方向調　○新入會員　○會員の逝逝　○特別寄附金報告　○紀念品贈呈に就て　○明治四十一年度會計報告　○寄宿便り　○福島近況　○探險遠足部便り　○編輯局より　○廣告　○緊急會告

野村光智　若林遊龜　山田治郎　澤田勝右工門　中村吟重

宮入光雄　國原鼎　原田伸　向井辰次郎

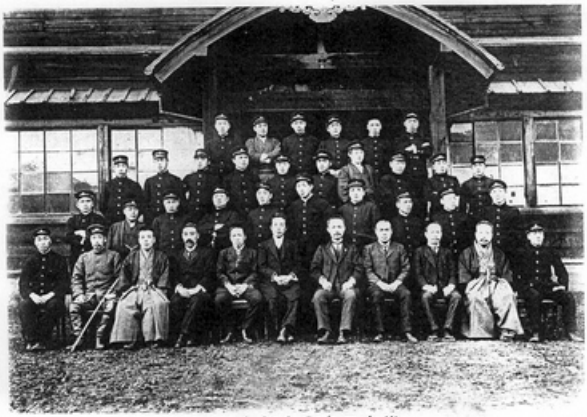
河野喜四郎　沢田英一　鮫島貢　田宮英郎　田辺英二

山崎鹿之助　松尾省三　宮川忠永　岡戸栢太郎　松澤莊太郎　倉科浦一郎　中嶋要　一之瀬浚雄

栗野治平　原田雄太郎　原田忠恕　原田三二　伊藤亦三郎　江川敎諭　細川縣敎諭　林敎諭　高木助敎諭　安井敎諭　木曾虎雄

森有一　森田川敎諭　畑敎諭　校醫　學士　藤敎諭

征矢野助右工門　書記　敎諭　長記　藤敎諭



第六回卒業生紀念

增刊の辭

聞說く　北米ニューハムプシヤは合衆國中最小州の一なり其地、一分は湖面にして八分は山なり岩石狼籍して至る所耕耘に便ならず加ふるに土地淺薄以て他州の比すべきなし此地の父老人に語りて曰く「我州の物產別に誇る可きなし只一物の天下に供すべきあり卽人なり」と而して米國史を繙くものにして誰か此父老の言を批難するものあらんや。ダニエル、ウエブスター、ホレスクリレー等の如き剛氣着實世の稱して以て代表的米國人となすものを產出せんこと、擧げて數ふ可からず州人廣く天下に散布し責任ある位置を占むるもの一村多きは二三十名に及ぶと」

信州生糸を產するを以て俄に誇る可きに非ず木材を出すべきを以て未だ徒らに安ず可きにあらざる可し我校友會茲に見るところあり、校友會誌を增刊して自我の發展を期し併せて校友諸氏の思想開發に資せんとす。人間思想の開發は單に目と耳とのみによるものにあらず、大に辨ずること大に筆する事によりて、卽ち思想の發表によりて確實著大の向上を見る可きこと心理學の已に〳〵立證する所にあらずや。古來盲人にして一代の師表となる可き思想家少なからざりしと雖も未だ啞者にして聞ゆるあらず故に曰く「思想は入口にあらずして出口にあり」と。思想發表の要以上の如し、諸君は女々しき不平のつぶやきを止めて演說せよ。日記すると共に雜誌部に投稿せよ。校友會は每月定期の演說會と雜誌の增刊とを以て諸君の獅子吼を待たんとす。我校卒業生を出す已に百余、皆校友會員なり此等の諸氏校運の隆盛を希望して會誌の增刊を待つに必ずや有益なる資料を給して相當の助力を惜まざるべし。校友會誌は校友諸氏が神聖なる勞働の結果なり校友會諸氏が母校を思ふ赤心の反影なり茲に增刊を見る當に賀す可きなり。顧みるに宇內の形勢帝國の位置日に開進するに從ひ林業の進化まことに刮目に値す。今や林學の識なくして林業の經營夢想も及ばず吾人の前途洋々として春海の如し。此時に當りて會誌の增刊を見る偶

增刊の辭

然にあらざるなり其責任や重且大、昔時博士坪内某中學校の校友會誌を一讀して「後來此校より聞ゆるあるの人を出さん」と豫言者の言は實現せり土井晚翠高山林次郎の徒續々として輩出せしと云ふ誰か校友會誌の無用を說くものぞ賣文の雜誌夫の何するものぞ。吾徒は校友諸氏の目重と努力とを望むと爾云

明治四十二年四月　　研究雜誌部、問　伊　藤　門　次

論　說

林業進化小史と木曾の林業

伊　藤　敎　諭

林業の歷史五千年進化の跡を詳記せんには、一卷の書籍く其盡す所にあらざる可し。幸にシュリッヒ氏のあるあり。僅々數十頁に縮記す即ち譯して以て林業小史となす。

地球陸地の大部分は小なくとも一度森林を以て被はれたるものゝ如し、勿論氣候の異なるにより土質の同じからざるに基きて所により其樹種を異にせる森林を以てせしなるべし。其間代謝作用はたへずして老林木は年と共に倒れて幼林木之に代はる林木更新は都今よく行はれて土壤と氣候との生產力は驚くべきものなりき。

然るに人力なるものあり一時にあらざりしと雖ども徐々に其生產力を破壞し初め遂に森林の存在する地積を驚くべく縮小せり。偶々殘存せる森林も不注意不合理の取扱によりて林地の生產力を衰へしめたり。かくて林地は造林せられ整理せらるゝことなしには森林の維持を不可能となすに至りぬ。此に於てか一の業務は現出せり林業とは卽ちそれ。

現今の所謂林業なるものは忽然としてなりしにあらず進化に進化を重ねて遂に今日あるに至りしものなり。森林が巨大の地積を占めし間は林木は自然の自由なる賜物なりし、卽ち空氣水の如きものなりき。人は之を採取し之を用ひ森林を破壞するに何の憚るところあらざりき。

林業進化の第一期は森林利用力。

人工の增殖するにつれて農作物の需用加はりために益耕地の擴張を必要となし此み林地に要求せり。

無數の伐木と燒畑とは漸次林地に行はれたり。かくて林地は其生產する所を以て人生不可尺の需要を供するに足らざるを憂ふるに至れり（現時の北米合衆國の如く）

茲に森林所有權の觀念明確に人々の腦裡に顯現し來り森林所有の主張、所有森林の境界爭ひ發生するに及びて森林保護、林業進化の第二期を劃す

森林保護は其初め人に對してなりき。然るを徐々に展開して生物は更なり。自然現象氣候の如きに對するに至りぬ。單に森林保護を以て足れりとせず更に合理的取扱卽ち森林生產量に應じて伐採すること換言すれば一ケ年度には幾何、一期間には幾何と量定することの必要漸次人々によりて、感知せらるゝに至れり。施業案編成期はかくの如くして開始せられたり。

林業の要望進むにつれて天然更新のみを以て森林構成に不充分なりとなし、人工更新を必要とするに至れり。

伐木に注意して從來の天然更新を、更に有効ならしむると共に人工播種又は植栽によりて造林するに至れり。更に用材として最も貴重なる特質（例へば吉野杉の年輪の巾の小さくして等一なること、京都北山杉、四ッ谷丸太等の造林の如く）を具備して幼林木を生長せしむるの必要を感ずるに至れり。茲に於て進化の第四期造林期に入る。

かくて年と共に森林の價、昇進し遂に賣買の目的物となり森林評價の業を生せり。

森林資質期は林業の第五期なり。初め森林保護は外物の加害他人の干渉に對するものなりし。然るにこれのみにては最早充分ならず、國權に助を求むるに至れり、卽ち或林地は公安の爲め、或特種の任務ありとせられ、又は氣候調制の爲めに或は隣地保護の爲めに必要なりと感せらるゝに至りて森林法の制定あり。これぞ林業進化の第六期なり。

社會政策の發展につれて、森林も亦其問題の一資料となる。森林國有の可否其程度なを考究せらるゝに至れり森林政策期は進化の最終期なり。

かくて林業の內容は繁雜なるものとなりぬ。

本會の林業なるものは僅かに林業第三期の進化期にあるもの其前途未だ遼遠なりと云ふべし。

施業案は漸く昨今なりしものゝよしにて說明書もあらず。天下無二の美林評價二億を下らざるべし。

今若し二億の金子を銀行にせば其利子或は現今細料林の收むる以上に達するやも知る可からず。勿論國有林ト御料林の經營は公安を重じて營利を第二位におくを以て以上の如き森林較利の見地より見れば不合理の如き結果に到達するものならんか。

蘭村附近の造林地を見るに皆伐すべからざるところに皆伐して崩壞亦崩壞手も付けられざる狀態にある個所あるを見受けたり。

造林に用ふる苗木は民間より買收するものゝ如し蓋し其原因何所にあるや未だ尋究を盡さずと雖も造林の理想とするところより云へば造林地の苗圃にて苗木を作りて植栽するをよしとす。

大日本山林會誌第三百十四號に「林業失敗談」と題して進藤繁吉氏の實驗談は當に其理由を例証するものに近し同氏は秋田に吉野の杉苗を移植したり。

然るに植栽后三四年にして「段々色が赤くなつて成長が止まつた、花が咲き實を結んで下枝が枯れるそれが爲めに風には非常に弱ひ風に吹かれる爲にぐら〳〵して根元の周圍に穴が出來て半死半生の狀態になつた、それは地味の瘦せた所に植へた杉の成績でありますが肥へた地に植へたのは非常に伸びが良い充分すぎて幹が非常に軟弱でありますが、風に弱ひばかりでなく雪に倒れる翌春雪が消へても其倒された方の杉は跳返らぬ倒れたまゝで幹から芽が澤山出て居る云々十數年の勞力と莫大の經費を無益に投じて仕舞つた、是れは獨り私のみならず」と云々

シュリツヒ氏の之れに對する意見を照會せんに「農作物に於て此種の誤は一ヶ年の失敗に了ると雖も林業にありては然らず此種の誤に氣附く以前に多くの歲月を經ることあり。或林業家は此種の誤をなして多年間氣付かず二十年、二十年を經て林木の枯死するものを見るに至りて初めて感知し得たり。

斯くの如くなれば林業を督するには、農業を督するに比してより大なる注意と熟練とを要するものなり」と

獨逸にありては落葉採集の害大なりとしてかつて立法院の議題に上りしことあり。

本會に於ては造林地の地拵をなすに山を燒く、たゞに周圍の美林に對して危險なるのみならず、地力を減退せしむるを如何。エベルマイヤー氏の實驗によれば「普通に林地は人工的施肥するを要せず、何となれば林木の土壤より攝取する鑛物質養分は農作物のそれに比して遙に小量なり、平均林木の幹枝と葉とは農作物の必要とする鑛物質養分の百分の五十四なり。內に付き葉の納むる所は百分の四十六にして幹枝は百分の八なり。

今若し葉を林地に殘存せしむるものとすれば木材の土壤より攝取する鑛物質は農作物の二十分の一のみ換言すれば殆んど林地は、人工的に施肥することなしに木材を生產することを得、加ふるに日々の落葉樹蔭に生する蘚苔は *mould or heavny* の薄層をなして土壤の優秀なる物理的性狀を維持すべし（人工を加ふるにあらずして）故を以て瘠地は林業に供せられ肥沃の土地は農業に當てらる」と

山を燒くの結果は笹の繁植を盛ならしむ、笹多きところに造林するに當りても笹を燒きて地拵をなす、

燒かれたる笹は翌年舊狀に復すと云ふ、蓋し笹は地上莖を燒くとも地下莖は枯死せず、却て笹と生存競爭なすべき雜木、山火事の爲めに消滅して笹の繁榮を大ならしむ、宜しく雜木をして笹と生存競爭せしめよ、數年にして雜木は、笹を壓して立つべし。

雜木林を成立せしめよ、かくて笹をして林地より跡を絕たしめよ、次に雜木林を用材林に仕立つる易々たるのみ。

山を燒くこと雜木とは云へ多額の材を灰燼に委す、惜むべし、或は曰はん雜木の價、山元にて幾何なりとなす、交通不便なる當地の如き殆んど廢物にして利用の途なしと。

されど考一考すれば中央線の一貫する近きゝあり。

諏訪郡其他に於て薪炭材を要する非常にして、東俵の御料林は林相劣等なりと雖も薪材を出すことによりて莫大の收益を上ぐると近く、薪材を要する地をひかへ鐵道當に開通せんとするの今時、雜木を灰燼に委する果して可なるか。

東京市其周圍に多くの薪材林を有したり、近時促々として林地は畑地に化しつゝあり、其理如何と云ふに薪材は交通の便を益すと共に遠くより致さるゝに至るが爲なりと。思ふに木曾の薪材の遠きに致さるゝ其期迫れるなり。

之を要するに木曾の林業未だ造林と云ふ程のものを見ず以て林業進化の第三期にありとなす。（未完）

職業論

金田凉友

人は何等かの職業を有すべきものである、單に生活費を得る爲めばかりでなく自己の才能を用ひて社界に何等かの貢獻を爲すために一定の職業を有する事は極めて必要である。

職業は單に生活費を得る爲めばかりではない、けれども多くの場合に於て生活費を得ると云ふ事は職業と離るべからざる關係をもつて居るものである、特に中等階級の生活に於て左樣である。而して職業に依りて生活費を得ると云ふことは少しも不都合の事でない、のみならず人類の生活として極めて健全なる狀態である。其の手の勤勞に衣食する平民の生活が祖先の遺產若くは他人の勤勞に衣食する貴族や金持の生活よりも健全であるのは此故である。此の意味に於て我々は衣食を得る爲めに日々勞働に從事せねばならぬ境遇に在ることを感謝せねばならぬのである。さうして個人の上より見て職業は生活を維持する手段であると共に之を社會の側から見るならば、それぞれの職業は何れも共同生活の利益及び幸福を增進する爲めに欠くべからざるものとなるのである。一例として農夫の耕作に從事する場合を擧ぐるならば、彼等の大多數は之に依りて生活費を得るといふ目的の外には他に何の理想をも持たないのであるけれども、彼等は直接には人類の生活に必要なる物資を供給し、間接には國家の富を增進すると云ふやうな働きをしてゐるのである。

若し總ての職業にして個人及社會の利益を害するものがなかつたならば我々は唯、本能的に衣食の資を得んが爲めに一定の職業を有するといふだけに滿足することも出來るのであるが、事實は之れに反して人類の善惡多樣なる本能は、しばしば個人及び社會の利益と相背反する要求の下に自ら多くの不正不德なる職業を生ずるの常であつて、其正不正を鑑別して善良なる職業を撰擇するの必要があると共に一面に於て人知の進歩は單に本能的に働くと云ふ以外に其の職業に對して何等かの意義を見出さんとするに至るのである。此に於て職業は單に之に依りて衣食の資を得るのみならず同時に之を通して社會の上に或る有用なる働きをなすことの出來るものであると云ふことが明らかゝなり、從つて社會の利益及び幸福と相背反する職業に對して十分之を拒否する事が出來るやうになるのである、一般に醜業と認められてゐるものゝ外にも隨分個人及び社會の進歩を妨げ發達を害するが如き職業もないではない、我々は職

業を撰擇するに當つて人類の利益や幸福と相反するが如きものと謀んで之を避けねばならぬ、若し斯かる有害なる職業に從事するものがあるならば一日も早く之を廢して更に他の正當なる職業を求むべきである、併し世の中には積極的に害毒を流すべき職業といふものはさまで澤山にあるものではない、唯其職業に從事するものゝ心掛の惡いために社會に何の利益をも與へることの出來ないものは幾らもある、其職業の存在が社會に何の利益をも與へることが出來ないならば云ふ迄もなく其職業に從事するものゝ生活もまた無用の生活である、即ち我々は單に生活費を得るといふことの外に其職業に就て高尚なる理想を有し之を善くすることに依つて社會に貢獻すると云ふ明瞭なる意識を有することの必要なる所以である此意味に於て腰掛主義の働きは最も惡い唯、一時衣食を得るための方便としてのみ其職業を見ることは甚だ宜しくない、假令一日でも二日でも與へられたる職業が不正不義のものでないかぎり最善の力を盡して少しでもより善き働きをなさんことを心掛く可きである、是れ我々の職業の價値を高くし其の勤勞を神聖ならしむる所以である。

此の如く我々は何等かの職業を有し有用なる働きをせねばならぬのであるが、扨て自己の性質及び才能に適したる職業を見出すのは決して容易のことではない、且つ一面に於て專ら衣食の資を之れに仰がねばならぬ、中等階級に於て理想的の職業を得ると云ふ事は一層困難なる事情がある。自己の性質及び才能と餘りに懸隔ある職業を有するのは勿論不利益のことであると共に既に理想的の職業を得る事の意の如くならざる上は多少自己の好む所を抑げて成る可く現在の職業に適應するの工夫をすることが又甚だ大切であるそれと共に常に其境遇の爲めに支配せられず進んで自己の進路を開拓し漸次は其境遇を改造して行く心掛がまた必要である、世間には一定の職業を有しながら之れを善用する能とせずして不得要領の間に世を終はる人若くは數次職業を變更して一も之に安んずることが出來ないで不平不滿の生涯を送る人も少くないのであるが强いて自己に不適當なる職業に固執する必要がないと共に餘りに職業を變更するのも亦弊害がある、自己の好むと好まざるとに拘はらず現在有する所の職業に對しては十分忠實に努力しつゝ且つ一方に於ては絶えず自己の希望を實現すべき機會に就て深き注意を拂ふことを忘れないならば必ずしも人事の意の如くならざるを歎息するには及ばないのである。

なほ一言を附加し置きたいのは職業其のものに高下の別のないことである、之れは既に小生一年級の頃米山先生より十分倫理の際說き聞かせられてあるので忘るゝことは出來ないのである、即ち總ての正しき職業の道德的價値は平等であつて一國の政治を左右する顯官の生活も僅かに數項の田を耕すに過ぎざる水飲百姓の生活も共に社會に有用なる働らきを爲す事に於て甲乙を附すべき理由はない、若し一個の貧しき農夫商人工匠の如きものと雖も其職業に對して最も親切忠實であるならば、他の所謂高等なる職業に從事しながら其職業に冷淡に不親切であり從つて十分其職業を有用ならしむることの出來ないものに比べて、より高き職業をもつてゐると云ふことが出來るのである、卽ち高下尊卑の別は職業其物の上に非ずして職業に對する人々の熱心、若くは冷淡、忠實、若くは不親切なる其心術、態度の上にあると信ずるのである。

自然の美を愛せ

長谷部城麓

現社會は日進月歩の進運にあり、生存競爭の渦中に蹌踉して漂蕩しつゝある也。

何故に爾かく蹌踉し漂蕩しつゝあるか？パンを得んが爲めか、自己子孫繁榮の爲めか、はた國家、社會の爲めなるか。

吾人顧みよ、吾人は食ふ爲めに此の世に生れ來りしか、利を得る爲めに、はた名を得る爲めに生れ來たるなるか、誰か直ちにうんと、首肯する者あらん必ずや躊躇す可し然り苟も人として此の世に生れ、人

の人たる本分を盡さずして可ならんや。又吾人は社會の一員として、生くる者焉んぞ、社會の進運に爪痕を殘すなくして可ならん。

然りと雖も、之れ一朝一夕にして達し得べきにあらず、實に長年月を要するもの、加之平々凡々、尋常の軌道を辿りて、容易に達し得べきに非らざる也。

吾人反省せよ、人生曰く三万六千日――須臾にして死ある人生――なるを。面白可笑しく暮すも一生一世ならずや、朦朧たる過去、未來を夢見て、躊躇する勿れ、須らく現實に滿足せよ、自然に復れよ、然れ共怠慢遲疑の人となれと謂ふにあらず。

人は間斷餘裕なかる可からず、古來英雄閑日月ありと聞く。余は凡俗人にして英雄にあらず、閑日月なきか然りなきなり。されど共之あるべくつとむる也。求めて得られざるなかるべし。

念ふに人生に尙ぶ所や、單調なる活動にはあらずして、寧ろ多趣なる生活にあるなり。而して吾人人類は美を求めて、之を愛し、之を賞賛して、快樂とするもの也。

廣く美を求めよ、然れ共かの不潔極まる――魔窟界？ 不自然の巷に入りて美を求めて快樂とするなかれ、眺界之廣遠に、見よ吾等が周圍に存在するもの凡て吾人の求むる美を滿足せしむるものあらざるなきを。

何んぞ即ち天然自然の美、之れなり。永劫不滅の自然の美、美ならずや。

然れ共自然の美、自然界の狀態は實に複雜にして一言にして論ずる能はず、到る所唯之佳景あるにあらず、平凡なる家屋、道路、丘陵相集りて一の境遇をなすあり、塵埃あり、汚物あり、不淨の下水、更に甚しきは惡臭鼻を打ち、穢色眺を遮ぎるの境界、往々之あるあり、而して卑賤の徒、其間に往來して何等の見るべきものあるなし。豈取りて以て美となすに足らんや、然れ共一夜、雪之を藏ひて銀世界を成し、家々の燈光、紅色を吐くに際し、偶浮雲破れて月光を洩らさば、其の光景必ず人目を眩するに足るものあらん。されど共斯の如き佳色は常に之あるにあらず、唯時ありて現出せらるゝもの也。即ち自然の佳景は方所と歳時とによりて之を異にするもの也。

更に人工の美に至りては作者の技倆いかんによりて種々の佳景の粹を集め打ちて一塊となすを得べき也自然界に於ては決して遭遇し得可からざる理想的の佳景を一幅の中に現出するを得る也。人工の美の自然の美にまさる所以か、否然らず吾人は自然の美に於て人工の美が決して及び難きものあるを認めざるを得ず、見よ、白砂青松、一點の塵もなく長風面を吹き濤聲耳を洗ひ、眺に映するものは水天一碧たる海邊に立て知らず快と呼び興に叫び心胸頓に豁大となるを覺ゆるにあらずや又、我が北方高く聳ゆる御嶽山或は富士の如き高山に登らんか、白雲大麓を繞りて、身は天半に懸り、眺界茫々、如何に宇宙の廣大、無窮なるかを感じ、氣象頓に豁大となる。を覺ゆるにあらずや。

轟々たる響を、毎に絶わせぬ清き木曾河畔に立ちて眺めよ、嚴然たる駒ヶ岳は其の姿を倒に、樹々に繁れる青葉はきよく、水にうつせる邊り、落日將に西山に傾かんとする時、日は所謂白光、爛々として水面に映じて、見るの身は、恰も大聖の臨終に侍するの感あるなり。莊嚴の極、凡夫も靈光に包まれて、肉融け、靈獨り皚然として永遠に彳むを覺ゆるなり。人或は深林を辿らんか、幽邃密樹の裡、澗の底より自然に其の天機を唱らすの好音、唯か愛せざる者やある。誠に思へ、百花爛漫たる花園に入りて誰か美の感念を起さゝる者あらむ。又巨木鬱蒼として晝尙暗きが如き神社僧園に賽して誰か崇高、壯嚴の感なき者やあらむ。

夫れ吾人人類の精神は周圍の自然物によりて實に至大の感化を受くるものにあらずや。かの詩人を見よ、天陰り霧深く、大澤茫々たる地、必ずや多くは沈鬱悲愴の詩人を出し、常に天氣晴快にして且つ、風土の佳地に住む、多くは軟快和樂の詩人あるを。

天然の人に及ぼす其の勢力豈又實に大ならずや。

天然、自然は人間耐久の朋友なり、教師なり。其の是に交はる愈々久しく愈親しければ遂に天然と同化して自已も亦清白、素朴、簡質、雄大となるべし。

此の親切なる朋友――教師の四邊に圍繞せられて却て是に遠ざかり、塵俗擾々の裏に世を了せんとは、何んの心ぞ。加之も此の自然を破壞せんとしつゝあるものに至つては誠に痛恨の極なり。

方今文明の風は襲い來れり、社會は實利的に傾き來れり實利的はよし、然れ共是れが爲めにあたら美景を自然の精神教育を授くべきもの、將に破壞せられんとしつゝあるは誠に惜む可し、恨むべし、之が良救濟策なきものなる哉。

崇拜せよかの自然、愛せよかの自然の美を。

自然の美を愛する者は幸福なり。

夫の蕩々として流るゝ清き野水、翠綠滴るゝが如き自然のパーク、何れか一日の勞を慰するに足らざるものあるべき、各種の趣味を求めて、自然の景樂を收むる、之れ吾人本來の幸福を享有する最良の方法たるべし。其の天眞を發揮するものと謂ふべし。

（完）

農民と自由思想

藤田要吾

人或は米國史を繙ひて思へらく農民は獨立自由の思想に富むと。焉んぞ知らむ農民の獨立は、所謂、無爲の獨立と稱すべきものたるを。然して無爲の獨立は、又無爲にして、終るなり。

然れ共、人或は云はん「ゼネバ」の湖岐嶽雲表に聳へ湖面鏡の如く、然して、幾多の猛士勇夫此間に奔り、劍をとつて、獨立の旌旗を其山嵐に繙へせしもの、是れ瑞西の農民にあらずや。米國の平原茫々として、天の穹窿に連る所、硝煙劒花席旗戰を忍び、寒に堪へ、鮮血皚雪を染めて、專制暴主に抗し、十三州をして、獨立不羈の月桂冠を戴き、巍然として、西半球の天地に光明を放たしめたるもの、之卽ち樂農民にあらずや。

是によつて、是を見れば、農民は獨立自主の氣象に富むにあらずや。然り言、又理ありと雖も、敢て農民たるが故に自由を好みしにあらず、兵をあげしは、國民全体にして、農は商工業者と共に國に殉せしなり。

卽ち國民全体の氣象の然らしむるところ、豈、夫れ獨り農民の力のみによらむや。

農家の自由の精神ありとは夙に學者の唱ふる所、然れ共、是、又政治的の自由にあらずして一個、孤立の自立心なり。見よ彼等の行動を、朝に起きて自然に近づき、夕に未來の幸を夢みる時、心中何ぞ政治的觀念あらむや、外交の憂あらんや。

春來れば耕し、秋來れば獲り入る、彼等の事業や全く其れ自然的にして、概して人爲的なるものあらざるを知るべし。彼等の自由は放縱的なり、動物的なり一歩進んで更に政治思想發達の沿革を見よ、文明も社會的秩序も、國家觀念も、皆是れ初めは都會におこりしなり。然して、文明の利器、或は度量衡、或は交通の便、教育、衛生、宗教の如き、之れなくんば自由權利を存せしめずと絶叫せしめたる法律の如き、皆、是れ都會の賜にあらずや。歴史を繙かば政權の自由及國家觀念、又都會の賜なる事、明かなるを知るべし。

歐州の諺に曰く、「市の空氣は人をして自由ならしめ、田舍の空氣は人をして奴隷たらしむ」と、是れ卽ち奴隷も都會に生活せば自由を得る傾向あり、田舍にありては然らざるを表示せる言にして、試に歐州憲法史を繙かんか、瞭然として明かならん。

想ふに都會にありては、上は下り、下は上り、再者、相接近せん事を務む。茲に於てか相互の關係、親密となり、讓讓風をなし、扶液の道駸々として進み、幾多の住民は互に利害を調和し、平和なる人生を

送らんとす義務茲に於てか生じ、權利茲に於てか起る、卽ち自由の思想發現せるなり。

或は云はん田舍生活は最も自由を得たると。

然れ共、焉んぞ知らむ、之、所謂動物的自由にして社會的の自由ならざるを。

人、若し孤立を以て自立とし、獨立自主とせば、何ぞ其れ點個の自由を理解せんや。苟も自由を論するもの禽獸的自由、卽ち放恣と政治的自由の二者の區別をなさゞる可らず。政治的自由とは國家、法律社會、等百般の團体的制度を設立して始めて之を云ふ可く、農家が起臥飲食の自由なるに動物的自由として云ふべく、所謂、政治的自由を距る事管に万里のみならず、兩者の關係、殆ど反比例なりと云ふべし

史を案するに和蘭國民は實に今世民權主張者之嚆矢たり。

抑も和蘭國の歴史、殊に「モットレー」氏著和國共和政体起源史を繙かば、彼國に於て始めて自由民權の說を稱へ、西斑牙國に對して叛旗を飜へしたるは、都會の國民にして、然も其主なる民の工業商業の隆盛こそ壓制政府を轉覆する原動力たりしや疑ひを容れざるところなり。

何れの國と雖も竹鎗蓆旗、所謂謀叛一揆の爲め史上に慘を留めざるはなし。試にあげんか、

千〇九十六年ノルマンデー、千八十六年ヂャットランド、千三百十五年並に八十六年瑞西、千三百二十五年獨乙南方、千三百五十八年佛國「ヤッカリー」

千三百八十一年英國、千四百六十八年エルサスに於けるブントシウ、千四百九十二年和蘭に於ける「ゲーゼブレーデル」の亂、千五百十五年獨乙の「デル、アルメー、コンラッド」、千五百〇四年獨乙南部の擾亂、

以上列記する所只其重大なるものに過ぎずと雖も要するに彼等農民は數度數重の逆待に堪へずして、或は地方の郡吏を相手どり、或は地主を相手どり、漸積せる憤怒の念を晴さんとするにあり。

一目すれば民權自由の爲なるが如きも、彼等の眼中決して遠き慮あらず、自已目前の利害あるのみ。世の所謂百姓一揆なるもの稍もすれば規律を欠き、粗魯にして殘忍酷薄を極め、人心をして慄懼せしむる事少なからず、加之、其行動は一時の演戲に止まり軍略上敢て見るものなし。況んや政治思想發達より云ふも其影響の外にして且輕きものなるをや揚げて論ずるの價値なきが如し。佛國碩學の大家「ドトクウヰル」氏云はずや「人の職業中共和國にありては農業の如く進歩遲きは無かる可く、之を他の職業に比すれば殆ど靜止するが如く見ゆ」。と此言大に味ふべきものあり、農を以て最重となす米國に於てすら尙商工業の隆盛を見るにあらずや。

上來說き來りし所、或は雜なりと雖も概するに農民の自由と起居飲食の自由にして政治的、社會的の自由にあらざるなり。

復雜社會の念を去れ

木村岳泉

敦厚朴直の君子は常に巧言令色の徒に一籌を蹈され、誠意正義の士は悖德不義の輩に壓せられ、福德一致の實揚らず、權謀術數を以て私利を貪るの輩、滔々として天下に滿つるの現世、復雜社會の嘆、世に喧しき亦偶然にあらざるべし。苟も徐々たる赤誠を有し、眞善眞美を愛するの士、誰か如斯、悖德社會に身を容るゝを屑しとせんや。岳泉何ぞ悲觀するの甚しき岳泉とは女の匿名か將た老人か、思を花鳥風月に寄せ、塵外に天然の美を樂み、文墨に生を終らんことを希ひ、或は一身の誠を捧げて佛に仕へ、罪深き現世を厭ひ、希望を棄て、進歩を擲ちて省みざる者あるに至りては其不心得の甚しきをせめざるを得ず。何となれば、吾人は希望あるが爲に、進歩有るが爲に生命あるなり。若し今にして吾人より此の二者を取り去らむか、吾人は其時に死する者なり。例へば肉體は存するも最早世に價値なき廢物、所謂穀潰したるを免れざればなり。

嘆、有望なる青年よ試に思へ、此廣大なる世界に住する生民幾萬、此内に悖德不義の徒、其跡を絶ふ、何時の世に於てか之を期せん。福德一致の黄金時は到底望むべくも非らず。而して是等の徒跡を絶にんか誠意正義、亦自ら消滅せむ、斯る輩あればこそ誠意正義の尊ぶ所以も生ずるなれ。されば是に接するに惡むべき仇敵を以て目せり。

德を示し、反面より我を敎ふる者は彼なり、常に我が好敵手として我を勵す者も彼なり、我を正道に導くも亦彼なり。吾人は彼に鑑みて我身に省み、以て正しく善に進み、誠に近づきなば始めて人道を蹈み誤る事なけむとの心を以て社會を觀すれば背德非義一として吾人を敎ふる師ならざるはなく、吾を導くの良友ならざるはなし。誠は遂に伸ぶる者なりとの信だにありたらむには、決して斯る惡念に魅せらるゝ事なかるべし、とは余の深く信ずる所なり。余の薄識能く盡す能はずと雖、亦、幾分の採るべきあらば共俱に相戒めて此の念を去り、「うきことのなほ此の上につもれかし」との奮勵心を鼓舞し、以て大事を誤らざらんことを切望に堪へざるなり。

（終り）

學術

シユリッヒ氏著森林全書第一卷林政部

小松敎論譯

第一編　森林の効用

森林は個人及國家の經濟上直接或は間接に大なる價値を有す即ち前者は主として林産物により後者は氣候濕氣の調和、土壤の結合國民の衛生上に及す作用によれり故に森林の効果は個人として及國家として觀察す可く即ち個人は森林より生産する木材を重じ國家は國民全體に關する森林の効能を主とするものなれば個人は直接効用に關係し國家は間接効用及直接効用共に與るべし。

第一章　森林直接効用

第一節　森林産物

A、主産物即ち木材。　木材は用材として建築、船艦、器械、器具、農工業、等に用ひらる、又薪材として火力を起すに用ゆ、一國に必要なる木材の量は種々なる理由により異なれり、近時鐵其他の鑛物は多く木材に代用せられ石炭、泥炭、は薪材の需用を減じたりと雖も尙ほ且木材は必要欠くべからざるものとし更に如何なる樹種を薪材になすべきや注意するに至れり、換言すれば可成多く用材を産出せんとするにあり例せば一千八百五十年サキロン國の林産物僅に三十五ばーせんとが用材に造材せられしに、一千九百年に八十二ばーせんとに增加せりババリア國は千八百五十年に生産木材の十六ばーせんとが用材なりしに一千九百年には五十ばーせんとに至れり。獨り木材は用材薪材として用ひらるゝのみならず近時木材工業の勃興々共に例えば木紙製造の爲に大なる準備林を要求するに至れり木紙製造業の發達は聯合王國をして每年五千万立方呎の木材を輸入せしめ、此價額平均約二百二十五万弗に達す。彼白楊樅は寸燐用材に掬は官て主要なる薪材なりしが今や家具、床板荷箱木道木履等の材料に變するに至れり加ふるに薪材の一部は木材及木灰となす木炭は尙燃料たる可く殊に鑛石の燃材とし又火藥を製するに必要なり、木灰は加里肥料の原料とす次に各國が每年消費する木材量を人頭割にすれば表の如し

佛國	一人に付	7立方呎
白耳國	一人に付	12立方呎
聯合王國	一人に付	14立方呎
墨乙國	一人に付	18立方呎

加奈太國　一人に付　60立方呎

聯合王國は毎年千万噸の木材を必要としゥ國産の木材は僅に二百萬噸あるのみ。

B副産物。　森林の産物中用材及薪材を除きたる余は全部副産物とす卽ち樹皮、樹脂、鞣油、染料、木質、染料、落葉、樹實、草、花、等皆之に屬す此等の中肥料用草、落葉は小農特に貧困なる田舍に多く用ひられ他は廣義の工業に原料として供給す卽ち英國は年々凡そ一千二百万弗の輸入をなす次に聯合王國の輸入額を示さん。

森林副産物の平均輸入額

もち	6,027,050弗
もち油	1,180,296弗
染料	518,014弗
木質染料	249,412弗
半質染料	170,876弗
ごむ類	1,305,683弗
松脂油	834,571弗
樹脂	528,728弗
五倍子	076,807弗
松脂	42,966弗
松根油	92,706弗
植物鞣料	779,190弗
合計	11,806,302弗

寄書

煙害に就て

特別會員　由尾忠輔

紙上に於て諸君と見ゆるは今回始めてゥあります、是迄も時間もあり材料もありましたが生來の筆、不省のため遂に今日迄失禮した次第であります。

さて單に煙害と申しましても鑛山の煙害もあり又諸種の工場の煙害もありますが私が茲に申述べるのは小坂銅山卽ち鑛山の煙害に付てゥあります、卒業生諸君で鑛山に御奉職の方は勿論苟も足一度鑛山の地を踏みたる人は必ずや其四圍に存在する森林が鑛煙の侵害を受けて鬱蒼たりし林相は破壞され樹木は白骨と化し、地皮物は蕭瑟に至る迄悉く枯死し遂に土地崩壞の悲境に沈淪しつゝある樣を目擊さるゝ事と思ひます例へば我々が往年修學旅行の際に實見したる足尾銅山に又茲に述べんとする小坂銅山に於て何れも一見直に吾人林業に職を奉ずる者の心膽を寒からしむる次第であります、世上に於ても近來漸く此煙害の緩にす可からざるを認識し鑛毒と共に多大の注意を惹起し來り之に關する研究も追々歩を進めて來たのは誠に喜ばしい現象であります、當青森大林區署に於ても昨年度に於て三名の調査員を任命し管内國有林に被害を與ふる前記、小坂鑛山の煙害を調査しました、幸不肖も其一人でありました故茲に煙害に付ての一篇を起草し其當時に得たる實地の見分を述べ併せて諸君の御參考ゥ供したいのであります幸に一覽の榮を得ば誠に本懷とする處であります、然し一言御斷りを願つて置きたいのは此事業が直接鑛山主及被害地方の人民に關係致して居る故内部に立ち入り調査の方法とか或は弊來の作業法等を詳言する事が出來ないのであります、依て其邊を偏は諸君の御寛恕を願ふ次第で豫め御承知を願て置く次第であります。

小坂銅山は秋田縣鹿角郡小坂にありまして、其規模の大にして百般の事物の整備し居るは眞に驚嘆の外ありません、煙突の數も悠に大小數十本を數ふ可く内最も大なるは一邊の長さ一間を有する八邊形にして高さ八十尺を有するもので二百貫の物體を噴き出すと申します、之等多數の煙突が晝夜間斷なく噴出する煙の量は實に莫大なるものであります、さて此鑛煙が如何にして森林植物に被害を與ふるかと云へば其内に含まるゝ亞硫酸瓦斯一名無水亞硫酸と稱する氣體が植物の細胞内に侵入し其水分と化合して硫酸を生じ細胞の組織を侵し遂に其同化作用及蒸發作用の停止を來し植物を枯死せしむるに至るものであります。

御承知の通り此瓦斯は空中に於て硫黄を燃燒する時に生じ一種の惡臭を有する氣體で此中に植物の生葉を投入すれば見る見る其綠色の褪色するを認めます以て如何に植物に有害なるか御判別の事と思ひます

さて此瓦斯の襲來を受けたる森林植物は如何なる現象を呈出するかと申しますれば概ね次の如きものであります、即ち初歩の内は僅かに葉面多少蒼白色を呈し其より程度の增進と共に漸次赤褐色の小班點を生じ次第に其班點の數と大さを加へ遂に茶褐色に變じ落葉し同時に小枝の梢部枯死し此現象逐次增進するに從ひ樹木の發育を阻害し遂に枯死の已む無きに至らしむるものであります、而して以上の現象は次の諸原因に依つて大に其程度を異にします。

一、樹種　被害の最大關係因子は樹種であります、今最對煙と思料するものあり順次列擧すれば概ね次の如きものであります

サワラ、小ナラ、大ナラ、ミヅキ、ヤマグワ、エンジユ、コシアブラ、ハリギリ、ホー、カシワ、シラカバ、イタヤ、ムシカリ、コブシ、サワフタギ、アヅキナシ、アヲダモ、トチ、ブナ、スギ、サワクルミ、アカマツ、クリ、

調査地内に生育せる樹種は大體以上の如きものであります。

實地調査の結果を綜合して大體以上の如き順序に撰定致しました、然し之も次に述ぶる諸因に依り又大に其趣を異にします、從つて此處と足尾其他の地にて調査したる結果とを比較對照すれば其間に順序の轉換するもの例へば足尾其他にて最强なるものが之表にて或は弱に近き事等があるだろーと思ひます之は以前申した通り位置氣候天候等の關係するあれば數の免がれざる處と思ひます、然して最對煙のナラ、サワラ等は直距二里位の處に於て唯褐色の斑點を認めるのみで外見上著しき被害なき樣に認むるもクリ赤松の如きは直距五六里の箇處に於て尙多數の褐色斑點を認むるのみならず、落葉しクリの如きは其結實力に多大の減殺を來たし無害地の四分の一位の結實あるのみにして、或は之を全く欠くものもあります、クリに次で最も感煙するはサワクルミであります一度煙の襲來を受ける時は其度必らずしも大ならずとも樹葉蒼白色に變じ黑褐色の無數の小斑點を認めます、故に森林中にて煙害の有無を研めるには大に參考となる樹木であります、又一般に細根に富む樹木は直根性の其れに比し抵抗力大にして壯令木は老幼木に比し對煙力が大で有ります、又果樹は煙の襲來に遭遇する時は結實力に影響を受ける事、甚大でありまして當地方特產として天下に嘖々たる好評あるリンゴの如き毎年此の煙害の爲に多大の減收を來しつゝ有ります、又落葉樹は常綠樹に比し毎年新葉の代謝するあれば外見上殺害少なく見ゆるも決して大差ありません。

二、季節　樹種に次で大なる關係を有するは季節で有ります、煙が植物に對し最も大なる被害を與ふるは春季及び初夏に於ける新芽の發綻期、其生育期及開花期で有ります、此の感は農作物に於て殊に深くします、若し新芽の發綻期に煙の襲來を受けんか、嫩芽忽ち委縮して完全の發育は望む能はず、よし成長したるにもせよ其正形を保ち難く甚だ不正形であります、從つて其生育上に多大の影響を與ふるは勿論の事で有ります。若し又開花期に其侵入あらんか、花は褐色となり黑褐色に變じ結實の力なく忽ち落下するものにして此兩期は植物が鑛煙に對して最も憂苦の季節で此兩期を無事經過すれば、其以後は

さしも甚大の害を蒙らないもので有ります。又晩秋より冬期に渉る植物、細胞の休眠期に於ては其被害尤も少量でありますが餘事に渉りまするが稻の如きは開花期に煙の侵來あれば其花黑褐色に化し一粒の収獲も得る事が出來ません。

三、天候　天候に依て其被害の程度に大なる相違が有ります、即晴天無風の時は鑛煙高く中空に上昇し擴散して次第に稀薄となる故に從て植物に被害を與ふる事僅少で有ります、之に反して曇天或は雨天に於ては鑛煙は水蒸氣の障害有りて空高く上昇する事能はず徒らに空中ゑ充滿し風有れば其の方向に旋き直距五六里の地點に迄で達するもので高處に在りて之を見れば宛ち一條の濃霧の如く漠々として飛來します、植物又此の時期に於ては其葉面に水滴を湛へるを以て即時に其を攝取して硫酸を生じ被害を與ふる事一層多きを加へます、故に曇天及び雨天に於ては晴天に比し其被害遙るかに大で有ります尙ほ夜間は其氣孔閉止するを以て晝間に比し多少被害の量を減じます、而して天候は次に記述する風向、風力と密接の關係を有するもので有ります。

四、風向及風力　被害の最も大なるは其主風の方向に位する森林で有ります、何となれば此方向に存在するものは强弱に係わらず絕へず鑛煙の侵害を受くるを以て勢、他の箇所に有る其れよりもより大なる被害を蒙むるは當然の事で有ります、此の內殊に大なるは煙道に位置する森林で有ります、煙道とは吾々の附したる名稱にて字の如く煙の通過する道路を稱したので有ります、此の煙道なるものは常風の時は殆んど一定して居るものにて煙は必ず此の方向を通過するものであります、但し無風の時は唯中空に上昇するに止り强風の時に於ては煙は徒らに飛散するが故に其の場合には煙道の存在を認めません。此の煙道は主に澤通底地で有ります、今天候と風向とを併せ考ふれば晴天强風の時よりも曇天雨天弱風の時に於て却て其の被害大なるもので有ります。

五、距離　茲に申す迄も無く同一條件の下に於ては遠距離にある森林は近距離に位するものよりも其の被害僅少で有ります。

六、地位　土地の理化學的性質の優劣又預つて大なる關係因子で有ります、我々の實驗に依れば理化學的性質に優位なる地位に生ずる樹木は之に反する土地に生ずる仝一樹種に比し其抵抗力大でありますし水分の含有如何も大に關係する處にして水分の含有量、欠乏する地に生ずる樹木は之に反し水分豐富なる地に生育する仝一樹種よりも其の對煙力少で有ります。

七、土地の關係　煙道附近を除きては一般に澤通は峯道に比し被害少にして或は全く被害無き地多きを占むる事があります、峰廻にしても風當り强き地は樹木の葉端裂かれ居るを以て煙害に罹る事大であります、又鑛山に面する地は之に面せざる地より被害大にして散生地新植地等にして閉鎖を保たざる森林は被害を受くる事大であります、又當地には仝一樹種の單純林が無い故判然とは申せませんが最强の樹種と雖も仝一樹種の單純林に於ては却つて被害度大でないかと思考します。

以上は單に無學なる私の調査の結果を綜合したるものにして加ふるに僅々唯一回の經驗より得たるものに過ぎざる故元より其正確は望み難く從つて之と他の地方の調査の結果と比較對照して果して的中するや否やは全く疑問であります。其邊は幾重にも諸君の御寬恕を仰ぎ度く唯御參考として叙述致したのであります。

煙害の豫防法としては現今未だ良法無きようであります、勿論對煙樹種を以て更新するにあるは世人の等しく思考する處なるも絕對的に煙に感染せざる樹種は殆んど無いと云つても過言でありません、故に鑛煙の發噴を止むる外良法ない事に成ります、小坂鑛山に於ては此鑛煙を誘導して或裝置に依り之より硫酸を製出する方法を講じつゝあります、若し此法にして成効の曉は自他の利益推して計られざる事であらうと思います。

歌和に鳴く蛙俳句に鳴く蛙　水巴
鳥羽殿へ五六騎急ぐ野分哉　蕪村
かけはしや命をからむ蔦かつら　芭蕉

土橇運搬法

特別會員　本多清右衛門

（青森大林區署管内に於て實地實査せしもの）

第一工事經費

(1)工事費

土勢、土砂、岩石の切取量橋梁の有無、盤木の多寡等に依り自ら異なるものとす而して本事業に於ける是等關係は如何と問はば岩石切取、橋梁布設等は少しの必要もなく至極容易なれ共嚮だ曩に先きに伐採したる時の枝篠路線に散在し居りたるを以て之が取除に少しの手間を要したる位なり、今之が総括表を左に余の自ら實査せし大要を掲げ以て諸氏の參考に供せん、

科目	道幅	距離	費用	備考
土工費	6.0尺	220.8	21,600円	盤木の長四尺全間隔一尺五寸とす依て本工事に於ては百八十四本を要す一日賃金六十錢の常傭夫四十五人を要せり從て一間十二錢强の工事費なり本事業に於ては盤木の取集に困難を感じたり夫れは盤木となすべき樹種少き爲也
盤木布設費			5,400円	
合計			27,000	

第二　運材

土橇運材に關らず凡て木材を運搬するに際して第一伐採地に散在する木材を可及的一箇所に集材せざる可からざるや論なし。而して本事業に於ける運搬材は多くは冬期中谷合に集材し置きたると且は伐採地溪谷に沿ひ居るを以て比較的木寄には多くの勞力を要せず且本事業の目的は鐵道枕木製作にあるを以て枕木は溪谷に置き木挽により直に製作せられ丸太は單に枕木資材の殘部に過ぎざる者なり、今之が運材方法土橇一臺の積載量、一日の功程、一日一人平均賃金、路線延長に對する往復回數等其他順次表示せんと欲す。

1、勾配の配置

測點番號	距離	勾配
0……1	26.5	3°
1……2	9.0	5°
2……3	11.0	4°
3……4	12.0	5°
4……5	7.6	7°
5……6	7.0	5°
6……7	24.0	6°
7……8	8.0	5°

測點番號	距離	勾配
8……9	10.0	5°
9……10	16.0	5°
10……11	7.0	8°
11……12	11.5	7°
12……13	8.3	5°
13……14	18.7	8°
14……15	22.0	9°
15……16	14.0	8°
16……17	7.4	10°

(11)運材費

運材費は木材の數量大さ設置方法の良否路線の延長等は最も其關係大なるものとす、外に言はしむれば天候の如何も事業の進渉上多大の關係を有するものなり今是が實査表を左に指示せん。

材種	長	平均末徑	平均一臺積載量	往復回數	賃金 丸太	賃金 枕木	備考
椿丸太	十尺	六寸六分	二石乃至三石	一二	二円四〇〇	一円五六〇	一石は一尺〆を一石二斗と稱す而して此表は地方慣習上末口徑を二乗し長さを乗じたるものとす賃金は一石八錢枕木一丁一錢の割とす
仝上	十四尺	七寸九分	仝上				

以上は單に賃金及積載量一日功程に過ぎず是が運材を試みんと欲せば他に盤木に要する油等を計算せざる可からず、油は本事業に於ては一升を以て充分一日の量に足れり。

此の外運材方法及土橋の構造等に關して述べたきは山々なれど諸氏は順次木材運搬法講義に於て學ばるゝ事ならんと信じ且つは余の在校當時に於て學びし事と殆ど同じなれば敢て此處に反復するの必要なきと信じ此處には單に吾が輩の實査せし大要を掲げ以て諸氏の卒業后實地就業せし時の或は一助ともならかと會報の片隅を染めたる次第なり。

以上

住の江の松を秋風吹くからに　河内躬恒
聲うちうるおきつしらなみ

簡便なる立木尺〆計算法

伊藤昌琴

凡そ測樹法は其の仕事の早さを貴ふものにして其の仕事の早からんには其根本たる公式が簡單ならざるべからず。

我帝室林野管局員より測樹法の最も簡單にして且實用向の公式を聞き得たるを以て余此の欄を借りて廣く讀者諸君に告げんとす。

算法　先づ測らんとする立木の胸高圓周と全長(間)とを定め其の胸高圓周の自乗に全長の二倍を乗ずれは即ち求むる數の百倍の尺〆なりとす

實例茲に胸高圓周五尺全長十間のものありとせよ。

然る時は即ち

$5^2=25$,

$10\times2=20$,　故に

$25\times20=500$,　$500\div100=5$

即ち五尺〆なりとす

理論

$\frac{1}{4(\text{圓周率})}\times(\text{圓周})^2=$圓面積なるか故に立木尺〆の計算法は$\frac{1}{4(\text{圓周率})}\times$全長(尺)$\times\frac{1}{12}$

$\times$,05なるべし

本式に於て12は十二立方尺　0,5は形數なりとす

又順次下の如くなすを得

$\frac{1}{4(\text{圓周率})}\times(\text{圓周})^2\times$全長(間)$\times6\times\frac{1}{12}\times\frac{1}{2}$

$(\text{圓周})^2\times$全長(間)$\times\frac{1}{16}\times\frac{1}{3.1416}$

$=$圓周$^2\times$全長(間)$\times\frac{1}{50.2656}=$圓周$^2\times$全長(間)$\times0.0199=$圓周$^2\times$全長間$\times0.02.0$,(0199を四捨五入として),002を除數させんが爲め100を乗ずれば次の如し圓周$^2\times$全長(間)$\times2$,　即ち

$\boxed{\boxed{\boxed{}}}^2 \times 2$（各長$\boxed{\boxed{\boxed{}}}$）

前述公式中に於て形數を常に〇、五とし〇、〇一九九を切り上げて〇、〇二となしたるを以て稍眞數と差ありと雖其の誤差極めて小なるを以て實際使用するに當りて少しも不便を感ぜざるなり（以上）

遠方からもみ、つがの一見識別法

北村播州

いづれのもみの林を見ても、必ずつがゞ混合して居る、そこで我林業家と云はるゝ者は、此林を遠方から一寸見て其のいづれがもみいつれがつがであるかと云ふことは、見分くるのは極く必要なことで又容易に出來ることであると思ふ。

先づ遠方から望見して此の兩者の大体の形を見ると樅は圓錐形に栂は楕圓形をなして居る樣に見る、然し若木と老木とではたいへん其形は異にして居るから一概にかく斷定を下すのも、一寸無理かも知らんが大体斯樣なものと思つて差支へはなかろう。其枝の樣子或は葉の色彩等も、兩者大に其趣を異にして居る、樅の枝は下部から上部に行くに從つて、次第にみじかく、規則正しく左右前后に生じ、其尖端は一枝直立して以て圓錐形の頂點を作つて居る。けれども栂は屈曲せる枝を不規則に樹幹の四方に生じ殆ど楕圓錐形に近く、其上端は一枝或は二枝分立して生じ、中には下垂せるものもあり以て楕圓形の尖部を形ち作る、又葉の色は前者は厚綠色で、一見青色を呈し后者は黃綠色で遠方から見ると黃色をして居る。葉枝とも、もみは直立して强硬に、つがは下部の方が多い故に風等にも后者の方が多く搖がされる先づ遠方から見て此位のことに注意を拂つて居つたならば、十中の八九迄見分ることが出來るだろーと考へる然し乙れ自分勝手の申し分であるから充分にとは申せん、だが學術上のことばかしに依賴して居る譯にもゆかんから、實驗上のことも多少參考になると思ふ、參考否實際机上の學理一片のものではだめだ吾人須らく實驗せよ、而して得たら當紙を借れよ、余は自己實驗して得たものを、そのまゝ書いたのである。

文苑詞藻

希望（一）

沖の潮風吹き嵐れて、
夕月波にしづむとき、
空のあなたにわが舟を、
ながき我世の夢さめて、
心のなやみ終るとき、
墓のあなたに我が魂を、

（二）

白波いたくほゆるとき、
黑暗よもを襲ふとき、
導く星の光あり。
むくろの土に返へるとき、
罪のほだしる解くるとき、
導く神の御聲あり。

（晚翠子「天地有情」の一節）

文苑詞藻

ブルの說

盲蛇生

何をかブルといふ内に其實なくして徒らに外觀をのみ裝ふもの是なり即ち權体ブルなり勿体ブルなり利巧ブルなり色男ブルなり曰く何曰く何種々樣々のブリ方少からずといへども余の最もいけすかないのは前記數項を以て甚しとす頭髮の撫で方鬢の捻り方（或はなきものもあり）衣服の着こなしに浮身をやつし帽子の被り方スラツキの振り方に心を配り階段の昇降門扉の開閉より人に接する坐作進退一としてブラざる如きに至つてはいやはや鼻摘まさるを得ず嘔吐を催さゞるを得ずである此の如く他より厭忌され爪

彈きせらるゝにも拘はらず當の御自身は愈益得意然たる者あるに至つては實以て呆れ反らざるを得ず由來此輩のブリたき主旨は何んであるか思ふに己が威嚴を保たんが爲か學識を誇らんが爲か才幹を賣らんが爲か富有を衒むんが爲か馬鹿を覆むんが爲かに外ならざるべしと雖ども其要むる所と適々以て自己の品位を損するものなるに心付かざるはいかにも氣の毒千万の至りといふべししかし個人としてはいかにブルとも御勝手にて汝敢て我を汚さんやで聊頓着せざるべしといへどもしも此輩をして他日一局一部の主宰たらしめんか其施設する所其計畫する所一に皆此寸法より割り出さるゝに於ては其下流に立つ者の迷惑中々一通りにあらざるべしいや曾に迷惑のみならず心外觀の形式にのみ馳するものは勢内部の空虛を免れず内部空虛にして其實効の擧るものなきはいふまでもない彼の戊申詔書にも華を去り實に就きと宣り給へり又何やらの本にも本立て道生すとか其本亂れて末治まるものはあらじとかあつた殊に近頃官官式とか去勢的とか空頭病とかいふ樣な皮肉の痛罵の通語の持上りし矢先諸君聊か反省ありてかゝる彈丸の的たらざる樣御用心々々

喫烟の害

松本松翠

喫烟の由來は元來野蠻未開の土人が嗜好せしに止まり、開化人は絶にて之を用ふるものなかりしに、今より大凡四百余年前伊太利ゼノアの人閑龍が亞米加發見の時始めて之を知り、又其頃西班牙人烟草島に於て其植物を發見し、其後佛人ジョンニコット氏其種子を他より持ち來りて栽培せしより歐洲文明人の間に廣まりしものにして、我國に於ては凡そ三百年前卽慶長の初年洋人が薩摩の鹿兒嶋に齎らし來りしに始まれり。然れども其頃我國にては人智未だ開けずして其害毒の大なるを知る者無く又之を禁ずるものも無かりき、故に時日を經ざる間に直ちに諸國に蔓延して遂ひに今日に至れり。

其成分はニコチン、炭酸、青酸等其他二十有余種の元素の混合より成る、其害毒實に甚だしく頭痛を起し眩暈を生ずる等は中毒の輕少なるものにて、最も甚だしきに至りては往々死を來す恐れあり、假令即時に死を來さずとも幾分か生命を短縮すとは泰西學者の常に稱する所なり。烟草の麻睡性の毒性あると重にニコチンにて百匁の烟草中には二匁乃至八匁を含む故に一本の紙卷烟草にも尙二人を殺すに足る丈の毒のりと云ふ、即ち二毛許を犬に與ふれば三分時にして死す斯の如く恐るべき大害あるものなれど喫烟の際は烟となりて入り直ちに吹き出さるゝが故に体内に毒物を吸入するの量少きが爲め人は只僅かに即死を免がれ居るのみ、凡そ烟草を吸入すれば害毒先づ咽喉を乾燥せしめ往々咽喉病を起し肺に至りて其組織を害し血液の運行を紊亂し其害遂ひに神經系に及び人の活力元氣を衰耗せしむ、故に腦髓の未だ定まらざる少年には最も大害あるものにて身体の發育に大なる妨害を與ふ、其他心臟を萎痺して勢力を減せしめ、直胃病の原因となる故に烟草麻睡劑として用ひらる、又烟盲と稱する一種の眼病あり、之れ多量の喫烟をなして視神經を害したるより生ずる病なり。斯の如く大害あれども人の之を感ずること少なきは其害毒の目前に見ゐざると人体中には一種の機能ありて毒を薄くするの妙あるとに因る、然れども早晩不知不識の間に其害毒に感じ元氣活力を減耗し種々の病に感じつゝあるは必せり。豈恐るべきものならずや。

人或は曰く「烟草の害はさることながら社交上不可欠ものなるを如何にせん」と。

人間は社交的動物なり、烟草にして右說の如く社交上不可欠ものなりせば大害ありとも或た止むを得ざるやも知れずと雖も現今社會に於て社交上しかく必要なりとは信ず可からず、否之が反對に社會は烟草を口にせざる青年を歡迎しつゝあるにあらざるか。

己に烟草の常習を得て社會に立てる人にして之が害に堪わず苦心慘憺禁煙斷行をなしつゝあるもの比々皆然り。禁烟パイプなるもの此風潮の齎らす所たり。

眞理は永遠のものに非らず、昔日の社會に適用せられしものも社會進化の結果非眞理となるもの少なからず。古人の言に心醉して社會進化の現狀に着目するあらざりせば或は恐る將來の成功不覺からん事を。

乞ふ目を轉じて米國の社會を見よ。彼れが實業社會にありては青年を忌むこと非常にして社會の信用も之が爲めに損せらるゝこと。蓋し我邦將來の社會に於ても此風潮益盛大を致す可し、即ち一部論者のよりて以て唯一辨護の盾となすところのものは畢竟古人の眠言に過ぎず。

乞ふ將來有爲の青年諸氏有害無効なる喫烟を敵として進まれん事を。

希望　（三）

嘆きわづらひ、くるしみの、
夢にも泣くか塵の子よ、
雨風いかにあらぶとも、

（晩翠子「天地有情」の一節）

海にいのちの舟うけて
浮世の波の仇騒き
忍べ、とこよの花にほふー

港入江の奉告げて、
燃ゆる焰に思想あり、
夜半の嵐に諫誡あり、

流るゝ川に言葉あり
空行く雲に啓示あり
人の心に希望あり

余が理想

宮澤天狗

余、學海に掉してよりこゝに十幾星霜、而して此の間余が理想とする所千變萬化せり。

彼の始め桃太郎の物語を聞きし頃には我も亦早く成長して鬼が島を討ち金銀財寶を獲て雉子猿犬の助をかり潔凱旋せんと思ひき、是れ余が腦裡に描かれし第一のものなりき次に浦島太郎、竹林の七賢を語られし時は我も此の世を脱し深山海底に入り一生を送んと思ひ又ロビンソークルーソーの傳を讀み、余又フライデイを得て無人島の大王たらん事を考へしと十一二才の折なりき。此の頃兄を失ひ重て親友に逝れたり余初めて人生の無常なるを感し緇徒となり彼等の亡後を弔ひ墓の側ゝ庵を建てゝ棲まばやと思ひき其後萬事非觀的に流れ易く時々友人の勸告も耳に入れず目暴目楽して空しく床上に排源の夢をむさぼりし事も有りき。

窮措大の常とは云へ十五六才の頃より食牛の氣增大し空理空想を逞ふし夢にも現にも其の之に近からん事を希ひき。而して好で古今の英雄偉人の傳記を讀めり、而して好で其の成功を見て其の人を慕ひ其の像を壁に貼り日夜其の風に習ひ己が行を其の英傑に擬し旨ら英雄然振舞し事も有りき。然れども其の缺點を知り失敗を見ては敬慕の念も頓に減し意を又他の偉人を移せり斯の如くせし事幾百千床其の肖像其の傳記机上に狼籍して麺祭魚の如きものなりき而して深く腦裡に透徹して尚頭底に存するもの數十人若し吾が行ひ吾が思ひ吾が愛慕し理想とせる豪傑に總て近而かば何事も頭角を表さぬものなからん若干才を以て立たばナポレオン　アレキサンダー　をも征服し吾が大山將軍の陸に東郷提督の海に於ける大捷にも劣るまじき成功するを得ん。宗教界に入らば釋迦　キリストにも優らん舌を弄ばんか縱横の謀忽ち成るを得ん。心を内政に用ひば唐虞三代の治にも比るを得るや疑なし。

あはれ吾が才智非凡萬事皆古今の英雄に皆べ賞せらるゝを得べしされど鶴に騎て揚州に遊ぶ能ず吾又如何せん。一を撰で之に進まば必ず成功するあらん

木曾八景

福田寛二

德音寺晩鐘

黄昏の霞は立ちこめ行く頃、余は德音寺の境内に佇めぬ……名も知れぬ無數の鳥は妙音を弄して鳴く

音は坐ろ悲しくなりぬ。

寺は敢て華麗と云ふにあらず、只森嚴にして侵し難き心地す、其の背後の森林鬱々として共に昔日の面影を止どめり、あゝ此の靜かなる寺幾多の勇子の血流したるらむ、彼方には旭將軍の墳墓あり將軍逝いて已に數百年の星霜經ふ余は瞑目して將軍の榮光を思慕す又賴朝に殺されたるを聯想し、悲愁の谷り哀怨の淵に沈めり、折しも青葉を渡る一陣の風……あはれこの靜かなる墓畔の光景よ、實に汝こそ憐れなる風姿止めるにあらずや。月は今峨々たる峻山の一角に昇り其の淋しく青白く、たゆたふやうなる光りを投げぬ。やせ衰たる老僧鐘樓にのぼり古鐘をつきだしぬ……一杵二杵との鐘聲、夜寂を破りて段々として昔日の榮枯を訴へるが如く、舊年の死を弔ふが如し

駒ヶ獄の夕照

昨日は胡蝶のひら〳〵と舞ひ下るが如き、泡雪は降りて木々の木梢に匂へなき花を咲かせ、見渡す限り野山白皚々として、只一つの色白妙にぞ匂へたり。然れども今朝の雪の爲に消ゑ果てぬ

余は書齋にゐたりしが　書に嫌きて、散歩に行かんと只一人、木曾川の邊を辿りぬ。四眺すれば　四方山岳重疊し、千里につらなり、連綿として國と國との境を綴りぬ、其の中に一きわ目だつは駒ヶ嶽なり駒ヶ嶽の頂に一面の雪は實に駒ヶ嶽の秀色神釋を十倍せしむるのみならず、更に四圍の大景に眼晴を點す木曾の景は駒ヶ嶽にあり、駒ヶ嶽の景は雪よあり

折しも天陽西山に傾き餘輝を駒ヶ嶽の山上に投げぬ、一面の白妙も一色の紅に染めされて油繪其のまゝの景色、見よ金色の夕雲は天然自然の美を示しつゝありあゝ美觀限りなし。雄大なるかな夕照、偉大なるかな夕ばゑ

御嶽暮雪

夢より淡き殘月の下、涼しき露にゐみこぼれる牡丹の風情又なか〳〵をかし

余は昨日に增したる花を數へながら枝折戸を開け出づれば涼風一しきり麥浪起りぬ

あふぎ見れば、御嶽山容嚴然として天を擎げて立ちたる山の姿の男々しさよ、男々しき姿の御嶽も白衣をぬぎて早や鬱々たる碧の衣を着し只、頭に數條の雪を冠れるのみ

あゝ男々しき御嶽よ、余は汝の透麗なる姿を愛す、余は汝をして第二の富士と呼ばんか、汝よ永遠に其の透麗なる姿をたもてよや。

其の數條の雪は恰も御嶽の脂粉を施こしたるが如くはた、天然の色これ見よがしと云へるが如し。

其の數條の雪日に〳〵消ゑうせさゝやかなる水となり巖根を通りて流れ行き終に木曾川に合するなり最早運命近き御嶽の暮雪かな、

棧　朝　霞

東天ほのぼのと明け行く頃、余は上野屋と云ふ茶店に憩すみぬ

こゝゞ世に知られたる棧のありし所なり、芭蕉の句に曰く「かけはしや命をからむ蔦かつら」

木曾川の水は岩を噛みて銀波躍り、淵をなしては瑠璃色を堪へ、右に曲り左にうねりて遂よ此の棧の下へ流こめば河幅益々大となる、深さ益々深くなり、油を流したるが如き靜水なりぬ、兩岸には、帙朦たる綠樹の影を宿す、碧潭彌よ碧なり。淵水漾々、山麓を繞り、樹木鬱蒼翠綠滴らんとし淙々の響颯々の聲耳を樂しめ目を怡しむ

見渡せば一面の朝霞たつこめ手拭に頰かむりしたる女舟にて河上を、よこぎり行くも模糊漂渺朦朧として幻の如し。

折しも余に年は十四五、花ならば蕾花顏紅く綠鬢散り吹く微風なびかせながら赤のたすきを懸けた、乙女子、あんころ餅を進めぬ

河上の朝霞晴れて、一羽の茶褐色の鳥すつと河水を凉めて飛び行きぬ。

寂覺の夜雨

日は刻一刻と暮れ行く夜の幕に包まり行きぬ
春雨しと〳〵と降りぬ、余は孤獨の淋しさをしみじみ感じて數百里を去る古郷を何となく戀しくなりぬ
此の臨川寺の側に流れ行く木曾川、此々に至りて河幅益々狹ふなりて碧色をたゝい、河底愈々深し
過ぎし昔、この塲所にて浦島太郎君の、釣垂りしとやら、寺の横の、さゝやかなる御堂には、浦島君の
釣竿今尙古色蒼然として昔日の面景をかたるが如しあゝ、余は此れを見るごとに、浦嶋君を想像して何
となく彼の君と握手したる心地ぞしたり
木々の枝葉より落つる雫はしと〳〵と幽なる音をたてつ愈々淋しさ悲しさいとまさりぬ、

風越山の晴嵐

余は只茫然として滑川橋に佇めぬ、駒ヶ嶽より流れ出づる水は余の佇める橋の下にさゝやかなる歌をう
たひつゝ、靜かに果てしなく流れ去りぬ、あゝ其の水の清き事、水晶の其れの如く其の底に無數の小石
鮮明にして何となく仙境にゐる心地そせらる。
橋の袂に風致林あり、其の風致林の宜しき事、あの細々としたる木樹には龍田姫の織りなせる紅葉は、
そよ〳〵と吹く風ごとにひら〳〵と散りて二ひら三ひら川に落ちぬる。……
余は徐に登りぬ、四邊は紅の繪具を流したるが如き芝草、恰も奈良の若草山を見るが如し。「但し余の登
りしは風越山なり」
折しも、西山に垂ん〳〵とする夕日の光りを受けて四邊の芝草からくれなゐの色、匂へぬ。
何處より來りしか余の身の上に落ちたる一葉の楓、いと麗しく、秋の紅葉は匂へなきも其の色にはいて
は三月の花よりも美し。日は西山に落つ、西空の雲紅に染まり、やがて黑くなり、終に下界は夜の幕
に包まれけり。

小野瀑布

炎熱燒くが如き夏の一日、余之暑さに堪へ得ずなりたれば、小野の瀑布に行かんと木曾路を西へ辿り行
きぬ。
四眺すれば、木として茂らざるはなく、草として榮ねざるなし、綠の色濃き夏木立こそ、春の花にも劣
らざりき。近く遠く蟬の聲喧しく
いつしか目的地なる小野瀑布に着きたり、背後には木曾川潺湲として始終自然の琴を彈じぬ。
目然には名高き小野瀑布數丈碎點飛灑、濛々として一片の細霧なし。余は此の瀑布を見て、日光の華嚴
の瀧思へ藤村操氏を連想し、余も彼れの如くに此の瀑布に身を投せんと思へども、死ぬること能はざる
を自覺し思わず身は振ひぬ。
瀑布は餘沫飛し空に漲りて下ること驟雨の如く衣布盡く濕ふ
あゝこの壯大なる瀑布を見て玉なし汗は氷りとなりて今日の暑さも頓に忘れ、げに夏の命は瀑布なるか
な。
想ふに此の瀑布は日幾多の旅人の疲を癒するとぞ……

與川の秋月

諸行無常と告渡る鐘の音幽かに、秋野を響き渡れり。桔梗花萩の花、かしこ　こゝにほのかに咲き匂へ
たるを見る、あら憐れや余の足下に白萩の踏みにぢられて花弊所々に散在せり
松蟲鈴蟲いとゞ悲しきに鳴き出しぬ、木梢を渡る秋風も何となく心細し
東山の一角より月昇りて皎々たる光りを下界に送りぬ、月の榜へ二三の星影燦然として照れ渡るなり。
やよなつかしき月姫よ余は汝を見て奇しき思想の胸に浮びるなり
月姫よ、汝は山を越ゑ野を越ゑて、彼方に住みる兩親を余を照すが如く照せるか？

月光益々凜として冴わ〳〵ぬ、夜はやう〳〵更け行きて、寂として音なし、與川の野原には余と月と余の影とのみ!!!……。

我輩は貧乏である

M　K　生

我輩は亦貧、洗ふが如く日々饑餓として日を送るものである、有體にいへば斯くせざれば勉學する事も出來ず動もすれば路頭に迷はねばならぬからである實にはかなきが如く哀れなるが如く悲しきが如く又心細いやうな狀態であるが、然し樂み亦自ら此中に在りて或は金持に優ることもあらんと自信するのである。故に我輩は貧乏であることを公言して自若たる所以なのである。

常に美味に飽く人は美味に馴れて美味を美味と知らないから會ま美味なきに逢へば忽ち苦惰の起ること勿論であるが之れに反して我輩共の如く常に粗食に馴るゝものは粗食を粗食と覺へずして粗食に甘んずるものであるから若しも偶ま美味にありつくときは其愉快さ加減は到底金持共の窺ひ知る所でなからうと思ふ。

加之我輩共の如き貧乏人は盜賊の恐れもなければ金錢の無心を言掛けらるゝの心配もなく勿論借り倒されるなどゝいふ氣遣ひは微頭徹尾知らないのである。千兩持ちが俄かに五百兩の損をすれば石で手を詰めたやうに氣を痛めるものであるが我輩共の貧乏人から見るときはまだ殘つた五百兩の身代決して氣を打つやうな事もあるまじと思へるがうこが金持ちの意久地なしで一寸した事にも心を苦め胸を痛めた揚句の果てには頭痛鉢巻きで呻吟して大病人となるものが多く實に氣の毒千萬、何んとも彼とも申上げやうのない次第である。

我輩は低廉な食費と舍費を拂ふて寄宿舍の裏二階に住居するものである。屋根葺根繼き疊替へなどの面倒臭き世話もなければ町内に何事があつても一向頓着する必要もなく道具も數多からざれば宿替にも造作なく二ばんや三ばんと寐て居て消防の苦勞を察し連鐘の時はむつくと跳ね起きオイソレホイと催かばかりの書籍を突包んで脊負出せば跡には何も心を置く事更になく實に氣樂千萬言はん方なき次第である

が之れに反して諸所に店や家屋敷などを持ちし人達は大時計の音を聞てさへ胸、先づどきつき雨にも風にも地震にも雷にも犬の唸き聲にも總てに心遣ひをなし其度び毎にちりぢり壽命を縮めねばならぬのである。

多勢の人を召抱へて傀儡師の人形に遣はるゝやうに年中朝から晩まで此人達に遣はれて榮燿榮華をなすは外見からは一寸羨ましいやうに感じないではないが併し其間の氣苦勞や氣骨の折れるといふものは到底吾々門外漢の豫想し得らるゝものでなからうと思ふ然し我輩共の貧乏人と少々異ならうと思はれる所は御主人か若くは妻君達の死なれたときゐ次ぎの室でひそひそ話しをするものゝ多いのと葬式が派出やがて會葬者がぞろぞろ其後に附き從ふ位ゐが關の山なのである。

我輩は貧乏である。到底金持ちの眞似は出來ないさる代り金持ちも亦我輩共の眞似はかりそめにも出來なからうと思ふ我輩は年中休みなしに手足を勞し又精神をも程よく遣ひ決してどんな事にも氣兼ねなどをすることはないだから持て生れた壽命だけは十分に生き延びることも出來且つ平素病氣もしなければ藥一服呑んだこともないのであるうこへ行くと金持ちは種々に氣兼や氣苦勞が多く衛生を守る事も出來ず身体を害することのみであるから一寸したことにも忽ち病氣にとりつかれ且つ壽命を縮めて永生きをすることの出來ないもので實に氣の毒とも何とも申上げやうのない次第と謂はねばならぬ。

右文中舍費云々を以てMK生は在校生なるを自白しあり其の學生が薄情なやうーなどゝの御責めは御ことはり申候小生は一人の貧困屋となりかはりて只目的とする滑稽眞理を現出せしのみに有之候以上

木曾の槐浮世の人の土産かな
雲雀より上にやすらふ峠かな　　芭蕉

池中の魚

遠山旭子

さる御寺の池の中で魚が嘶を初めた、今試に人間界に其大意を紹介しよふ

鮒曰く、人間ほど依怙贔負で無慈悲な恐ろしいものはない、金魚嬢や鮒鯉殿は水上で自由に遊んで居ても妾の奇麗な爲却て餌をくれて可愛がるが、若し自分等が一寸でも妾を見せるが最後、泥の中迄深い出されて親子兄弟、生きながら或は身を裂かれて火に炙られ又は毒酒を呑まされて釜煮にされ其上嫌な妾などゝ辱かしめられて、慾心の犠牲となつてつきぬ怨みを殘すのである、かよふな殘害酷忍な所行をして萬物の靈長だの宗教家だの慈善だ博愛だと我儘勝手な熱を吹いて居る、人間ほど同情のない恐ろしいものはない、自分等は害されこそすれ一度でも人間の自由を損じた覺はないではないか、

金魚は如何にも同情に堪へぬと云ふ樣子で慰めながらの述懐

鰌どん御尤もですよ、だがおまへばかりではありません、妾共とて中々見かけによらぬ憂き苦勞、水寫の足掻ひまなき心の中を聞いて下さい、もと〳〵人間が妾共を可愛がるのも心の底より出づる慈悲ではなくて、いはゞ自分の眼を樂しませる慾からゆへ、見たい時こう手をたゝいたり、餌をくれたりしますが、常には打捨てゝ餌もくれず、僅かに水垢に餓を凌ぐのみですから、適々丸麩でも投げられると友達の見界もなくて大口開いて打爭ひ姫御前の淺ましい餓鬼妾、それを見て樂しうな人の心こそ怨めしいではありませんか、まだそれのみではなく、妾共は生れると間もなく綠日の曝し物にせられ、中にも不具の形に生るればとりわけ見世物扱ひ、妾の美しいのや不具なのが仇となつて憂き川竹ならぬ池の中や瓶の中に浮き沈みほんとに果敢ない身の行末、それを少しも察せぬ人間こう、げに鬼よ、修羅よ、惡魔よ、

折しも島の影より勢すさまじく突進し來つた鮒鯉は忽ち鰌をとゞめ、いかにも愉快そふな聲でさとして

いはく、

又しても鰌どんと金魚嬢との歎言、もう聞きたくもないが池中同棲の好誼に今一度教誨を加へよふ二君ともよくおきゝなさい、

全体人間を怨むよりはまず自分共の身分を顧みねばならぬ、此頃人間界でも人生問題として自己の身を解決するが生存上第一義であると云ふ、苟も自分の身の眞想も認め得ないでむやみに水上の人を無慈悲であると怨むのは丁度人間が自己の愚を知らないで徒らに親を怨み君上を誹り佛祖を蔑にすると同樣である、われ〳〵の身分は何だ畜生ではないか、畜生中でもいふに甲斐ない一小魚介で、纔な池を世界として漸く人間の惠によつて同類相害の危難を逃れて居る、若し果報から考へたら分に過ぎたもので此れ寺の和尚さんに感謝せねばならぬ筈だ、うう無げに人のみ怨むのはよろしくない何でも衆生は我身の因緣と云ふ事をよく考へて他を怨む前に自分を顧みねばならぬ、卽ち自己のまことの價値もそれからわかり始めるのである、而し此心得は吾等のみでない人間界でも守らねばならぬ、また人間として畜生を叨りに殺したり弄んだりするのは猶よくない仰で見なさい、天に輝いて居る日天子は萬物に光を與ふるに區別はせぬ御佛のねん慈悲の目には畜生も人間も同じく救はれる迷の愚物である、しかるに畜生にも勝れる智惠分別ある人間が咲美なるものは之を殺して咲ひ妾の美しいものは之を執へて目の樂しみとして何等の同情も我等の身の上によせないと云ふのは、二君のいゝ通りまことに我等畜生にも劣つた所行で、適々人間に生れた甲斐もなく再び吾々仲間入をするのであらう、とりはけ此等の和尚さん方は我等が天然の美質と働作とに於てつねに大なる教訓を與へて居る事も觀取し得ないで慾心にまなこくらみ夜な〳〵小僧と鰌漁り、御覽なさい生きながらの鰌すがた、八の字髭で泥水の中で浮いたり沈んだり、人を導く和尚さんがかような樣だから人間界の咬合は、智惠がある丈けそれだけきつと吾等畜生界よりも恐ろしい世界に相違ない、假令萬物の靈長であると自負し、よしやい

か程學問才智があつたとて、この一小池中のかよゑいわれわれに一片の同情さへ起さないものが何にならう、鮒さん金魚嬢よ、私は天を怨みず人を尤めず、何事も恨みないで不言實行！感謝しつくせぬ天地のあらゆる惠みを此一小池中にあつめ春夏秋冬月は下りて澄み、日は上りて温む、風となり雨となりはた妙ぬ香りの蓮華の咲きて、私の衣食住を壯嚴する、其中に悠々自適、池中法界の妙味を受け娯しい月日を送るのである、されはそも〳〵何故でしよう、即ち天地萬物に對して何の隔てもせぬ慈悲限りない久遠劫來の唯一本佛の御惠です其本佛のたん眼には人間と畜生とに慈念の別はない吾々も直ちに其御子である、此本佛の御功德によつて美しい姿や勇しい働作をなし、いふ可からざる味をうなへて居るので、吾等は人間の惡心を轉して高く潔き想を起さしむる爲、また其高潔の想ひを身に行ひて天地を靡清する一分の力たる可く本佛の御使として或は形を以てし或は身を捨てゝ大なる佛事を實行せんとて此池中に影現したのである、されば身を殺すも怨まざる鮒さんの仁と、形の美を以て善心を起さしめんとの金魚嬢の優しき心と一致して魚介のあらん限りを賭し、人間界の殘忍無慈悲を救はふではないか、

時に坊さん四五名地邊に來り、かの鯉鯉を指して云あんなのを燒いて食たら酒が飲め樣、たゞ見るあの鯉鯉、一直線に進み來りて、水面一擊高く空中ゑ飛躍する事尺餘、……

開校記念日

澤木嘆月

丁度此年で九年目の創立記念日だとか云つて前々日から色々忙わしく、余與の準備に取りかゝつた、今年は前よりも層一層、面白く愉快に祝はうとの皆の考へで、初から其積りでかゝつた。

何でも、五月の半の事だから大分氣候も暖たかくて、何をするにも好都合だつた。

幸ひ十五日は好天氣で、朝早くから校庭には萬國旗が一面、都會の四角の電話線の樣にはりまわされた。

何處へ行つてもヒタヒタと、心地よい春風に靡つては、音を立てゝ居る。

やがて東の山から光輝く太陽が、いかにも「木曾山林學校の創立記念日を祝す」と云つた樣に輝らした

それで萬國旗もいよいよ勢を得て來た樣だ。

十時頃祝賀式場に集つて式を始め校長先生の演說あつて解散した、それからは各自思い思いに遊ぶ。今夜の準備するやらで、ごたごた、午後になつた。

午後の四時頃小使が得意顏にチリンチリンと集れの鈴を振つた。

一同校友會場で竹皮包の赤飯をほだされて、誰を見ても皆喜び嬉しそうに、箸を取つて赤飯も、のこりなく腹に納めた其時は最早とくに日は西の山にかくれて、そろそろあたりは暮れかゝつた、諸々の寺では入相の鐘を打つて居る。

そこで今度は前の萬國旗にかへて赤い提灯をつけた、町の人々は皆、こゝに目を注いだろうと僕は思ふ

夜會は五時に始まつた開會の辭や、五分間演說がすんでいよいよ、余與に取りかゝつた其場所は、校舍の雨中体操場だ、周圍の壁には一面赤青の漫幕をはりかざし、正面には四つの敎臺を並べ其上に黑き机に青き毛氈をかけた、生徒は周圍にそつて、疊の上に大安座をかいて、いまやおそしと、余與開始を待ちかねへて居る。

新体、詩詩吟で皆耳をすまして、精神も空中に飛んで居るかの樣、あゝあの靜かになつた所でさわやかな聲して「八道の山よ……」考ゆれば考ゆる程、愉快で愉快でならぬ。

一方北面には音樂隊が偉勢よく嘶して居る。――續いて勇壯活潑な劍舞、琵琶歌は、河中島、謠曲は羅生門等恰其現場にひき入られた樣な氣がして恐しいやうな、嬉しいやうで終つた。

手品は、化學應用等で、如何に文明開化等世の中でも、到底其種は、見え出だせぬ位、奇々妙々！？

活人畫も上出來で拍子喝采を得た。

最後の茶盆狂言は「將に滴らんとする露の雫」と題して皆熱心に我を忘れて演じた。其主意は「朋友に親情を盡す」で、滑稽の所或いは涙を流して同情を表する所もあつて大喝采。未だ行ふ余興は多少あつた然し併しゆるさぬは時間。先づこれで木曾山林學校萬歳　木曾山林學校萬々歳の聲諸共に閉會した。其時は最早十一時頃で草木其他の自然物はねむりかゝつたやうだ名も知らぬ地虫の細い聲して夜は靜かに更けて行く。

會員は皆顏に滿足の色をほのめかしてくちぐちに余輿の事ども語りながら分れた。（終り）

春の一日

福田寛二

瑞雲棚き紫匂ふ東の空、美しくやがて、赫々としてさしのぼる朝日、

遠近に鳴く鶏の聲、空には塒を出でし諸鳥の音、幽かにも、嗚呼、げにも長閑なるは、春の朝かな。

野は若草萌ゑ出でゝ、香りも床しくなりまさりぬ、余は畑の細道を、葉末の露に衣をひきて行けば、菫蒲公英、蓮草、等の花、人の心を慰め顏に昇る朝日に、顏ゆれて愛嬌の露をこぼすなり。綠なす麥の葉やうゝに伸びて、畑を耕す人多く、其の背を照す日の光りうらゝと。菜花は黃色燦爛として目に映ずるさま、いと面白し、黃なる胡蝶一つひらゝと、花の上に舞をまふ樣實に畫にも書きたき心地しぬ、

歩を轉じて小川の邊に佇めて、清く流れ行く水の行末を見詰めぬ、折しも、四輪、二輪と靜かに流れ行く櫻の花瓣、やよ懷かしき花瓣よなれも此の水と共に流れ行き木曾川と合し、終に渺茫たる大海に流れ着くや、いかに陽炎やうゝ高くなりぬ

あゝ春の晝は愉快なり

余は只一人長福寺のあたりを逍遙す、見渡ば、渺々として末遠く流れ去る木曾川、右は幾百年も數ず知れぬ古木鬱々として生ひ茂り貴荷晴く、木曾山中の懷にもれず、四方の山、新綠の香高く御嶽、駒嶽とは山容嚴然として聳ゑ白雲のきれ〳〵一つ〳〵其のあたりより湧き出でぬ、彼方に赤き數本の鳥居見ゑて山路のうねりる果てぞ畫の如き稻荷の林かな、長福寺、裁判所はた金比羅山の櫻花、爛熳として咲き匂ひども悲しへ哉、一陣の微風の爲にひらゝと空を舞ふて落花しぬ、あゝ朝日のかげに匂へ出でゝは山和心のいさぎよきに譬へられ、もろ人の風雅なる心に憧れしめ、世に花は多けれど櫻にまさる花はなし、憐れこの櫻よ、今は爛熳として咲き亂れ微風の爲に散るとは、をしき哉

金比羅山のうねり道を、絹張りのアンブレラーさして行く乙女子三人、一吹く風に赤のリボンをひらゝと旋きぬ、彼の乙女子も花を賞する雅人なりや、吾が校の校前には桃の花赤く艶滉にしてゆかし、陽炎やうゝ山の端に落つ黃昏頃となりぬ。

靜かなる夕となりぬ。

西山の端には、夕日に染められたる白雲、紅となりて漂ひり、山路を馬の鈴の音、いさましく鳴らして辿りくる二八乙女子、白の手拭にて頰かむりし、小さなる辨當風呂敷包を右の肩より左へかけて、余の前を、さも恥そーに頭をうな垂れて通り行きぬ、あゝいづこの賤が家の乙女子なるか？白の手拭、風呂敷包頭をうな垂れたる有樣、何となく懷しく戀しくはた憐れなる心地ぞせらる、ふと横を見れば、花に狂ひし胡蝶疲れし爲めか靜かに飛び行きて、一夜の露の床よや眠らん、日は刻一刻と暮れ行きて、遠寺の鐘の音うら淋しく野を超ゑ、山を超ゑ、川を超ゑて響びき渡りぬ、

春の夜は淋しきかな、

遠くの電燈の光りは螢の光りの如く、幽かに輝き出でぬ、月は皎々として、木間より冷かなる光りを、寄宿舍の窓に透り草の上にをく露きら〳〵として、月光に映じ其の美くしさ限りなし、

此の時余は思わず追想に更けりぬ。あゝ昨年の花の盛りの中頃、親愛掬すべき神戸君と共に皎々たる月

光の下に親友の契り結び、前途幾多の障害を排し、希望の花を咲かせ、馨香馥郁として人の心を襲ふの約束を定め、其の後飾らず、隠さず、怨まず、憤らず、胸襟を破れて、淡笑し勞逸苦難を共にして、至誠相盡したる、彼の友は余と別れて二十四日を經やして、永遠に覺みざる眠りに置けたりし事は、昨日の手紙にて知りたり、あの時彼の君と、余とを照したる此の月、今は早や彼の君を照さずして余を照すとは、怨み多き月、余は此の月を見て無盡の感慨に堪へざるなり。折しも消燈寂寞を破つて舍内響き渡りぬ余は思わず一涙……四月十六日）

蝶飛ふや外出つゝしむかゝり人

丶星放言

仲澤丶星子

○成功せんと欲する者は、必す失敗すべし、一度は須らく零落すべし、尤姑息的の失敗にては無効也、宜しく大失敗大零落をなすべし、是則ち盛衰樂なり、刺激剤也、然る後に於て結ぶ成功の實は健全なる成功也、豪壯なる成功なり。

○勞せずして千金を得んよりは、刻苦して百金を得んに若かず、黄金を望む名譽を願ふな、黄金名譽何するものぞ、黄金とは身を倒する道具にして、名譽とは一瞬一刻の虚榮なり。

○女は俗物なり、困つた代物なり、軟骨動物なり、不吉の辭なり、早や其時は立身徐行の絶望なり、男たるもの、女人禁制なる戸大の標札を額に貼付し銀くべきなり。

○破廉痴漢に別嬪を見すべからず、野暮漢に法律を說くべからず、唖に語をすべからず、文士に經濟學をいふべからず、盜賊に人情を說くべからず。

○青年は人生の花にして、名譽の飯と黄金の美酒を熱望する動物なり。而して虚榮の羽を以て、冒峻の坂を超ゑたる鳥なり、青年期を無事に通過せば成年期に於て成功の靈花を摘み得べし。

○人生は永劫の戰鬪にして、社會の無限の奮戰場裡也、故に人間たるもの、沈勇の鎧を纒ひ鋭敏の槍と勇斷の太刀を備へ、奮進の駒は鞭つて成功の參謀本部を占領する覺悟なかるべからず、綿密ゑ失敗の間隙に注意し機會運用の作戰計策を講じ以て攀壁の覺悟なかるべからず、而して快樂的戰鬪てふ秘訣を要す。

○富士山より高き雲はあれど登せざるは何故ぞ、そは雲は浮動輕薄なるが故なり。雲は薄志弱行の小人なり一寸見た所はスチキにわらさうなり、然るに風吹けば飛び、雨降れば消わるなり、富士は泰然自若として動かざる偉大人なり、大聖賢也、風吹くとも雨ふるとも尙動搖せざるなり、人は須らく富士山的たるべし。

○苦々しき顏して人に對するは恐るゝに足らず、笑顏以て人に對するは奥恐ろしき人物也、前者は麥のイガの如く、後者は薔薇の花の如し、恐るべき刺針隱れ居ることを忘るな。

觸面記

雄猛突進子

○世に惡む可きものは富豪に華族だとは一般社會の文字あり氣力あるものゝ痛語である、富豪華族は彼等の力をかさく見て居ると、日本に對した露西亞のやふな噛臍の悔があるよ。

○世に滑稽なのは、腰辨の安威張である今時分明治初年の夢を見て居れば世は大平である。

○世に生地のないのは、坊さんの書生風である、何故俗が好なら潔よく俗にならぬか、とは云ふものゝ眞の坊さんのない世界となり致方はあるまい。

○世に面惡いのは蝦茶式部の高慢づらである、一皮剝けば濃汁欲血溢れん計りの分齋である。

○世に嘘つばちの多いのは女郎の手拭と當世文士の同情的文字である、ウツカリ眞に受けよふものなら尻の毛迄むしられる恐れがある。

○世に氣骨のないのは、文學者と官員樣である、若し骨があると安樂に暮せない事請合

○世にウジ虫的のものは、ハイカラ書生である、それでは我武士道の名れれだ、よろしく破れ袴の書生さんたる可しだ、末は博士か……だネ

思ひ出

木村岳泉

「破れたる哉吾が思ひ」蒼穹に走れるの夕朝空にきらめく琥珀の薄雲のひらめくしばしの色よ人は逝き人は生る嗚呼飛び行く姮娥唯れかはこれを得留めん時はすべり日は流れて五月雨の後こゝに早年半

「さみだれの夜」軒の漏戸はぞ漏る火影をうけて落つる音忘れめや其の音其の夜わが祖父君の逝きまし丶日ぞ燈火の影明き下冷かに笑めるむくろと横はりまし丶時出すべき涕の所を知らず只胸のみをどりて吾れさへ覺へ得ざりしを幽冥靈を奪ひし憂ひの時刻悲痛の懷ひ破れし胸に響ける時ゆ吾れ陰林咽ぶ夕の野寺を訪うて冷の御墓にみぞりの苦に暗き道にいかに身にしむ悲しびの涙をしもそゝぎしや

「吾が十年の春」去年の雪まだ深山路に消ゑ殘る頃ちぎり深き吾が友を失ひぬ野邊御送の鐘の音の丶かに胸を裂くべう悲しくも名殘惜しうも響けるかその折友の父君たへずうなだれ給へるに早棺に土覆して

「御訣れむや」との給へる御言葉のいかに〳〵悲しくもい丶しれぬやるせなき涙の袖をうるほし丶よ

思へばそも昔幸なき吾身乾くに間なき湧哉暖かきゆりかごに這ひよらんとせし幼な子はそを黑き葬衣のひだたに覆はれぬあ丶友よよるべなき身の世あらん程御空より後見して賜はれな

くさぐさ

柳澤章二

◎社會は多數の人が隊伍を爲して進行するが如きものなり隊伍をなしてゆくことなれば路が思ふようにはかどらず逸足の士ははが行く思ふべし一方には脚のあまり弱きは隊伍に加はる事能はざるべし

◎脚の餘りに弱きものよ請ふ努力して其歩を早めよ自から力めずして人情は輕薄なり社會は暗黑なりなどゝ愚痴をこぼすわこれ畢竟社會も知らざる也

◎脚の餘りに強きものよ請ふ隊伍の規則を守りて少し歩調を緩くせよ隊伍の歩調の遲きは歩むを得ざるなりあせる莫れ遲けれども終に行くべき所には行くなり而るに之を察せずに安りに世を馬鹿にし人を侮るは之も畢竟社會を知らざるなり

◎隊伍を爲す以上は相互に守るべき規則あり社會に習慣禮義道德法律などあるも亦自然の勢なり隊伍の中にありて隊伍の規則を無視するはあまりに無智なり知りて之をなすは餘りゝ我儘なり他人の妨なり隊伍の外に迫ひ出すなり

◎隊伍をなせば從て主導者なかるべからず國家の主首は即主導者なり主導者あるを以て隊伍はじめてとゝのふ各人心するを得るなりもし主導者なくありとも其命を奉せずんば隊伍は亂脈なり否各人は安心するを得ざるなり強きものは先んじ弱きものはをくれ右に散り左に散り毫も一致する所なく喧嘩騷動到る所に起りて竟に之れ烏合の象なり團体として何事も出來ず散あらば散んずべしさながら獸類の野にあるに異ならざるなり

小品

木曾の山

無涯

斧の音伏屋の煙岐蘇の流其の上に聳ゆる鬱蒼たる山山、駒ケ嶽の英姿、遠くて御嶽、日本アルプスの連山は北方に、飛彈美濃境の連山、或は奇峭、或は雄偉、根は地に、頭は天に、堂々として立つて居る。果しなき蘇川の流れに屈曲き果てゝ、其れとなく眼を上げると、此等の山々が常に泰然として頭を擡げて居る。

日常生活の饐齪に立雜つて、然も心は挺然として無窮の天に向ふ偉大の人物之實に斯くの如くであらふ。自分は岐蘇の山を見る毎に山が斯く囁く樣に覺ゆるのである。（五月八日朝）

春の恨

楚南生

恨むと云ふ事は惡いことではあるが而かも爛熳と咲き亂れたる花の無慘にも吹き散らせらるゝのを見ては何人も風を怨むるの念を禁ずることは出來まい此怨む心こそ實に美に味方する心で即ち一つの義憤である

凡そ眞の美、眞の樂觀は悲觀の裡に宿る世の中を樂しく浮調子に唯だ馬鹿騷ぎして渡るものは眞の美を知らず眞の樂觀者ではないあはれむべき者である

悲觀ありて樂觀あり汚ありて美あるなり

夏の月

無涯

「人音のやむ時夏の月夜哉」南の天近く夏の月が匂つて居る。眞暗に茂れる裏山の郭公の聲も止むだ。と遠く川上より瀨に送られて高く或は低く、美妙なる尺八の音！、！月は一層冴へ渡る。！

蕪村も斯樣して、月を見たのぢやあるまひか！不圖自分は思ふた。（六月十二日夜）

吾輩の猫感

昌琴

猫は愛らしくもあり、又恐ろしくもある、圓ひ小さな顏に大きな目玉一本一本數へらるゝ樣な口ヒゲをビク〳〵さして、シャクシの樣な手で意味ありそうに御嬢樣の裾にたわむれ遊ぶさまは、ほんとに、かみつきたい程である。

而し五月雨頃のショボ〳〵と際限なく降り續く淋しい夜留守役でも命せられ一人心細く歸りを待て居る時不意に黃い色光のする大きな目玉のヤッコさんニャアーとでも言はれると何んと無く底氣惡しく罪もないものを、追い出し。心ひそかに家人の歸へりの遲きを待ち焦れ立つて見たり、座つて見たり。居場所に困り布團の中にもぐり込む事もある猫はヤッパり魔者かしら。

新体詩

岐蘇の山水

溪水

春千山の花散りて
浮世はなれし深山路の
岩間がくれの蘭の花
その花辨の雫より
流れそめけん小木曾川
むす苔青き岸の邊の
岩にさゝやく水の音
そは山姫の彈琴か
自然の調べ面白く
夕べあしたの峯の雲
五彩(いろあや)に深くうつりては
底に神秘の影きょし

第九回本校創立紀念日を祝して

城麓

浮世離れし仙郷の
山は愈々神さびて
立てる姿をうつすなる
常久に流れて空ひたす
それ濁流に魚すます
芙蓉に高くけたはしき
其の名は古來永劫に
檜さわらや高野槇
五木の譽は木曾川の
花咲き花はうつろいて
礎さだめて九年春
心嬉しき今日が日は
其の美しき味いに

(四十二年五月十五日)

(五二)

小木曾の川のゆく水は
伊勢の海へとそゝぐなる
秀麗の地に健兒あり
姿雄々しき御嶽山
高く響きし木曾山の
あすひ、ねすこの常緑なる
流れと共に絶ねせしな
年毎榮ゆ我が校も
此年九年の榮あれ
之れ我が開校紀念日ぞ
醉ふて祝はん今日の日を

落日

木村岳泉

唯か知るらん天つ日つ
羊追ふ子のそびらより
夕べの色はせまりきて
まなざし若き新星の
この寂寥を破るとき
遠く落ち行く西の方
暫しは映ゆる夕空に
こもる無言の秘事を
ちぎれちぎれて翔り行く
無心の雲を彩りて
五色に榮ねし夕空も
ほのめく光りかすかにて
今日の名殘を惜みつゝ
山の彼方に薄れ行く
あゝ夕映のその色の
暫しはかなく消ゆる共
やがてはえある光もて
東の海の日にかわれ
夕べの秋の悲しとて
暮れ行く空を望みつゝ
さはな嘆きそ少女子よ
涙に頬をうるほして
嘆けばつらき人の世に
希望の光りほのめかし
無言のさとしあるものを

青葉城

(曉翠子の天地有情)

秋はうつろふ樹々の色に
名のみなりけり青葉山
圖南の翼風弱く
オレンジ色に燃ゆるなる
あゝ美はしき西の空
行淨き老僧の
靜かにきしる落日の
殘る光の白きかな
闇に砦を望むごと
森は黑くも聳ねたり
礎なせる下草は
風吹くのべに靡きつゝ
千草の花も萎みては
蝶の羽袖や寒からむ
などや眩き殘照の
沈む光りのかく薄き
またゝき映ゆる夕空に
恨は永く名は高き
君が城あと今いかに。
弦月落ちて宵暗の
星影凄し廣瀬川
汝がこゝろねを面影を。
恨むか咽ふか音寒く
川波たちて小夜更けて
秋も流れむ水遠く。

詩

遠山

夜と死

(*Byron White*, 此詩ハ英詩中ニテ最モ簡カナル短詩ナリト謂サラモ)

げにげに夜の不思議さよ
我等が始祖(アダムノコ)が神の
御告によりて、始めて夜を知りし時、
始めて其名を聞きし時、——
彼はふるひたのゝきたりし
彼は夜てふものゝ到來を氣づかひぬ。

詩

されど夜は來れり
來りし夜は如何なりし、――
可愛の構造や
空には輝やく星清く
地にはうるほす露の幕
かくて人の心もやすらけし――
誰か思はん明光々たる陽光の
中にかくも美しの夜のひそまんとは
誰か知らむ紅塵万丈の中無數に
星の世界のあらんとは――
人はおそるゝ死
死の前には英雄も顏色なし
されど思へ、――
汝の恐るゝは死を知らざるが爲なるを。
極樂淨土はあの世のもの。

和歌

王瀧村鞍馬橋をみて　安井正夫

たかきなはよにきこゆねと王瀧のくらまにまさる
橋はあらしな

師範學校に轉任せられたる
有川先生の別れに　右仝人

みな人のなつはとしどふ木曾山の夏をもまたてき
みはゆくらん

○折にふれて　遠山

さけはちるものなりながらことさらに惜きは宿の
はちの梅かな

我宿を春の夕に訪ふ友のたもとにかすむはるの夜
の月

○池上の螢　仲澤ゝ星子

かきくらし雨のふる夜も池水に光をみせてとふ螢
かな

○里夕立

山おろしの風も烈しき音たてゝふもとの里にかゝ
る夕立

○夕涼　嘆月

夕立は向いの村にかゝりけり吹く風涼し庭の松か
枝

俳句

遠山

△春氣雜詠

散る花の心をのせて春の水
畑打ちて疑心もよし夜の雨
春風に胡蝶をまねくすみれ哉
鶯の聲うすらけり春のよい

△夏の詠

夕立で靜になりぬ蟬の聲
田の中に三ッ四ッ見ゆる檜笠

△雜

白酒につかれ忘るゝ峠茶屋
殘雪に千年の松の落葉かな
名經の埋る古刹や眠る山

牧捨てゝ民草もなし山霞る

△　柳水

水產やのとかに反す春の山

△夏　嘆月

駒とめて木の下蔭や夏の川

△農夫

杢兵の力自慢や麥の秋

こんなもの　當季駄酒落

フラワー冠者

△本年度三學年生修學旅行

舟で越す天龍川や風薰る

△二學年生修學旅行

夕涼み今日の汗肌晒しけり

△西澤河野兩先生を迎ふ

舟の來て見榮へあるなり川菖蒲

△夏の岐蘇路

涼しさや岐蘇二十里を青嵐

△學校新築案昨年度通常縣會

無事通過す。……竣成の曉を待

俳　句

活けた藤の早く咲かばと思ふ哉

△靜寂なる木曾の風致を偲ふ

別れしは思ひ起しぬ不如歸

△狼藉たる工事も日一日と進捗し　フラワー冠者

鹽尻奈良井間は既に鐵線の敷設を了へり

白雨に磨き上げたる裸富士

△鳥井峠トンネル貫通の曉は

山吹の下を清水の流れけり

△五月三十一日夜淺間山稀有の大噴火に際し折節山麓旅行中なりし本校三年生の悲觀的風說を信每子に報せられて驚愕措く所を知らざりしか幸にして無事なるを得たりしは何より〳〵

雷も落ちずに止みぬ里の暴れ

△信每紙上の修學旅行記を面白く讀む

透見しる富士の風情や青簾

△創立以來永年勤續の手塚小使を表彰して

雨風を永く耐らへて若の花

△俳星碧梧桐木曾を訪る

卯の花の庵訪ぬる雅人哉

△帝室林野管理局長兼内藏頭渡邊千秋子新に宮内次官を任命され都合三職兼任となる

瓜の蔓屋根の上まで匂いにけり

△右に對する批難の輿論喧びし

成りすぎて小枝危き林檎哉

△機運一變……本校運動部の發達を喜ぶ

衣更五尺男の子の身の輕さ

△群巒を凌げる御嶽山頂郵便局旗の獨り打靡けるさ偉觀なる

白樺の一本目立つ夏木立

◎權現瀧へ林道開通して納涼地となる

千丈の瀧さかしまや青嵐　溪水

◎福島の關屋の跡は鐵道工事の爲め荒れ果てゝ

關跡に椎の一木の繁みかな　仝

雜　錄

可愛らしき林木行李柳の植栽

三　玄　生

◎「春風や、柳のかみをけづるらむ、綠の眉をみだるばかりに」實際青柳の依々として嬌羞の笑を含み垂れては婀娜たる影を潛むる邊り、いと可憐なる林木である、其一種屬たる行李柳に就て見聞せる所を聊かものせむに。

◎種屬及性質　行李柳は楊柳科柳屬の一種なり、元來本邦產楊柳科には二十餘種あり、喬木と灌木とあり、是は後者に屬す、葉は細長にして末端尖り多く對生とす、材は纖維質にて强度の彈力性を有す、温暖寒の三帶共よく生育し極濕地、極乾地に適す。

◎產地　本邦に於ては夙に俱馬、安藝地方に產出せしが岐阜縣下にては十數年來是が栽植に努力し現今本巢、安八、稻葉の三郡稍々多量に產出するに至れり、又東北地方に於ても先年來饑饉荒蕪地救濟の良法たるを認められ續々植栽するに至り、特に宮城縣下の如き有志の熱心斯業を計劃し着々成功途上にあるあり、或は遠からず本邦重要物產として現出するの機あるや疑ひなし。

◎仕立法　矮林作業にして造林法は主として挿條に依る、先づ地拵は極濕地なれば排水溝を設け適宜なる區劃に分ち、極乾地なれば雜草木を苅り拂ひ直に是へ挿條をなす、挿穗は立枝を六七寸に兩端を尖らして切斷し畦間一尺五寸、苗間七寸の列形、又は千鳥形に秋季挿條す、根着きの割合は概して九十五パーセント以上なり、尤も挿條前挿穗を一晝夜間程水に浸し置く事あり、しかすれば根着きよろしと云ふ。

◎手入及保護　手入法は極めて簡單にして唯夏期一二回の雜草木苅拂ひを成すと及補植をなすと等なり

諸害に至りては抵抗力强大なる爲め被害甚だ小なり、唯往々鐵砲蟲蝦、天牛、葉蜂、等の蟲害を蒙る事あり、是が豫防法として强壯なる根株を仕立つる事、排水溝を設くる事、食蟲動物保護、弱木除去等に努力すべし、驅除法には天然驅除と人爲驅除とあり、益蟲保護・天氣現象利用は前者にして器具藥品の使用は後者なり、而して藥品には石油乳劑、松脂合劑、ボルドー合劑、除蟲菊水溶液、モール氏液等あり、但し驅除法を成すに當りては勿論其効力如何、林木に影響如何、經濟上収支得失如何等は各地各時に應じて臨機の所置を要するなり。

◎收量　秋季揷條せしものは翌秋伐期に際し最早四五尺の新枝數本を生ず即ち一町歩生木三百貫を得るなり、滿二年目同七百貫、滿三年目同千五百貫乃至二千貫而して年々秋季根際より一尺乃至一尺五六寸を隔てゝ鎌に依り苅採るものとす。

◎製造順序　先づ秋季伐採せし生木は其儘直に濕氣ある田圃中に悉皆揷央す、蓋し地中水分を吸收せしめ剝皮を容易ならしめんが爲めなり、翌春四月に至り是を一定場所に集注し、皮剝に依り剝皮を成す更に河水に清め數十本宛の束と成し數日間日光に晒し以て乾燥せしむ、白柳と稱す、製造家は是を丸木のまゝ麻糸にて組み織り或は細く割裂し網代となし行李及鞄其他の容器を製す。

◎價格及販路　伐採せし柳は重量にて賣買せらる生木上等一圓に付き十三貫目內外とす、故に滿三年後一町歩年々千五百貫乃至二千貫の収量とすれば粗収入百三十圓乃至百五十四圓とす、其加工品たる行李及鞄は普く各市場に需用せられ延て清韓の海外殊に北米へ向け盛んに輸出せらる、山林會報の商況欄に依れば四十一年度の輸出總額個數六万九千百十五個、價格七万〇百十五圓也。

◎行李柳の將來　現今斯業は全く初歩にあり從て未だ大なる產出を見ずと雖、加工品たる行李及鞄は需用益々增進するの今日、技術の進歩と伴ひ前途愈々多望ならざる可らず、且行李柳は土地の改良に適し、生產力又多大、資金回收期の短速なる苟も林業家は勿論經世家の等く注目を要す可きものと信ずる也。（終）

落葉

宮澤生

落々雜々取る所なく、句々切々甚だ拙きも、秋の落葉是れ春の翠色滴たるが如き、原因をなすを知らば是れ又敢て棄つべきに非らず、然れども落葉と落葉のみ、積んで推をなすも、精金美玉となるなし、綠り濃やかなる水無月上旬朽ち果てし落葉をかき集む。須からく漆樹を植栽すべし。

森林經營の事たるや、其性質よりして多少の例外はあれども普通大面積なるを要す、即ち他の工業又は製造事業の如く一定面積上殆んど無限に其事業を擴張する事能はざるなり、換言すれば大面積上に大なる蓄積を有して大なる利益を擧ぐるを當の得たるものとなす事論を俟たず、普通の場合都市に近き薪炭林の如きを除くの外集約的經營には適せざるものなり。

然るに漆樹植栽の如きと如何、云ふ吾人は容易に小面積に植栽して利あるを、漆樹は其性質上集約的經營に適す、即ち各部分は皆有用なり、是れを指示して以て明にすれば彼の重要物產として盛に輸出せらる、漆器原料たる漆液は勿論、漆液を採取して枯れし幹は土に接する所に使用して蠟分ある爲め水が染み込まざる故果に勝る保存力を持つと云ふ、枝は薪材として用ふる時は油の如く燃ゆ、然のみならず實は蠟を採り、其核は牛馬の飼料として與ふる時は强壯ならしむるに良好なるものなり、又蠟は其用途が甚だ多い、本邦にては鬢付油、蠟燭等になす是れを外國にては多く用ふ卽ち歐米各國にては艶付材料蠟燭原料、織物色澤付、木細工仕上、洗濯仕上、紡績業仕上、蠟紙、藥用、薰物、製革原料其他種々雜多の多額の需用があつて本邦に注文するのである然し何分本邦にても不足であつて注文に應ずる能はずといふ現況誠に殘念の極みなり。

繭へつて本邦漆樹植栽現況を見るに、彼の二百萬圓近くの輸出ある有名な漆器を作るに莫大なる漆液を要す而して其内本邦にて採取する量は凡そ半額なりと云ふ、殘余の半額は如何？有益なる漆樹も植栽少なくして充分なる漆液を採取する能はざる爲め遺憾ながら清國等より輸入を仰ぎつゝあり。

少しく以前に溯つて漆樹植栽の由來を尋ぬるに其昔四十二代　文武天皇の大寶年間に於て上戸百本、中戸七十本、下戸四十本づゝ植栽する事を奬勵されたり、其後藩政に至つても種々適法を設けられてそれ〴〵奬勵されたり、然れ共維新後庶政紊亂せし際著しく減少せり、而して今日に及べり、然るに當局者に於ても漸〻茲に鑑みる所あり、農商務省にては重要林木奬勵法の一着手として昨四十年度より國庫より七萬四千圓を支出せられたり。

尙ほ漆樹は土地利用上有益なるものなり、卽ち害のない限りは田畑の畦畔、川の端等他の事業の行はれざる地積を利用すべし、斯くの如きは空地利用上最も叶ひたるものとなす。

而して漆樹たるや、其栽培容易にして挿木に依り苗木を養成し一回植樹すれば萌芽力强きを以てよく數回の伐採に堪ゆると云ふ。

吾人は山鳥の尾の如き長々しき利益ある、空地利用上有益なる、然も栽培容易なる樹種の植栽を奬むるものなり。

須からく竹を利用すべし。

竹材は東洋の特產にして最も本邦に多く、使用の途も甚だ多く、種類もいと多し、外國へも年々百余万圓の輸出あり。

殊に臺灣の竹林の如き其最も豐富なる阿里山系に於ては鬱蒼たる大叢林をなし附近の雜木林を凌賀する壯觀を呈し居れりと。

然して林木（竹材）は利用上其生產地に於て出來得るだけ加工し以て運搬費の削減を圖り收益を大ならしむる事必要なり。

此點よりして現今多大の需用ある紙となす事十年前英國の製紙技師「ウキリアムライト」氏緬甸に於て試驗せしに始り、我が三菱の經營する製紙所に臺灣斗六廳下に三萬町歩の天然林の得て工場の新築に着手しつゝあり、以て少しく賀すべしと雖も安心するに足らず、聞く凡て植物性纖維を有するものは多少の別はあれ共皆紙となすを得と、竹の如き多く種類あり多量は存在するものゝ大に利用するに至り多大の富源を開拓するに至る事を望むものなり。

都をば霞と共に立ちしかば
秋風ぞ吹く白河の關　　能因

紀　行

明治四十二年度第三學年生
修學旅行記

（一）　五月十七日　（月）　晴

昨朝來の暴風雨は後をも止めず何處にか行にけん空には一點の雲もなく四邊、森として眠れるが如く、蘇水の轟々たる響只聞ゆるのみ、光輝赫々陽光はメーと東天に昇つた。本日の好天氣なることを證してゐる。

一同欣々と笑を顏面にたゝひ雜嚢肩に脚胖草鞋てふ扮裝ゐて校庭に集る。

生等二三學年生は日頃渴望止む時なかりし、修學旅行も愈々出發式の日となつたのである。午前六時半の振鈴に旅行生、一學年生並に職員一同校庭に整列す、江畑校長の旅行生に對する數項の注意あり終つて六十餘の旅行生は江畑校長及び伊藤教諭に引率され他職員及び一年生に見送られつゝ、名殘惜しくもグットバイの一語を殘して母校を後に其途についた棧橋の風景も今は鐵道作工の爲めあたら景色を害したるは誠に口惜しい事である。

（六二）

九時寢覺の床についた此所に見送り職員並に一年生諸君の勞を謝し袖を別ちて旅路に急いた、見馴れた木曾路も亦一きゝ目だつて生等を迎へた、行く野山は綠愈々深く愈濃く、翠綠滴らんばかり中に檜、サワラ、高野槇、アスヒにネズコ等の五木益々榮へて是れなくば木曾路もさまで名あるでないであらうと思ひ浮んだ、山淺き所には紫色ほのめる藤花、艶麗競ゐるが如き紅杜鵑花、轟々たる響きを、愈々遠く流るゝ蘇水、此の小天地、自然の公園宛然生等が行を送るものゝ如く見ゐた。足の疲かるゝを覺ゐず日未だ高く群鳥餌に急はしく飛び交ふ四時、木曾河畔の吾妻橋に投宿す、途中の鐵道工事も漸く其の歩を進め殊に野尻以下の地略落成したるを見る。本日の行程十一里

吹のほる木曾の御坂の谷風に
梢も知らぬ花を見る哉　（鴨長明）

（二）　五月十八日　（火）晴

起床五時半

朝霧に包まれ輕かざる足を引ずり阪下驛に向ふ。吾妻橋を離る數丁より賤屋新道に入る、道の兩側樹木繁茂し鬱蒼密に、雲猶暗く恰も箱根山の感あり。過ぐる凡約一里出でゝ木曾川を舟にて渡る。

七時半分坂下驛着、當驛は最早信濃國にあらず東美濃なり、現今中央南線の終點なるを以て集り來る乘客頗る多し停車場構内甚だ廣からずしてことの外雜踏を極めた、一二の麥稈帽既に見受けた。

九時黑煙を吐きつゝ長蛇の如く生等を載すべき列車はプラットホームに横つた。

汽笛一聲離れ行く、名古屋をさして坂下驛を發した、木曾川に架せる二大鐵橋を打渡り長き短かき廿有餘のトンネルを過き午後一時名古屋驛に着す

二年生は關西線に乘替へ奈良に向ふ。互に別辭を交はし相互の健全を祈りいざさらばと云ふ東の間もあらせず、黑煙を殘して去りぬ。此處に待つこてと約一時間、靜岡行列車に乘つた。驛を發し熱田停車場を過ぐる頃、日は愈々かん〳〵と照りつけ熱きこと三伏の如く、蟬の聲いと喧しく軟風徐ろに柳糸を嚶ぶる樣、知らず〳〵人をして醒夢の國に遊ばしむる。眠い〳〵紳士も眠る、奥さんも車内の人は皆、コクリ〳〵、豈我一人眠らずして可ならんやだ。

一瀉千里の勢にて尾州、三河國を通過して遠州濱名湖を渡る、白帆遠く近く點々散在し大波小波ペタリ〳〵と岸を襲ひ、日は漸く西山に落ちなんとして、夕日さす湖の面、宛ら宇宙の水彩畫を見るが如く身は天界にあるの想ひ精は散つて醉ゐる如くであつた。

濛々たる中既に驛夫の濱松ステーション――と呼ぶ聲に漸く吾れに歸つて！下車す時將に午后五時直ちに傳馬町常盤屋旅舍に宿かる。……本日の行程陸路二里半……汽車一二〇四哩……

面白しやゝせば悲し波の聲　（城）

（三）　五月十九日　（水）晴

濱松滯在。……午前七時半各自類朝公を腰にして出發樂器製造會社、物品陳列場及び三方原御料

林及び苗圃を視察す。

一、樂器製造會社

濱松町板屋町にあり凡て家屋は煉瓦造りにして誠に廣大なるものである。

某技師に案内され先づ器械工場室に入つた數百人の工夫と數多の器械とにて目も廻るが如く原動力は蒸氣力である、皆オルガン、ピアノ等の樂器材を調製しつゝあり、樂器材として用ふる樹種は内地種にては櫻、朴等外國種にてはレッドピーチ、マホガン等、次ぎに乾燥室に入つた、乾燥室は三間に五間、床下には鐵管を以て絶わず蒸氣を通じ毎に室内は百廿度の熱度を保つと云ふ通常樹を板に引き割り更に細工して此處に積むので約一週間位積みねくと云ふ。

此處を出でゝ板付室に入りぬ。吾々門外漢には一口不得要領だ。因みに當會社にて年々の賣拂高はオルガンが三十萬圓、ピアノ五十萬圓にして濱松の大商店及び東京の大樂器屋に賣捌くのみ主に東洋に輸出するものなりと。

樂器會社を辭して隣の濱松物産陳列場に入る

二、濱松物産陳列場

皆當町にて製作せる有名のものにして漆器、織物茶其他雜貨物殊に漆器は見る物あり、當物産陳列場を出でゝ北方三方原に向ふ。

三、三方苗圃及御料林

當所は其昔有名なる古戰場にして濱松より北方に進むこと約二里、

途中に歩兵第六十聯隊兵營あり、宛も其の日三方原に於て聯兵紅白兩軍に分かたれ今や將に戰鬪開始せられんとする時であつた、傍らの松の木の下蔭に腰打ちたろして眺めた、松籟は絶わず送りまゝ響くは靴の音と上官の號令のみ、紅軍突貫して敵壘を乘取らんとするや、忽ち休戰の喇叭は空高く響き渡つた、實に昔の事交々念頭に浮んだ、聞にあらざるの身直ちに目的地へと進みぬ。

一、苗圃

全面積三町一反歩一二年生の黑松大部分を占め小數の楠苗の一年生あり。

イ、床

歩道一尺、植付地三尺、床の長さ七間半にして二年生のも黑の松楠共に一坪百四十一本、一年生のもの黑松楠共に一坪二百五十本の割合なり。

ロ、床替の期節

二月十日乃至二月二十日。

ハ、肥料及其の種類

施肥は第一回の床替をなす時に之をなし其の他は施さず、其の種類は油粕と蘇灰の混合物を用ゆ、其の量卅坪に付き蘇灰二貫二百五十七匁、種粕一貫七百六十八匁にして蘇一貫目の價六錢なりと、

二、計　算

一地拵　一日の功程一畝十三歩、賃金平均卅五錢七厘

二堀取　一人一日の功程三千八百七十七本賃金廿五錢七厘

三植付　一人一日の功程千八百五十本賃金卅三錢一厘

四施肥　一人一日の功程七畝十四歩賃金卅五錢（以上黑松、以下楠に付）

五地拵　一人一日二畝十三歩賃金卅六錢

六堀取　一人一日二千〇九十八本賃金廿五錢

七植付　一人一日二千三百〇九本賃金卅五錢一厘

八施肥　一人一日一反二畝五歩賃金卅一錢

ニ、霜除け

期節＝十一月蘇又は蔑簀を用ふ。其の法は高さ二尺位にして、傾斜せしむることなく水平にして日光の差し込む樣になす。

當地方は十月十五日頃最も降霜多けれ共、其被害至つて少なし」と、

ホ、三方御料林

全面積四千町歩内造林面積一千町歩

地拵費昔は一町歩二圓位なりしが現今は五圓を要すと

年々の植栽面積平均百町歩にして、一町歩に付き四千五百本植栽す。

間は一切之をなさず枝打は下枝より二段目迄をなす、伐期は六十年、之れ用材を目的とするが故であるが實際薪炭材を産出のるのみなれば卅年生頃之を伐採すと、生長甚だよろしからず

新植樹の生長量佳にして一町歩六尺〆不良の地は一尺〆一〇九八分

一區劃斑は廿町歩＝卅町歩

生産物貢拂高五千六百餘圓

三、副産物

落葉＝七千圓

草葉＝千五百圓

芝草＝六百圓

松葺＝千圓

先年松毛虫の大被害あつたけれ共其の後之れが防除に注意し今は更になく誠に美林を形成して居る確かに理想的の森林である。

船呼べば灯の動きけり五月闇　（秋紅）

（四）　五月廿日　（木）雨

起床五時半出發六時

二泊の喪を結びし濱松町を後に三方原に向ふ。日程變更して盤田郡龍山村西川に宿かることに決定した行程十一里、空摸樣惡だ危し、足痛を慮かる者、天候を思ふる者既に馬車を驅つて走らす者のさへある。自己の健脚を誇り顏に游々閑々泰然自若として何んぞ十一里の行程恐るゝに足らんや健兒進め〳〵と超然活歩する者あり。續古今集式子内親王の歌に「狩衣みだれにけりな梓弓、ひくまの野邊の花の朝つゆ」と云へける三方原、元龜三年武田信玄大擧して三河に入らんとして德川家康之を迎へて大戰したるは此の地、今は多く開拓され田圃となりて麥は黄の波をうたせ、桑は惜しげもなく刈り取られ其の跡を暴露し居れるのも、水田水をたゝへて只見る太陽の影をうつすのも共にありし昔の程懲ひ出されぬ。

遠く東方に連なる山々之雲霧に蔽はれて見わす、並木「まつ」緑葉垂らんばかりなる風情げに云ひ難き風光だ。

此處を横り十數丁來るに空俄かに荒れ遂にバラリ〳〵と雨降り、一滴千金の價値ありと、故人之を唱えたれ共こと茲に至つては閉口頓首の至りだ、忽ち身はカッパと變つた、濱松町を距る五里の地鹿島に來れば雨愈々獰猛を極めてきた、舟にて天龍川を渡る、二俟町を經て山路に向ふ、山は愈々嶮を增し雨は益々勢を增す、草鞋は切れる。諸所隱見天龍川を眼下に小菜舟、筏等多く下るを見る左右前後行く所、眼に入る所、深林蒼尙暗いばかり宛ら吉野の杉林と同じい感觀した、重き足にて山を下れば此處ぞ今宵宿かるべき西川なりと聞きさも蘇生したるが如き心地ぞした。時將に午后四時旅舍吉野屋に投宿すれば衣類ぬれそぼちて落つる雫か、はた雫か？五時一旦雨はれたれ共七時頃より再び惜氣もなくどう〳〵と落にけり——明日の天候如何か？希くば好天氣たれ——ほの暗き旅舍の洋燈の下に今日が思へを綴る。

西行は死そこなうて給かな　（蕪村）

（五月廿一日）　（金）晴

起床六時

如何にと按じた天候も既に恢復して雲霧遠く天龍の彼方に消わてひらめくかげろう、天に地に、映じ枝上に玉なす露もあはれ散つて、そよ吹く風に心地よき天氣とはなつた、旅裝そこ〳〵に整わ帝室林野暨理局技手小澤某氏に案内されつゝ龍山村森林視察にと出かけた、行くこと一里半常に森々たる杉林一眸千里、樹林枝差し交し踏む地は落葉重くして宛も毛氈の上を歩行するものゝ如く又諸鳥空高く啼く音、醉ふて樂園に遊ぶが樣だ、當地の森林は吉野と同じく皆人工造林にして去んぬる明治五年頃金原某氏初めて杉樹殖栽して林業の發端を開拓したるものだと云ふ。現今大部は御料林に屬し民林としてかの金原氏大分之を占む。道々小澤氏の講話を聞く、當地方殖栽樹種は主に杉にして防火用並ゑ林衣として檜を用ふるのみ。杉種一升の代普通八十錢尾州地方より之を求むと。保護手入としては植付後三年間下草刈ること、十年乃至十五年生より少許の間伐を施すのみ、伐期は民林にては廿年＝五十年御料林にては百年を代期となす。奇異に感じたるは一切枝打なさゃること落葉を採集せざることなり。殊に落葉に至りては尺餘もうづ高く重積しをるものさへある、實に野火に對しては危險千萬の次第である何故に之等に向つて手入をなさゃるやと、聞きに間伐をなさゃるとも大低死節を形成せず枝打及落葉採集等之を

なす時は莫大な費用を要して其の割合に利益なしと結局經濟問題だ、己にして龍山村瀬尻分擔區署に達した。帝室林野監理局瀬尻分擔區

一、面積一万二千八十丁歩。
二、一小林斑區廿丁歩。
三、防火線及林衣、防火線は巾十間乃至十五間にして火に強き樹種くぬぎ點々散在、ひのきは比較的落葉少なく鬱閉すること早きを以て林衣となし防火線に連續する所に之を植ゑてある。
四、苗木及種子、苗木一本代一錢五厘種子は尾州より之を求む
五、地拵費及造林人夫賃、地拵費一丁歩七圓五十錢人夫賃一日五十錢一日に苗木三百本を植付す。
六、期節、植付五月、伐木九月。
七、手入及保護、植付後三年間下草を刈拂い十五年乃至廿年に至りて一回の間伐をなし五年乃至十年置きに八パーセント位の間伐をなす。
八、生長量、最も佳良にして卅年生にして經八尺余に及ぶものあり其の年輪桐樹の其れの如し。
九、林産物利用、年々の間伐材平均一万本＝八百尺〆、丸太材は之を一級より五級に分つ、一本代平均六錢、造材したるものは東京地方に小丸太材は天龍川下に産出す。副産物として杉皮を産出す一束とは樹皮一坪ならべになしたるものにして廿五束を一ハイと云ふ其の價四圓乃至四圓五十錢にして東京地方に販出

歸途路綱實地踏査して再び西川に下り秋葉山に向ふ西川より平地廿丁山路五十丁にして山頂に達す途中に橙、きんかん等熟色を見せ「食べ玉ひ」といはぬばかり遂に腹公我慢出來兼ねて一個五厘投じて買つた豈計らん未だ熟せず食ふこと能はずしてあたら谷の中目掛けて投出した、自己としても彼橙としても其の本望を果たさゞりしなり世にも見掛によらぬ人、此の類に屬する者多々あるならんと眞實爾かく思つた、秋葉山は遠州周智郡天龍川の東に位し不動龍頭等の山脈に連なれる峻嶺にし山頂に秋葉神社あり縣社にして軻遇突智の神を祭つてある、山麓より頂上に至る迄老幼杉樹鬱蒼繁茂し殊に神社境内にある杉の如き二百廿年生以上にして直經三尺五寸乃至四尺にして樹皮と云へ枝の出方と云ひ之が、杉樹かと疑ふ位實に樹梢は天空を凌んで長々大なものだ。

神社に參拜して南方に向ふて下ること約二里余にして盤田郡雲名に投宿す時將に五時卅分、疲れし足を富士屋に洗ふ。

ひぐらしに旅人急ぐ山路かな　（城）

（六八）　五月廿二日　（土）　晴

起床五時半

六時卅分舟に竿さして天龍川を下る嶮見出沒奇岩屹立舟當りて將に碎けんとし或は舟渦中に突き込まれ將に轉覆せんとするや楫師は巧みに舟を操りて安全な場所に導く一寸ドット拍手した。

只一回舟中に水躍り込んだのみ。

斯くて午前十時十五分、中の町に着、舟を下りて天龍川ステーションに至る、午前十一時廿三分發列車にて靜岡に向ふ天龍、太田川等に架せる鐵橋を打渡り袋井、掛川、金谷等の諸驛を打過ぎて古事に「越して越されぬ大江川」をも一聲汽笛に打驚ろかされ窓にのぞく頃は既に半を過ぎて居つた然し長い鐵橋だ時々荒れると見える。

大江川を越せば最早駿河國にして島田、藤枝、阿部等を經て靜岡市に達す下車して直ちに宿を四海館に決定す、それより靜岡物産陳列場に入る。主として塗物、茶、紙類等陳列してある、出でゝ靜岡工業試驗所視察

當工業試驗所は漆器及製紙の試驗をなす處だ各一々書き載す能はざる惱なきみ恨やむ辭して宿に歸る日まだ高し自由行動は許されて龍の中の鳥野原に出てゝ遊ぶが如き心地した。

黑髮に紅梅簪す人ゆかし

（七）　五月廿三日　（日）　晴

起床四時

午前五時過ぐる頃靜岡より沼津行列車に乗りて出發。

江尻の海岸を過ぐ、吾は東に流船は沖に煙を殘し

て近く清水の港に向ふ清水灣の廣遠なる景色普雪舟とて畫を善くするものあつた。渡唐せし時清江觀月の圖を描出してかの國人の目を驚かしたが爾後かの國人の我が國に來遊するものは必らず一度此地に杖をとゞめて自國の瀟湘に比して愛觀せりとか聞く三保の松原遠く之を賞し、

興津の停車場を過ぎ富士川の鐵橋を渡る、富士山は朝露に包まれて見る事能はず沼津に至る頃既に雲霧消散して富士山高く中天に懸り白皚々眞に白扇を倒にせる如し實に好個の摸形邦國の美。プラットとする處である浮島が原廣く横はり松風は源平對陣の古を語るが如く水聲と群鳥驚起の昔を答ふるに似たり新橋行列車に乘る懷舊の情車輪と共に轉廻して既に箱根山のトンネルに入る

長からず二三個あるのみに足柄箱根等は海道に名高き峻嶺なれど今は居ながらにのぼりするなど開け行く世の賜にして越ゆなやみし古人の紀行もあらぬそらごとの樣なる。鎌倉小田原の往時などをおもひいでられて史上も心に浮び變遷も目に見ゆる心地であつた

上りつめし所は御殿場の停車場、このあたり承久の難に殉せられし中納言宗行卿の墳墓ありと聞けば心に史上をたどりて車の窓より空しく林を眺むるのみ滊車は走つて關府津を過ぎ海水浴に名高き大磯小磯打過ぎて遂に大船に至る横須賀行に乘換へ途中鎌倉に下車す、直ちに町を横ぎりて鶴ヶ岡八幡宮に參拜、當宮は國幣中社にして應神天皇、神功皇后、大中媛の神を祭る。

停車場より二の鳥居一の鳥居を潜りて石橋を渡りて境内に入れば正面に神樂殿右には仁德天皇を祀れる若宮、頼朝公を祭れる白旗の宮あり、昔し義經の妾靜が頼朝の命に依り想夫戀の唱歌を謠ひて一曲の舞を奏せしは此の若宮の社殿だそうな、

又石階の西側と公孫樹の大樹がある此れは承久元年當宮の別當公曉が實朝を暗殺したる處だと云ふ石階を上れば直ちに本社の拜殿に達す。

本社には寶物あまたあり頼朝の木像を始めとして武器數百點を陳列す八幡宮より東北凡そ六町二階堂ヶ谷の山麓にある鎌倉宮に參拜す當宮は官幣中社にして大塔宮護良親王を祭つてある、

明治二年の創建に係り素朴にして高潔實人をして自ら其の襟を正さしむ。社背に曾て親王の籠らせ給ひし土牢あり二段の石窟にして窟の廣さ疊八疊を敷くべく今は其の正面に坂圍を設けて漫りゑ人の入るを許さず。一度此の社に賽して建武の昔しを追想せば誰か暗涙を催さゞる者あられやだ、嗚、時間不足の爲め他の名所舊蹟を探ること能はざりしは誠に遺憾とする處だ、

再び滊車に乘り豆子を過ぎ午後四時過ぐる頃横須賀着、刹那火事々々横須賀町！驚いて半狂の狀態乘客一度にドット飛び出す一時は大混雜を極めた直ちに停車場近く一國屋に投宿す荷物を預けて近き小丘に上りて見る、黑煙漂々紅舌吐いて天をものまん氣勢當町主眼主腦中心部にして昨年燒けたる次ぎより午後一時頃出火したる由未だなか〳〵止む風情なし彼方もカン〳〵此方もカン〳〵警鐘亂打又ドット黑煙あがる、陸軍も海軍も飛出す此日丁度第一艦隊全部横須賀軍港に滯泊し居りし爲め水兵の盡力一方ならず大功名を顯はした。滊車の着く度毎に飛ぶ人馬を走らす者人なか〳〵の混雜六時になん〳〵とする頃漸く鎮火した。

軍港は眼下に十有五の軍艦海中に中を小蒸滊水兵を載せて陸上する樣たま〳〵響くは滊笛。

夕波に浮び落日映じ彼方火事の跡場の薄煙モロ〳〵上る樣何んとも云ひ知れぬ感にうたれた。

電燈會社燒失したれば横須賀は眞の暗あはれ横須賀何故にかく年々歳々火災あるや目も當てられぬ慘狀にて今宵早く九時既に薄宵の國に遊んだ。

會我の跡弔ふ里や桃の花　（城）

（八）五月廿四日　（月）晴

午前八時　宿を發して横須賀軍港造船所視察に向ふ。水曜日の外一切參觀を許さずと拒辭され詮方なく九時を待ち軍艦を見物にすることにした。然し九時には未だ時間がある、しよぼ〳〵と燒け殘つた町をぶらついた、實に慘憺たるものだ、たゞ遇ふものは海兵のみ、當町は海兵にて持ち切の狀態だ、他に一の人目を引くものもなかつた。

しかする裡に時間は來た、折しもよし、最新式の

軍艦香取ガトック内にたる、香取を參觀することにした懇ろなる某水兵の説明に、艦内漫なく巡覧した。

上中下甲板より艦橋（ブリッジ）さては艦長室、寢室等に至る迄、海兵生活の一斑を窺ひ知ることを得た。

折りしも中甲板に至りし時彼方、向ふより嚠喨たる音樂の響、曲は洋――床を傳つて洩れて來た、水兵は此處は音樂隊――、とドアをあけた、數人の樂士否軍人だ、もう實にうつとりして仙界にても遊んだかの樣な氣がして去るのも知らず水兵の呼び聲に醉は醒まされて、未念を殘して立ち去つた、武骨一片の軍人にも斯く優しい音を出すものかと、熟々感慨無量――當艦は最新式一等戰闘艦にして噸數一万六千、速力廿二ノット、艦の長さ五百呎巾三百尺てふ實に廣大なものだ、午前十一時半辭して港を向ふ。こゝかしこ昨夜の火事にて目にも當てられぬ慘狀であつた、

波止場もあまり感服せず、午後一時の出船、運れて二時、滝笛高く波を蹴つて愈々横須賀に向つた。洋は至極平穏無事加之天氣晴朗、げに云へ難い海日和、來客一同甲板に出てゝ、遠近の海の景色、或は近頃出來せる新聞紙上の記事に、誰れかれなしに矢を放ち放たれ、兎や角する内に横濱港に來た遙か向ふに、三本マストの白塗軍艦三隻檣上高く軍艦旗を掲げて居る、米國の軍艦だ、又此方には水色のどこかしつかりとした小奇麗の軍艦――同盟國英國の軍艦だ、間を通りて上陸した、横濱時將に四時半、廣大なる煉瓦或は石造の町を横きつて外人寄留地に出で波止場に行つた、丁度米國水兵の上陸する處だつた、落日將に海に沈まんとする時海鳥さも心地よげに、彼方此方と飛び交ふ樣、木曾山中にては百年經つても到底見ることの出來ぬ美景だ、優景だ、徘徊去る能はず――時間の切迫にせまられて、ステーションにと向つた。

五時發列車に末念を載せて新橋に――

六時過ぐる頃品川台場も右手に眺め多年、戀ゐ憧憬れし花の都にと着いた、直ちに電車に打乘りて神田區裏神保町八重垣館に宿す、當地は東京とは云へマア閑靜の處だ、吾々山出の者には至極好宿だ。

今宵同郷人或は知り人生等々尋ね來たる者甚だ多かつた。故郷を離なれて他地に遊ぶ者如何に故郷の戀しさが知れる。

（九）五月廿五日　（火）晴

午前七時半東京府下荏原郡駒場農科大學に參考品取調に行く。

林科三年生今井某氏懇に案内してくれた、

門内に入れば已に何んとなく俗界を離れたる如く内外模範樹種は高く低く綠葉したゝれ珍木奇草眺界は目新らしき林木のみで他あるなしだ。斯くなる所過ぎ行くこと數町にして左に曲れば建築廣大なる石造建物あり之れぞ我が林學の蘊奥を極めて年々歳々多士を産する所の林學科なりと、此處に先輩肥田幸一郎君務め居られしを以て何かとなく便宜を得た。

物品陳列室、木材標本は測量、測樹器機、造材、伐木器具室其他林産物製造室等視察し終つて温顔篤實にして且つ滑稽なる近野先生に案内されて見本園、日本に於ける水平的森林植物帶、各淵獨特の樹種及苗圃を視察した。

農科大學林科視察事項

一、見本園（面積約二丁歩）

イ、神樹　原産地　支那

特徴　互生羽狀複葉にして雄蕊は香氣高きを以て有名なり材は淡黄色なり

効用　材は劣等にして薪炭材、行道樹、日除樹に用ふ

ロ、ピラミットヤマナラシ　一名アメリカヤマナラシ

原産地　ヒマラヤ

特徴　樹冠圓錐狀をなし宛も等を立てたるが如し故に箒ヤマナシと呼ぶ

効用　材白色柔軟、燐寸用材經木用等に適す

造林　挿木に依りて造林す

ハ、アメリカヒバ　原産地　北米

特徴　効用　造林　等白樺に類すと云ふ

ニ、ニセアカチヤ　原産地　北米

特徴　小葉は雨天又は夜間は疊むの性あり夏季白色の花を開き芳香を有す木質堅剛保存期長く濕氣に堪ゆ

効用　行道樹、用材林、薪炭林、地力改良の効あり
造林　瘠地造林に適し分蘖又は播種に依り苗を仕立つ
ホ、落羽松　原産地北米の東南沼澤地
特徴　葉は羽狀を有し柔軟鮮色、綠色を呈す冬季黃變して落葉す特に水濕地に抵抗する力强し
効用　材は水中用材として保存期長し
造林　温暖帶に適し水濕地に見込あり
ヘ、獨乙赤松　原産地歐米亞細亞
特徴　二葉松葉は短く鋭し陽樹にして厚き皮を有す
効用　指物、用材、屋內造作
造林　邦國赤松に準ず
ト、チューリップの木　一名ハンテン木
原産地　北米
特徴　北米にて濶葉樹中最大なるものにして大なるものは長さ四十間直徑二間餘に達するものあり其の葉の形狀は日本職工の印半纏に類似するを以て此の名あり
効用　材質輕軟なるも緻密且つ纖維通直刻むに適す　松に代用す机、家具、椅子其他小用材に用ひらる　保存短し其木の根及枝を以てリニヲデントリンなる藥劑を製す
造林法　播種に依り吾がシホヂに準して可なり
チ、大王松　原産地北米
特徴　三葉松世界松類中最長大の葉を有し材の比重又大にして良材を得
効用　最も上等なる指物材と最良質なる樹脂を産す
造林　温帶より暖帶の植樹造林に適す
リ、ベクチナモミ（獨乙モミ）原産地歐洲の中部
効用　テレビン油を採集す
ヌ、ストローブ五葉松　原産地北米の東部
効用　保存期長し建築用材又は庭木とす
造林法　五葉松に準ずべし
ル、エキセル松（ヒマラヤ松）原産地印度ヒマラヤ山の高地
特徴　葉は長く灰綠色にして下垂して正しく輪狀の枝を發す生長速かなり
造林　温暖帶に適す　朝鮮松の造林に準ずべし
オ、ウエビヤモミ　原産地　ヒマラヤ山脈
特徴　樹冠傘狀を呈す球界は美にして樹脂を以て常に蔵はる
効用　造林法　等內地の縱に等し
ワ、ヲレゴンパイン　原産地　北米
特徴　北米にては重要樹木の一にして長大の良材を生ず材質强堅にして彈力に富み保存期長し
効用　堅硬眞直にして建築　橋梁　船艦用材に供す又小材は杭木指物等に用ゆ
造林　植樹造林法に依り杉に準ず
カ、歐洲落葉松　原産地歐洲
効用　建材、水工、土工又は鐵道枕木に使用する他テアナ香油を製す
造林　寒地に適す植樹造林に依る我が落葉松に同じ
ヨ、コノテカシハの一種　原産地支那
特徴　枝條向上し箒狀をなす
タ、亞米利加栗　原産地　北米
効用　劣等の家具材棚又は家具材料に供すミツハクリに似たり
レ、海岸松　原産地　歐洲北部亞弗利加
特徴　海岸の開放せる砂地に適す材質は强硬にして樹脂に富む
効用　佛國にては海岸の防砂林として造林し盛に樹脂を採集す材は建築用材水工及艦船用材に用ひらる
造林　暖帶海岸地砂の造林に適し黑松に準ず
ソ、鉛筆ビヤクシン　原産地　北米
特徴　一種の香氣を有す少しく苦味あり故に虫害に罹り難し
ツ、コノテガシハ　原産地　支那
効用　檣用及庭木種子は漢法醫の藥品として用ひらる
造林　木幹高く伸長せざるを以て造林の價値なし
ネ、臺灣赤松　原産地　臺灣　南支那
特徴　二葉松にもて枝廣く伸びて其斜葉長くし

て梢軟かなり
効用　吾が赤松に同じ
造林　吾が赤松に準すべし
右は主なる樹種を列擧した丈だ、まだ内外の樹種五十有餘もあつた、

二、林產物製造室
林產物製造室に設置せられたるもの次の如くである
一、木材乾餾裝置　二、濶葉樹乾餾裝置　三、斜葉樹乾餾裝置　四、瓦斯溜　五、大小蒸餾釜　六、蒸發爐　七、濾過袋　八、アセトン製造製置　九、松脂採取器　十、直火式松脂蒸餾裝置　十一、過熱水蒸氣式松脂蒸餾裝置　十二、焦性松脂油製造裝置　十三、松香油より人造樟腦を製し、松香油、固松油より煉漆ペンキを製するが如き、特別なる器を用ひすして實驗すべし　十四、樟腦製造實驗裝置　十五、樟腦精製裝置　十六、木纖維製造裝置　十七、鋸屑酒精製造裝置　十八、木纖維電氣白裝置　十九、燃料の熱量試驗器　二十、單寧製造器械
斜濶乾餾裝置より出づる木瓦斯を貯ふる爲め設けられたる瓦斯溜は直徑六尺高さ七尺鐵板製の瓦斯槽は直徑七尺深さ六尺木製の貯水槽よりなし百七十立方尺の瓦斯を貯ふるを得べし。蒸溜釜は大小二個の二種あり大蒸餾釜は最大直徑一尺五寸深さ一尺六寸銅製にして三斗を入るべく小蒸餾釜は最大直徑一尺二寸深さ一尺二寸五分銅製にして一斗二升を入るべし此の二個の蒸溜釜には何れもビストリー氏の冷却器を接續す
林產製造品標本
一、木炭　二、木醋酸液　三、木精　四、錆酸石灰　五、錆酸　六、アセトン　七、クレオソート　八、フォルマリン
三、日本に於ける水平的森林植物帶及び外國に於ける樹種を視察す
吾々は茲に於て世界の森林を漫遊したるも同樣の感がある、否實際あるのだ
四、利用及森林設制學陳列品
(一)林學教室二階廊下　普通使用する木工、器械圖面及び土木石工地形工事に關する構造圖面を見る。
(二)製圖室　墺國に最も完全なる森林鐵道案及び二個の完全なる滑道設計案を陳列し墺國の運材設備を示す其他橋梁、建築構造圖面を陳列せり又墺國及び佝國に於ける林業上の寫眞及同國の沙防工事の設計案寫眞を陳列す
(三)利用教室　木材人工着色　研き出しの材料及び建築石材を陳列す、其他木曾森林に於ける舊幕時代の成木の習慣を圖示したる扇額を掲ぐ
(四)利用學陳列室　歐洲にて盛なる木材研き出しの標本、又木曾森林に於て現今行ひつゝある伐木裝置寫眞を掲ぐ、其他歐洲林業に關する寫眞を掲ぐ又本邦產の木材標本を示せり歐洲の由地に於て使用する簡單なる水車、鋸、器械等の模型を見る又端西に於ける鐵索運搬裝置の寫眞を陳列せり又墺國沙防工事の寫眞及び學術的状況の寫眞を掲ぐ香木、唐木、木材割裂の難易を示し又本邦竹類各種の標本及び熱帶地方の木材と經木の陳列せるを見る。
(五)第三號製圖室　森林設計に關する諸圖案を示す中央の机上には墺國に於ける最ども完全なる設計案一切を陳列す四方の壁面には主として授業上ゟ用ふる設計圖を見た。

右大學を辭して澁谷ゟ至り乘車して目黑驛に下車し十數町にして農商務省山林局林業試驗所に至る
本試驗所は明治卅二年の設立で、從來の西ヶ原樹木試驗場を移轉して更に其規模を擴張せしものである是れが構内の面積は十四町六反餘歩、内部の區劃次の如し

一内外國產木材見本園	一町七反三畝
一試驗苗圃	三町八反九畝
一試驗林	七町三反四畝
一試驗室官舍道路	二町六反

構内建物は事務室試驗室標本陳列室及び官舍等にして四百六十六坪、標本陳列室には内外國林業上の參考品等を蒐集してある今概畧を掲ぐれば
(一)木材及び木材標本、是を分ちて内國產及外國產となす
内　譯
斜葉樹大材　同中材　同小材

濶葉樹大材　同中材　同小材
單子葉類
小笠原島産及び沖縄産の材鑑、加工木材雜材、其他の木材あり。暹羅、支那、印度、北米等の産出に係る材鑑あり。
（二）森林副産物並に製造及加工品標本
内　譯
副産物（内外國）　簟類　樹脂　樹皮　五倍子
纖緯　土石等
製造品（内外國）樟腦　澱粉　油木　炭等
加工品（内外國）加工物　彫刻物　指物　經木
燐寸等。
（三）森林動物、植物、標本及び狩獵産物
内　譯
植物内外國。種子内外國。高等動物内外國。昆虫及其他動物内外國。狩獵産物内國産毛皮、羽翅、同上外國産。骨、角。
（四）林業器具器械
内　譯
測量製圖及測樹器（外國）造林器械　伐木造材及運搬器械、狩獵器具、其他林業上の器具器械。
（五）模型品及び寫眞
内　譯
森林及貯木場の模型　寫眞類（林業上に關するもの）苗圃に付ては當係員留守中なりしを以て說明を聞く能はざりしは誠に殘念とする所た。
温床及び木材保存期試驗を視察す。辭し去つて再び目黑停車場に出でゝ滝車に乘り品川に向ふ時將に午後三時五十分
熱々今更の樣に思ひ浮んた、林學＝林業の高尚且つ深遠にして趣味深き事を。深き思ひを乘せて、列車は既に品川停車場に着いた。直に一同袂を連ねて泉岳寺に詣す
モロ〳〵と立ち上る線香の香、四十七士の墓はむざんにも風雨にさらされて苦むすあたり、彫せる四十七士の木像、知らず襟を正し、其のかみのことども想ひ出てられて、伏し拜みぬ、一日八百の賽人あるとは又如何に其の偉大なる力あるか、を想像せらる、合掌＝眠には涙た、折りしも入相を告くる鐘の音に打ち驚き、出でゝ、電車にて宿にと歸つた。時將に六時（城麓）

古寺や松杉まじる夏木立

（拾）　五月廿六日　（水）　雨
一昨夜來の東都の視察、見物に疲れ果て六時に戀しい〳〵床を蹴つて起きた、折柄の雨、日程變更如何との議も起つた然し不可能だしぶ〳〵ながら七時出發洋傘の行列にて小石川砲兵工廠に至る。好個の見物となつた。
先づ第一、に入つたのは鍛工場にして鐵を鍛へて台尻の如き小部を作つてる、耳も聾せんばかりなり。
第二、銃身工場を見る、折しも陸軍戸山學校生徒の視察中なりし
第三、銃床工場に入る、
第四、樞要部の製作工場なり、凡て分業に依り行はれ居れり女工も澤山見受けぬ。
第五、三十年式銃と戰役の結果を參考にして作りたる三八式銃との比較說明を聞きたるも畧す、
第六、機關砲工場
イ、三八式機關砲　ロ、南部式機關銃
第七、野砲製造工場を見る
十一時頃辭して直に電車に乘りて農商務省商品陳列館に趣く
農商務省商品陳列館
一、陶器　二、磁器　三、敷物　四、織物
五、美術工藝品　六、食飯物　七、木材加工品等にして、中南米物産、北米の桑港、ニューヨーク附近及び歐州等のもの多數ありたれども吾々凡物のよくする所にあらず、次に別館にて諸種の礦物を見ぬ唯淺學を恨とするのみ。
（十一）　五月二十七日　（木）　晴
本日は自由行動となりしを以て、各自思ひ思ひに或は深川木材貯木場に上野、淺草、向島、比々谷等の方面にられ〳〵見物せり、いつも早く九時已に寢に付く、夢は何地をたどりたるならん、十日前の木曾、天龍川の舟下り、横須賀の火事、三日間の花の都、明日の日光等さま〳〵にたどりぬ。
（十二）　五月廿八日　（金）　晴
花の都よいざさらば、と三日間の緣に別れを惜み

九時迄に思ひ〳〵に上野停車場に集合しぬ。

時間ありしを以て余等は停車場前の博品館を見る中に食堂、喫煙室、理髪屋、ケーリホール、等完備し居り宏大なる、あゝ大きかつた、と唖然たり

上野發九時十分の列車に搭乘し日光に向ふ。

途中宇都の宮迄は廣き關東平野にして唯々赤松其他の濶葉樹林の點在せるを見る。

宇都の宮より追々山間となる、滊車の兩側に當つて多くの竹林存在し、其杉林中に混生するをも見る、尙ほ文殊停車場より杉の並木に沿ひ、水戸候が當時世の冷笑をも顧みず植樹せし如何に遠大の志を有せしかと想像することが出來る。午後二時頃日光停車場着、神山旅館に荷物を置き、神廟に參拜す、壯大、美麗なる二十六棟の建築物當時の諸藩が如何に心を碎きしやを想像せらる、四時旅館に歸る、

（十三）　五月廿九日　（土）　晴

日光は木曾よりもたしかに氣候は遲い丁度藤の花が今を盛りと咲き亂れて居る、木曾の紅杜鵑に、濱松咏柑　此處で盛りの藤の花

朝早く日光美術品展覽場を訪いしも吾々門外漢の善くする所にあらず。

九時五分日光發の列車にて出發す途中今市驛にて同所を距る二町位の所に二宮尊德翁の墓及び神社がある、昨日の道を小山へ引き返し、小山にて前橋廻り上野行に乘り換へ、更に前橋にて高崎行に乘り換へて高崎着、正に午後三時半

直に信濃屋に投宿す。

途中赤松の樹下に「くぬぎ」「なら」類の生せる中林作業の行わるゝを車中より望見せり。

高崎市と鐵道の集合地にして、生糸の產多く、歩兵第十五聯隊(ママ)あり中々繁榮の地なり。

高崎公園は位置よけれ共殺風景なること驚くの他なし更に公園としての價値を認めず。明日之愈々碓井の嶺を越へて、みすゞ刈る信濃國へ入るなり夢轉た結び難し。

（十四）　五月卅日　（日）　晴

六時十五分發列車に乘る、高崎より右手に赤城山の裾野を望み横川より左手に峨々たる妙義を望む其對照や面白し、我等はアプット式機關車の後搖に依り上りつゝあるなり、かくて二十有六の隧道を過ぎて海拔三千尺に余る輕井澤に着きぬ。見れば內外人の稻荷神社の如き別社は其處、彼處に點在せり。

仰ぎ見れば淺間山は至極平靜にして吾等を迎ふるが如く又歸を喜べるが如し、車中より山麓の落葉松林を遠見しつゝ御代田に着し下車せしは、正に九時過ぐる二十分。

荷物を停車場前の松葉屋に預け、直に追分保護區員駐在所に至る。折あしく保護區員不在なりし爲且つて敎室に於て學び記憶をたどりて其一部を視察せり。

淺間山裾野は海拔三千尺余を有する高原なり追分原又此內に在り、淺間の噴煙は北方の天を广して自然の大作用を仰がしむ、其內北方に面したる大部分は即ち淺間山麓國有林にして岩村田小林區署管內なり。

一、樹種は概ね落葉松にして、赤松其他も少しく見受たり

二、落葉松は火山灰質の乾燥地に生育し、且寒風に堪ふる力强く、瘠地にも、よく生育する事と實地に見る事を得たり。

三、防火線は十間乃至十五間にして、其個處の芝土を取りて以て兩側に高く積しありたり。

次に淺間山麓に特別なる腐心病に就て實地に目擊する事能はざりしは誠に遺憾なりき。

引き返して御代田驛に來るや、十二時七分發の列車は黑煙濛々と疾驅し來れり、直に乘車して上田に向ふ。暫時にして上田着直に長野大林區署上田小林區署に至り、一休の後署長より懇切なる、施業案に就ての地圖上の說明を聞きたり。後茶菓の饗應に與り且又宿舍を案內されしは厚意甚だ有難かりし。

若松屋に投宿す、正に五時。

（十五）　五月卅一日　（月）　晴

上田は蠶の產地として鳴る、又學校の多きを以て聞ゆ。即ち小學校、中學校、高等女學校、蠶業學校、信濃蠶業學校、蠶糸專門學校等あり。

七時卅二分發の列車にて上田を發し、川中嶋合戰の原因を生みし、村上義淸の出發地たる坂城を左

手に眺め屋代を過ぐれば川中島の平野なり、篠ノ井にて中央東線の列車に乘り換ふべくまつこと約一時間同地は川中島の中央にありて西方に茶臼山を望む、越軍の陣營の在りし處なり。南に千曲川あり、北に犀川ある、こゝぞ甲越軍の激戰の跡地なる。

九時二十分の列車に乘り換尻に向ふ、姨捨に至れば川中嶋平原は下方指呼の處に在り中央を走る千曲の流千載につきるなく、七ヶ所の停車場は掌中に在り、東方鏡臺山に上る月は甲秋、姨捨の觀月堂より見るを最もよしとし姨捨の月として名ある名所は眼下に見ぬ。

姨捨、麻積間の南北信に分つ大山脈の脊骨を穿つ冠着の延長八千百十四呎ある大隧道も過ぎて十一時頃明科を過ぐ長野大林區署に於ては同所に大なる貯木場を昨年中に設置し停車場附近には木材山積しありたり。正午頃松本驛を過ぐ、中央には有名なる天主閣高く、松本城の皆を語るものゝ如く今は町の北隅に歩兵第五十聯隊設置され附近には淺間、山邊の兩温泉あり、竹細工を產して名あり中央西彌開通の曉には益々繁盛に趣くならん。

午後一時、鹽尻に下車す。桔梗ヶ原赤松林點在材質惡き由、落葉松もあれども性質甚だ不良なるよし歩行する凡二里にして木曾地に入ればいよ〳〵眼界狹く特有の檜樅等を目擊するに至りぬ。

三里にして贄川に達す。坂本屋に投宿す時正に五時途中の鐵道工事の略完成せるを見る、

杜鵑とある辻堂のかり枕　（城麓）

（十六）　六月一日　（火）　晴

午前七時半贄川を發して歸途をいそぐ、長の旅行も愉快に面白く、未だ知らざりしことゞも、新智識を頭腦の全部に滿し、喜びの色を表に表しつゝ勇んで鳥井峠の嶺に至り一同此處にて休み、峠を下り宮之越に至れば最早諸先生及び一二年生諸君は余等を迎ふべく來られてゐつた、厚意を謝し日光や東京の話にて左右前後よりようされて午後二時半、懷しい福嶋の地に着きにけり、愈々旅行の終結を告げぬ、

懷しき校舍を望めば、宛然慈母が旅行から歸へり

し愛子を迎ふるが如し。土產肩に、苦樂限りなき旅中の出來事を胸中に納め、嬉色面に、各々思ひ思ひに故郷の方へと急ぎに急ぐ、黃麥を吹き來る薰風に送られて——、（宮澤生）

都人きても見よかし麻衣
夏はすみよき木曾の山里

端書便り

北米だより

左の一篇は去る三月北米の清澤巳末衛君より野知里慶助君の下に寄せられたるものにて同君より特に廻送せられたるもの

親愛掬すべき野知里君机下

本日君よりの封書を落掌した僕は如何なる感想を以て如何なる希望の程に貴書を開封したか。

少しく僕をして言わしめよ、僕は現在親愛なる友松原君、正又實次郎君、と同居して同じ卓上にナヒフ、フォークを取り同机上に相對して勉學すると云ふ最も愉快の程に在つて今學友君よりの書に接して快一層、僕は先づ貴書を開かざる前に夫れを手にして思はづ机上を打つて大聲一言叫んだ。

嗚呼親愛なる野知里君にして天眞爛漫愛すべきの親友、今は俗界、而かも廳敗官吏の中に天職を執りつゝあると、たゝ回顧すれば潔白なる野尻君にして現在は如何なる性格を有つや或は「血に交はれば赤くなる」に歸せらるゝに至りはせぬか、然りと雖も覇氣ある君にして決して然かある可き筈あるまじ恐らくは「泥土しかも汚水の中にある蓮にして能に秀麗時美の花を開くの例に洩れづして純潔日々の生涯を送り居らるゝならん」と二人の君又さもありげに僕の大言を笑ふ開けば見馴れし日本紙の大片中折三枚を端より隅に至る迄濃く摺り流したる墨もて書かれ讀めば流暢爽快を覺ゆ貴書告ぐるに雜多を以つてせらる先づ君が渡米の志ありと、君にして此の志ある可なり、否、日本人擧つて此志有らざる可からづ僕は絕叫す、

日本の覇氣ある青年擧つて海外に飛躍すべし決して一小島國に跼蹐呻吟して居る勿れ、僕は更に云ふ猫も杓子も海外に出でよ日本の如き一小島國は子供と年寄に任かせ置ば足れり恐らくは鼠算で增

加して行く人口は限ある掌上の一小土を直に充滿せしめ以つて人が人を食ふの期が目前に横はり居るものならずや、然かるを知らざるものは至つてこれより以上の不愼はあるまじ最も僕がわかしき者は外務省などで海外渡航を嚴にして以つて前途有望の青年の意氣を破り五里霧中に葬つて顧みず一方には日本の益困難の裡に陷るべき樣なしつゝ有る是で有る。

尙おかしきは其愼れむべき外務省の小便なる知事乃至は郡長迄が此緊急問題なる海外渡航を等閑に附するのみか余分な辨口に滅多小而倒臭くするので有る、おかしき處が小癪にさはらざるを得ない。然らば何故海外渡航が緊急か是れ論ずるの時は已に去つて今は實踐窮行の時で有る、今論ずるは愚に似たり然りと雖も茲に少しく言はしめよ、抑も余は單に日本國の爲に海外發展せよとは決して云わづ僕は世界を笠に被ぶつて云はんとするもので有る、何んとなれば一郡の亂は一縣の亂、一縣の亂は一國の亂れ一國の亂は世界の紛擾なればなり世界の平和は實に平等にあり一國貧すれば又他を

食ふ以つて世界は食ひつ食はれつ止む時なし、故に世界の人類は皆平等にあらざる可からづ平等なれば平和なり依つて今や益々貧困に陷りつゝ有る日本を何ぞ顧みざるを得んや、之を救ふの道他なし海外發展卽ち渡航あるのみ、生產與業は之を敎ふを得べしと言ふ者あらん、其は滂漠なり論ずるに足らず一國の富は一國の富なり世界の富より小なり、而かも日本の小島、而して貧の其國に於いて如何に生產與業を隆盛ならしむると又無限にあらず有限たり、

親よ米國の富臺は、一人にして一小日本を購求する丈けの其日たるに有らづや余は一歩退いて日本國の富と云はゞ尙一層海外發展は最大重務と云はざる可らず、若し日本も大國たらんと欲せば海外發展にしくは無し、よし大國たらずとも前陳の如く安寧を維持せんとせば之にしくはなし、

親よ英國の大國にして日一日の中太陽が英領地を照さゞるのとなき所以を彼國が富有なりし所以にあらず文明なりし所以に有らず唯海外發展の緊要を認めたるものである、又露國の大國なる所以も見よ、「スペイン」人の世界至の所勢力を得て居る所以を見よ、獨佛の南亞米利加の炎暑をも物ともせづ洗濯して居る所以を見よ、是等の大國にして決して强兵を派して初めより其領地を古め勢力をしきたる物に有らず平和の裡に移民を送り自由渡航をなし以つて自國の國旗を輝かすに至りたる物で有る。

是は實際なり過去の歷史の示す處にして事實なり然るに此の点より日本を見る時は日本は愚なり眠り居るなり大國を欲せざるなり貧を解せざるものなり若し日本が愚にあらずして明なれば今日の外務省は破壞さる可き筈なり若し大國を欲するものならば擧つて海外に出ずる筈なり、若し貧を解さば外國の富おも解するなり若し眠り居るとすれば歐米諸外國の大國なる所以を過去の歷史に讀む可き筈なり願へば日本の愚を嘆息せずんばあらず然りと雖も息あるものにして今やおもき眼をこすり乍ら一足歩んで見ん哉と立ちあがる覇氣ある青年の存在するを喜ぶものである乞ふ其れ等の青年よ一歩と云はで世界を股にかけよ大平洋は大なりと

雖も世界の太洋の一部なりまたげば一またぎなり飛へば一瞬間なり、海外に在し異邦人の迫害は恐るゝに足らず、毫も意に介するに足らず、或は日本人排斥と云ひ日韓人排斥と云ふ。又黃禍論と云ふとても念頭にたくの必要なし、

寧ろ夫等は當然吾人の頭上にあつてほしきものなり其迫害は最も善きものなり、若し其迫害無くんば平和にして平和に有らず則ち平和の裡に亂るゝものなり、腐敗するものなり、破るゝものなり斃るゝものなり。

須らく其迫害なる可し乞ふ一層大なる迫害と吾人にくたし給はれと絕叫して已まず而らば何故其迫害が肝要か是れ一言以つて掩ふに足る、敵なき國は滅亡すと又此の逆に敵ある國は强しと視よ「日本國の强かりし所以露國に勝ちたるは獨佛たる敵の有りし所以なり近き將來に於いて日本が亡ぶるなれど其時は敵のなき時なり古來亡國の歷史を見よ皆已なり强き敵をもたざる國は亡びたり露國の敗れたるは露國が强敵をもたざる所以なり日本の露國に勝ちたるは己れの弱き所以なりし若し露國

にして日本に勝ち得べからずと覺悟して戰備を整ゐたらば必勝當然なりし、吾人は迫害されし共迫害する者より强くして愈々こゝに强くなるものなり決して恐るゝに足らず迫害する無知暴戾の奴輩は吾人の食をたゝんとすれ共吾人は愈々益々富有を重ねつゝ行くものなり、見よ世界到る所に於いて大富毫にして金樓玉殿を築き以つて一見如何なる人種のものなるかお判別し得らるゝの儀なるを示しつゝ有る猶太人を大富毫と言はゞ猶太人と思ひ大屋を見たら猶太人の家と思ゐと言ふに至りし所以は何によるか猶太人が到る所に於いて最も嚴烈慘酷なる迫害のある所以なり是れ以外に理由あるなし決して彼等が金儲けの上手なるに有らず、泥棒して集めたるに有らず唯迫害あるが故に他人を賴まず已れを固む他人は干與せざる故己れは他まで固守せん人金を貸さざる故己が貯ゐずばなるまじ苟も迫害ある度毎に此觀念が增進する程强くなり富をまし勇氣を增すなり實に猶太人の勢力依つて來るところ茲にあり是と同樣に黃色人種も然り今や諸所に於て猶太人の如く迫害さる然り實に可なり大にあるべし見よ「ベーリング」會と稱する大都に大迫害あらんとしたり爲に千の日本人あり尙韓人清人印度人其他黃色人種あつて慘酷なる虐待に逢遇したり然るに日本人のみが多大の迫害にあはざりし他の者は大なる打擊ありたり又日本人も大なる打擊ある可き筈なりき然るに其打擊を蒙らざりしは如何、他なし日本人は强くなりたり、是れより前英領「バンラーバー」に於いて日本人は多大の迫害をうけたり依つて今度「ベーリング」公に於ては日本人より大に遣つてくるの覺悟となれり而して堅く結社し幾万の敵たりともいざ來れと立ち構へた其勢に毛唐ち奴が愕き退却して彼等の目的を貫徹せざりし是れ前車の覆へるを見て後者の警めとし迫害の有ればある程强硬になるの然らしむるところなり。又邦人をして覺醒せしめ財を貯蓄せずんばあるべからざるの觀念を高からしむ故に在邦人の海外に於ける迫害は少しも意に介するの必要なし須らく渡航すべし、寧ろ吾人は其迫害を大に歡迎せずんばあらず又期待すべきなり「己の敵を愛せよ」僕は君の如く述べ來て君が斷然渡來せられん事を期望なすものなり否君のみならず一般日本人に希望してやまざるものなり。次に君は旅券の件につきて如何に旅券を受くるに困難にして多く海外發展の志望は此關所にて挫折するを常とすと實に然り有爲の青年を五里霧中に葬りて顧ざるとは此事なり、憫むべき鮮山起屋の外務省の小使たる知事乃至は郡長が余分の辨口に無暗と小面倒臭くするとは實に此の事なり吾人は不幸にして彼等の愚を蕩す可き良藥を持たず唯彼等と彼等の愚腦より產出せし法律を使ふの方法あり曰く「小僧と鋏は使ひ樣にて切れる」吾人は法律に使はれ可きものに有らず法律に使用すべき位置にあり吾人は官吏を使ふ可くして官吏に使役され可きに有らず官吏は吾人の小使なり法律は吾人の道具なり何ぞ小使に使役さる吾人ならずや何ぞ道具に使はるゝの理あらんや故に吾人は法律を切る樣に使用すべし官吏を自意に適ふ樣使役すべし旅券の下附を全ふせんとすれば其奧手は實に茲にあり決して他に方法あるなし當方卽米國より呼寄せの書狀を送つて下附願に添んと書にも又官吏を使役し法律なる道具を使ふの一つの方法なれ然れ共之は切れ味鋭き方法にあらず僕も友人の爲に其方法を講じたりしが遂に何薬の効を奏せざりし故に其方法は却つて損あつて益なし又あつて切れざるものなり唯方法は前述の如く上手に道具を使ひ小使を使役する是奧手なり僕は此奧手の經驗なし然れ共今日の日本の如き大束縛、大不自由、最暗黑極無知なる大恩惠の下にある幾多の人々は此奧手の驗しを經たり即ち猫も杓子も能く海外に有り得る是れ此の奧手を使ひしものなり、須く此の奧手を使用すべし已むなし其標本は小使部屋にあり即役場にあり役場は誰にても見んと欲するものあらば是れを見せるの義務あり依て大きな面して見得れば宜しく其標本を見て習ふべし、僕は述べ來りて茲に至りたる其要領は海外發展の緊急に初まり外國に於ける迫害は毫も恐るゝに足らずと述べ而して旅券下附の奧手に於て一段落を遂げし。

尙余は述べんと欲する事は以上の事柄につきても尙一層精細に說かずんばある可からざる事は思ゐ共「タイム」なきを如何せん尙航海中及び上陸後

付きて進ぶれば大冊をなす依て茲には之を
畧す而して又此等に付きては余り肝要を感じない
命儲け主義に著進もするならば或は宜からんなれ
ど實際には進ぶるの要なし。僕は終りに猶肝心要
目な事を言はんとすそは言語なり日本語を良く勉
强す可し自國に至つては自國語の不便を感せず從
つて已が自國語の素養につきても深く自覺するを
得ず依つて以て等閑に附して顧みず是れ大なる不
可なり見よ校友會報七八號は一として完全なる文
章あるなし最はげしきは宇宙天則を破壞したる文
章を見るに驚かざるを得ない誠に百十頁の「職員
動靜」の部を開き見よ、此部に於ける第一項黑河
内氏に就きての記事を見よ又第三項の大島氏に就
きての記事を見よ「是れ全く生るゝ前に死にたり」
と云ふ意味と同一なり卽ち是等の記事は本年就職
して昨年辭職したりと云ふに有り是れ過去現在の
破壞なり、實に雄大なる哉。古來星霜移りて茲に
久し未だ曾て此天則を破壞したる者一人も有るな
し唯木曾の山間より湧出する怪報なるもののあるの
み是れ恐らく日本語の素養なき爲なり又僕の知人
にして高等教育を受けて渡米し學界に起たんと熱
心に勉學しつゝなる者なるが彼は曰く「いも少し
邦語を勉學して見れば宜かつたに」自分で自分を
恨んで居るので有るが實に然り例ひ高等教育を受
けたりとても如斯、恐らく在邦中に日本語の必要
を感じてそれに勉めたりとも尙遺憾あり況んや等
閑に附して顧みざる物に於ておや希くわ邦語の研
究に一層勉められん事を、邦語の出來ざる者が外
國語を研究等とは以つての外の事なり而して外國
語の研究は苟くも社會に起んとするにわ必須のも
のである邦語のみにては其國の事情を知るのみに
足らず例ひ外國語に通するものが飜釋し通譯する
と雖もそれには到底間に合はざるものなり尙外國
語も一國ばかりにてはもの足らざるものなり成る
可く多くの外國語を修むるの必要ありもし外國語
を等閑に附するものありとせば其人は世界の一隅
に踢跳呻吟して居るをあまんずる者なり其人は得
て語るに足らずオ、覇氣ある者は擧つて外國語の
修養に努力せられよと余は絶叫してやまず今や吾
人は眠り居る時代にあらず跳ね起き飛び起き一鐵

萬里の早步にて向上の一路に猛進せずんばある可
からざるの時代に在り依つて朝は疾くより夜は遲
く迄勉學に汲々たらずんば到底此生存競爭の激し
き世に步調をそろへて行く事能ず見よ日本の中學
卒業生だとか何々專門學校の卒業生だとか或は大
學卒業生だとか言ふ輩が愈世界の舞臺卽生存競爭
場裡に現はれたる時は皆首尾良く落第するを見よ
日本にて中等以上の教育を受けたる者にして小米
の小さき都市たる「シャトル」とか「タコマ」とか言
ふ所に於てすら生存競爭に敗衆をかざし田舍へと
驅け追ち柄にも似はぬ立派な士ほじり職をなし以
つて貴重の時間を不快に而かも無氣に過すにあら
ずや是れ生存競爭裡に出現する丈の素養を自身に
着ざりし巧勞に外ならず、吾人は一時間を他人よ
り後れなば一生に亘り其一時間の課程は後れたる
ものなり譬ひ他人に追ひ着きたりと思ふともうは
誤なり一時間を先んじた人は何も一時間を前に在
るなり即ち遲れたる人の追ひ着きたりと思ふ時に
わ他の人は已に他の事を思ひ或ひは爲して居るも
のなり、故に吾人は一時だに他人に後れざる樣な
らずんば到底生存競爭場裡に立つこと能ず、余わ
更に言ふ言語の能く解らぬものは生存競爭場裡に
於て敗軍の徒のみ、希くは外國語に一層努力せら
れよ、余は此度は之にて一寸筆をとめて又書を送
らん余は最遺憾とする所は今日の日本の外國語を
教授する人の拙なるにあり決してヘボ教師の教授
のみをあてにする勿れ、妄言多罪

九月廿五日　モーセス

オイ野知里君僕は一寸別紙の如く筆にまかせて書
いたがあれは余が一般の人に進べんとする所にし
て又君にも述べたくて而して勸め度くて困る事だ
君にして取る可き點が彼の愚意の中にあらは取り
てくれ給へ然らば幸甚又取りくれざるとも何等の
痛惜なし。

一寸君に頼むが僕は前紙の如き意見を山林學校在
學生諸君にも通じたいが書く可き「タイム」が無い
から別に書ひたから御願だから君に送送つた別紙
のものを君が一生懸命訂正して學校の方に送つて
くれ給わ何分御依頼申候此の訂正とは添刪の意味
だよどんなに添刪しても其權利は君に委屬する、

若し割せらるゝ時は余獨りで負ふ、君願む。

能登國羽咋郡加茂村字安津見
寺尾敬二君より

拜啓前文御免下され度候校友會雜誌辱く拜受仕り候（以下省略）（四月四日）

廣嶋縣廳内務部勧業農務係
青戸爲九郎君より

住所異動届

特別會員　青戸爲九郎

右今般廣島縣技手、廣島縣林業技手奉職候に付き校友會に關し御照會其他會報送達等に就ては右の居所と決定致し置き候に付き此段及御届候也

（四月十日）

飛彈國大野郡高山町高山小林區署なる
松澤萬吉君より

謹啓其後は以外の御無音に打過ぎ候段平に御宥恕下され度候、時下櫻花將に淀びんどするの好季節先生には御支障もなく益々健全に渡せられ候哉伺

上候、降て小生儀昨年來不慮の病魔に侵され久しく臥し居り候處今春愈快方に趣き昨日當地へ赴任仕り候當高山の天地も木曾の地と大差無く一小會地に御座候着任早々何の樣子も分りませんが詳細は追て御通報致度候先は動靜一寸御知らせまで早々

（四月廿二日）

青森大林區署　（第一信）

本田清右衛門君より

拜啓時下日増しに暖氣相加へ申候折柄櫻花も木曾谷を訪づれしならんと考へられ候兄等定めし櫻樹之下花をめでつゝパン又は大福餅に舌つゝみをならし居るならんと余は在校當時を思ひ浮べては實に無量の感慨に堪へず候小生は職務之余暇には在校當時の今は實習の事を思ひては山に行きては畫は屁臭へ鹽からいさけ一切にたくわん漬二切に空腹を滿し之れ由海の珍味なりき等と實習終はれば寄宿を飛び出し倉野屋吉久に行き櫻餅に滿腹した當時をかれこれと思ひ浮べては一人心を慰め居り候今の處有名の本多式大法螺も吹き立て兼ね又大

聲一番力山を拔くもウナリ出せず至極窮屈に候之れも此處暫くとあきらめ居候官廳と云ふ所はなか〳〵學校等とは違ひ上下の階級嚴しきものに候殊に署長の權力なんと云ふものはたいしたもの至極もつたいをつけ居り候樣何にとなく笑しく候余は屋として末席に座をしめて居列ぶ上官を望見しては大笑一番ハクショも出で兼ね候噫々面白きは官廳なるかな又苦しきも官廳なるかな朝は八時より午后六七時頃迄椅子により机に向ひ居るケツはいたくなるアクビは出る余は未だ新任にて表向き大笑一番アクビも出でず實に困り申候小生は今の所林野法規大林區署例規其他諸規則を見る旁々雜務に從事仕候之れも此處暫くに御座候數日中には官行伐木事業所詰と相成る事に候へば亦その時は之れ等の事業に對し實地調査の上御知らせ申上可候却說青森と云ふ所は至極よき所にて候殊に小生在勤之横濱小林區に海岸にて海岸迄一町位にて大波小波とも行かんが浪はダバン〳〵と打ちよせ來る樣を見つゝ事務に從事仕り居り候噫何たる幸運見ずや木曾谷に鹽からい庇臭ひ魚に舌をならし居り三星霜を暮せし余又何等かの感なかるべからず又之れよりは海水浴も自已の思ひのまゝ自由にて候又名物林檎も食ひたいほりだいに候又ビン〳〵たる取りたての海魚を料理して食ふたものなら兄等よよたれをたらし雨親より折角の新調の衣服を濕す勿れ又天氣快晴なる時は北海道の山々遠く雲間に望見し氣は既に北海道の天地にあるが如くに候又遠くハ甲田山を望みては青森第五聯隊の風吹の雪の難の當時を忍れ轉た數行の涙行の涙に袖を濕し候夫れ青森の地斯の如し兄等卒業の上は宜しく來るべしまた〳〵言語風俗等に付き書きたきことは山々なれど今度は之れにて御免下度候終りに諸子に一言せん諸子は常に如何なる感想と他人及友人に對し如何なる態度を以て接し居らるゝや吾れ之れを知るに由なし諸子自身大に顧みて可ならんか諸子は他人諸子に向ひ棒を以向ひ來りたる時諸子は之れに報ゆるに如何にするや又棒を以て報ゆるや如何に諸子は自己を偉きものなりと思ふや諸子の常に用ふる言語彼れはナツテイナイの語は如何なるものなりや噫亂筆失禮仕り候新入生諸君よ余本

年の卒業生に候法螺を以て校中の名物男なりき諸氏宜しく今后御交誼を願ひ上候諸子よ木曾谷の情況知らせ下され度候余も又どし〳〵申上候草々

（四月廿五日）

（第二信）

拝啓時下日に増し暖氣を加へ申し候折柄梅花まさに紅を潮せんとする好時節に相成り候處、先生には如何御起居遊ばされ候や御伺ひ申候、降て小生には其後は意外にも壯健まして日々業務に從事仕り居り候間余事ながら御安心被下度候。さて先まも申上候通り小生は官行伐木所詰員を命せられ、兩三日にして出張致す事に相成り候他の同窓たる一木君、塩澤君、は共に造林事業に從事する事に相成り候間左樣御了承被下度候。

却説青森は實に宜しき所にて小生と終生此の地に暮したき樣な感じも起り申候。殊に小生の今在勤の横濱は實に海岸にて風景絶佳夏季は海水浴に住今迄と木曾谷にありて鹽からいほし鯔や、くさい鑵詰に舌つゝみをならし居り候得しが今やピン〳〵たる海魚何に無くとも食ねほーたいに御座候

（九二）

此の樣な天地に暮すがいやたとが、又苦い、とかにて前卒業生の再び木曾に歸りし人たちの氣如何なる物なるや小生は知るに苦しみ居り候。小生は本日當小林區内伐木、伐集材、檢査此の爲に海岸二三里の間に散在する木材を點檢致候。北海の海岸に打ち散つて雨とはならず至極靜かなるものにて候遠く青森灣を隔て北海道の山々を望見しては實に無量の感に打たれ候詩吟一番はり上げんとはなしたれど他を憚り心ならずも止め申し候。又濱邊には奇岩奇石珍らしき魚類貝類散在し又貝拾ふ小女、赤かきこしまき出し、あち〳〵と或は立ち、或はかゞみ、或はすはり、居る等は實に繪はがき等に見る所今實現して一層の趣味を思はせ候、噫々余はもと山林中に熊や兎と終生暮すを以て務めと思ひ居り候に計らずも此境遇之れ一重に先生の賜と深く心に銘じ居り候。他に澤山知らせ度き事有れども業務多忙の折柄なれば何卒今度は之にて御許し被下度候。終りに先生の御壯健にて御敎務遊ばされん事を隱ながら祈り居り候。

（四月廿三日）

（第三信）

北國の天地も春風に浴し初め申し候、而し山中木蔭には白雲皚々、冬間の寒さを思はせ候、其後先生には如何御暮し遊ばされ候哉、御伺ひ申上候、降て小生には大林區在勤以來直に官行伐木詰員を命せられ候て表記の所に日々山小屋生活と洒れ込み申し候間余事ながら御休神被下度く候、小生事業所は本洲の最北、下北半島の中間の深山にて候在校中諸先生より聞き及び申し候通り所謂青森樣の純林鬱蒼として晝尙闇きかとぞ思はれ候、實に深山幽谷に入りたるかの感致され候、初めの中は山も不案内の爲至極山に足を入るゝも氣もち惡しかりしが今は慣ひ性と相成り候て左程恐しくも無く相成り候、小生等從事致し居り候事業所は斫伐作業に候、幼樹保護なんか眠中に無く至極慘酷に候而し實際は學術的と適合せざる止む無き次第に候、うは事業収支の關係上如何官行事業とは云ゐ収支償はざる事業はなし得可からざる事に候、小生等は現今は伐木造材是早終了致し丸太山中小出し土場運搬鐵道枕木造材事業に從事致し居り候、而して本事業の目的は鐵道枕木製作に有之候、實は本年當大林區に於て鐵道廳より二十萬挺の枕木注文に相成候依て今や是が製作に全力を盡し各事業所に於て盡力中、當事業所に於ては一萬九千挺の枕木製作す可く割りあてられ、目下小生等之れに從事致し居る次第に候、當分否將來とても枕木の需要大なるは殊に我國の如く隣國、清韓國を控へ居る國に於てをや、其需要の大なる事又明かなる事に候、噫々枕木の研究又勿緒にすべき事に無之候事と思去し致され候、運搬に付き當事業所現行しつゝある土橇運搬等に付きては詳細調査の上校友會報に載する感ひに候、他に記し度き事あれど事務多忙の折柄なれば又后便にて申し述ぶ可く候先は亂筆失禮仕り候、終りに先生の御康健と幸福とを蔭ながら祈り居り候。（五月廿九日）

青森大林區署業務課
塩澤英一君より

謹啓在校中は先生には一方ならぬ御世話樣に相成り厚く御禮申上候

御蔭様を以て當大林區署より十五日の出頭命令に接し早速參りて辭令を受け、業務課中造林係に加り勤務仕り居り候間乍他事御放念被下度
先は御禮旁々御報知迄　不一　（四月廿九日）

宮城大林區署
原喜四三君より

拝啓在校中は種々御厚情を蒙り難有御禮申上候去る廿一日徴兵檢査をなし翌日自宅出發道中無事にて廿六日午后六時頃仙臺市に到着毎日大林區署へ出勤能在候間乍他事御休心被下度候御手數ながら諸先生へ宜敷先は右不取敢御報知まで申上候早々
（四月三十日）

古河鑛業會社足尾鑛業所調度課
利根出張所なる川岸滋次郎君より

拝啓常々御無沙汰計り申上候段申譯無之候、去る廿二日午前八時吾同窓なる三十八年卒業生岡田直一氏は十ケ月計りの病床中の處藥石其効なく遂に世を去られ候誠に〳〵惜しき限りに候、氏は卒業後農科大學構内に林産製造を講究せられ居りしが故あり故郷に歸り昨年五月秋田大林區署に赴任せられしが全七月に至り腹膜炎の襲ふ所となり全十二月歸省し家安療治中なりしが思はからず金澤病院北二等室にて遂に黄泉の客と成られたり。
（四月卅日）

山梨縣北都留郡丹波山村字泉水谷
東京府有林内小山田喜重郎君より

拝啓夏季之候に相成り候處先生には御變りなく御教務に御勉勵之由大賀奉り候其后は永らく御無音に過ぎ誠に申譯無之平に御海容下され度候小生も幸なる哉先年十月東京府林業技手となり今年三月二十圓に増給致し候此れ偏に先生及諸先生の御薫陶御盡力と乍蔭感謝致し居り候
目下は造林事業に從事致し居り候當地は玉川の上流にて地位海拔五千尺前后の處に候へば樹種は重に落葉松にて檜も少しく植林致し居り候先づは御報知迄斯くの如くに御座候　（五月三日）

宮城大林區署内
南勝右衛門君より

不變御壯健にて御執務あらせられ候哉御伺ひ申上候降而私事御校在學中は御懇篤なる御教訓に預り御蔭にて漸く半人前と相成り日々出勤致し居り候間乍憚御安神被下度候先は右御伺ひ迄草々
追而委細之後日御報知申上候　（五月七日）

東京神田區錦町一ノ一篠崎方岡戸
都二君より

拝啓豫定通りより降雨の爲め一日延引仕り甲府一泊翌五月二日午后三時無事着京候間乍他事御放念被下度候三日大林區へ出頭し特別經營課内調査係の雇を命ぜられ毎日出勤致し居り候間御安心被下度願上候確定せざるも本月の十日頃より三ケ月許り出張致す樣に有之候
先づは不取敢御通知迄で草々敬具　（五月八日）

上高井郡保科村長野小林區署官舍
和田宗吉君より

拝啓仕り候
春意漸く深く郊外は散策の好期と相成り候處諸先生には益々御清榮の段奉賀候其後は打ちたいて御無沙汰致し誠に申譯も無之平に御宥免下され度候昨日は校友會報御送り下され加之何より珍しき繪葉書迄誠に有り難く候當假地に於ては又何よりの好伴侶に候昨夜は夜を徹してまでもといふ有樣此段厚く御禮申上候御わび方々何か投稿致し度候へ共現時造林事業始まり居り候へば何れ結了次第申上げ度候
先は右不取敢御禮申上度如斯に御座候（以下省略）
（五月八日）

豐橋騎兵第十九聯隊第一中隊
下畑德十君より

謹啓新緑將に滴らんとするの候貴會益々御隆盛之段奉大賀候去日貴會より御送附被下候處の會報第九號並に優美なる繪はがき有難く奉感謝候殊に三年振りにて母校の最も正確なる消息を得たる事なれば取る手遲しと拝見候へば内容の趣味の豐富なる事如何にも研究部役員諸氏が苦心の程も見へて多謝の念は胸に湧き出で申候亦母校を辭して僅に三年其間變化を來せし幾多の事故は層一層と感を

深く成し申候亦一方より云へば最も吾人に對し悲
慘なる事實の多大なる事に御座候
吁尤も敬愛なる手塚師を始めとし松原加藤奥牧山
田諸氏何れも因緣の淺からざるものなるに於てお
やである諸氏は吾林業界の爲め幾多の多大なる望
を抱きつゝ意圖半にして仆れし者にして吾林業界
の爲最も悲しむべき事實に御座候
亦母校の大なる變化のありし事は驚き入り申し候
郡立より縣立、校長以下諸先生の交迭殊に米山師
の病氣退職に向つては尤も遺憾とする所なり之れ
豈生一人の意ならんやである亦新築の噂刻一刻も
事實となりて表現せん事は吾人の尤も希望する處
に御座候、
亦貴會に於ても弓術部の新設大慶の至り、探險部
は吾人が創始當時微か乍らも役員の末席を汚せし
を思へば現今の隆盛なる樣實に喜ばしく存じ申候
去る三十九年更衣の候一度催して失敗に終りし事
ある兎狩や雪の西野の里探險等の事實となりて紙
上に一日も早く目見ゆられんことを蔭ながら待ち
居り申し候、

次に小生事も去る四十年十二月一日現役兵として
表記の隊に入營以來別に大なる變化もなく尤も無
情の風の吹き暴む兵營内にて一年有半を過し申候
尚殘る一年半を過せしならば又林業界に身を捧げ
ん覺悟に有之候而し入營の際は習志野原なる假兵
營なりしが其后新築落成に付き豐橋に移轉仕り爾
來朝な夕な愛馬と共に暮し居り候　會員中大脇又
衛君と小生も確たる事は知らねども去る四十一年
中は歩兵第五十九聯隊に衛生部下士候補生として
衛戍病院に通勤致し居り昨年十二月一日は凡て任
官となりたれば三等看護長となりて多分氏には第
十四師團營内の病院に在勤の事と存じ候
元本會々員にして中途退會せし三澤標治君は目下
騎兵第十三聯隊に二等蹄鐵工長として服務中に亦
同安藤孝一郎君は當隊第二中隊に於て目下服務中
に有之候、先は一報まで生は會員諸賢の御建勝を
祈る　（五月八日）

下野國那須郡黑磯澤大田原小林區黑磯保護
區官舍　横山治人君より

拜啓貴來御無異に打ち過ぎ候乎に候海容被下度候
落花万綠の候、先生諸產には益々御清榮の段奉賀
候先日は懷かしき校友會報御送附被下正に受領仕
り候早速御送金旁々御報知申上ぐべきの所何分に
も當署造林事業に毎日外業にて忙がはしく且つ不
便の地とて斯く延引致し候次第不悪願上候（下略）
追而本年の卒業生諸君の方向等に付き一寸御報知
煩し度願上候也　（五月八日）

東京大林區署
宮川永三君より

私儀、東京大林區署へ俸職の爲め本月十六日出發
可仕候に付き此段及御届に候也　（五月十五日）

青森大林區署特別經營課
由尾忠輔君より

拜啓日增暑氣相加候處諸先生始め校友會員諸兄益
御清祥の段奉賀候小生無事勤務致居候間御安神被
下度し兼ねて御伺致置候煙害調査に關する原稿本
日遂附致し候間御一覽被下度甚だつまらぬ物には
候へ共寛大の御處置を以て紙上に御掲載の榮を得
ば誠に本懷とする處に御座候今年は施業案檢定御
用の爲め津輕半島事業區に出張の豫定に有之近々
出發致す事と存候過日赴任被致候一木擄澤本多三
君も各小林區署在勤被命近來は事務にも慨通致し
餘程面白く相成候樣折々の通信にて承知致居り候
同窓生目下十二三人に有之一時二十人を數候へ共
追々減少致し誠に心細き次第に候御校三學年諸君
の修學旅行日誌は毎日新毎紙上にて拜見致居候之
に依て見聞を廣め日頃習得せし學術と並立て修學
上利する事蓋し甚大ならんと存候今回林區署官制
改正の結果從來四分課なりしを庶務林務會計の三
係とし業務課は業務利用の二係特別經營課は施業
經理土工の三係とし施業係は施業案、測量、造林
査定の四部より成る事と相成候、施業係長は是迄
施業案主任技師細川賢一氏に有之候先は右御伺迄
如斯に御座候　（五月卅日）

校内記事

第六回卒業證書授與式

三月廿五日、講堂に於て第六回卒業証書授與式を擧行す。午前十時生徒職員並に本縣知事代理細川縣視學を主として、田中帝室林野監理局木曾支廳長、松田前校長、武藤判事、犬童郡長、赤浦技師松高警察署長、八木郡會議長其他郡會議員、郡書記小學校長及父兄生徒保証人一同着席、君が代の奏樂と共に壯厳なる卒業式は開始されたり

江畑校長の勅語奉讀續いて式辭、及訓辭伊藤主席教諭の學事報告、證書並に賞品授與、細川縣視學の知事告示代讀、田中支廳長、武藤判事の祝辭、細川縣視學の個人としての卒業生に對する希望訓辭、職員總代林教諭の祝辭、在校生徒總代長谷郡兵治氏の送辭、卒業生總代中島要人氏の答辭あり午前十一時半式全く終了せり。

本日卒業證書を授與せられし者廿八名氏名左の如し

（身長順）

下伊那郡喬木村	松澤莊太郎
北安曇郡大町	倉科浦一郎
茨城縣筑波郡島名村	本田清右衛門
埴科郡五加村	宮入汎省
上水内郡北小川村	松尾忠恕
小縣郡長村	一之瀬裂裟壽
下伊那郡飯田町	原喜四三
岐阜縣惠那郡川上村	原雛助
上水内郡若槻村	粟野原治平
西筑摩郡福嶋町	岡戸郁二
仝郡駒ヶ根村	蜂須賀宮次郎
仝郡田立村	宮川永三
山梨縣北巨摩郡新富村	一木虎雄
南佐久郡北牧村	島田雄太郎
仝郡南相木村	中島要人
山梨縣北巨摩郡下條村	仲田惠令
和歌山縣那賀郡上神野村	南勝右衛門
西筑摩郡大桑村	田中吟重
仝郡福嶋町	山村治一
仝郡新開村	向井辰次郎
東筑摩郡松本村	中田辰雄
西筑摩郡福嶋町	原七郎
埴科郡松代町	野村光智
更級郡布施村	若林遊龜尾
西筑摩郡大桑村	洞山鹿之助
仝郡福嶋町	蘆澤庸三
上伊那郡飯田村	塩澤英一
西筑摩郡福嶋町	原田英二

伊藤先生を迎ふ

去りぬる二月廿日、降る雪白く校庭にうづ高く寒氣堪ねがたき時、茲に温厚德實なる伊藤先生を迎へたり先生には去る明治四十年七月帝國大學農科大學林學科を卒業せられ、同年十二月一日一年志願兵として丹波福知山工兵大隊に入營され昨四十一年十二月除隊となり、歸郷中の所今回本校教諭に就任せられたるなり。

信頼する先生よ、希くは獨特の技能を發揮せられて吾々を導き給へ。

始業式

四月五日午前十時、恒例の如く職員生徒一同講堂に參集し、新學年始業式を擧行す。

入學式

梅花既に笑を洩し、櫻花將に紅を潮せんとする、四月十五日午前十時より新學年度入學式を講堂に擧行す、新入生徒に對する校長の訓諭あり、舊生徒總代の迎辭、新入生徒の誓辭あり。

此の日第一學年に入るもの四十八名なり。

今を距る二旬日、廿有八名の卒業生を送りしが、今こゝに新進の諸子を迎ふ。師第百卅有余和氣藹々として親睦の情其の面に溢る、十一時式終ゆ。

宮島金兵衛氏の講話

五月五日午前九時より雨中体操場に於て、氏の林業經驗談を乞ふ。氏は本縣東筑摩郡和田村の人にして去る四十年十月上田町に開催されし大日本山

林會に於て、推豊栽培法を講演され一同の拍手喝采を得られたる、名聲斯業に隠れなき氏なり。氏の講演又妙を得て人をして倦ましめず、面白可笑しく、自然と目指す所に突撃するなり。先づ精神的に於ける林に、より始まり、推豊栽培法、製炭法とにうつり約三時間を費せり。一同整肅に細大洩らさず聽止したり、生等今氏が實地經驗談を聞くに及んで愈ます〳〵實習の輕んず可からざることを悟れり。諸子夫れつとめよ。

有川教諭告別式

五月十三日、一昨年來本校教諭として盡力されし有川先生、長野師範學校教諭兼附屬小學校訓導に榮轉の報に接し、直ちに午後一時講堂に於て告別式を擧行す。江畑校長の式辭、有川先生の在校中の功勞を唱して轉校を惜む、生徒総代松本清太氏の送辭、有川先生の痛惜なる答辭あり、式全く終ゆ、

創立紀念祝賀式

五月十五日午前十時、第九回本校創立紀念祝賀式を擧行す、職員生徒一同着席、江畑校長の祝辭及訓辭あり、肅然たる裡に、式終ゆ。

此の日や春風うらゝかよ、日晴れ渡り幾十の万國旗は朝早く、校庭上高く飜へり、祝砲轟々、打ちならし、喜色滿面、誠いつ、笑わつ、叫びつ此の愛出度き紀念日を祝せり、森羅万象皆又吾々を祝せり。

實習

二三學年生は四月六日より實習をなす、十七日より全校生徒、地明、造林、砂防工事、苗圃（床替播種）等の實習に從事し五月一日完了。

實習地は最も遠き裏山演習林にして、全生徒を廿組に分ち、各組に依て其の行動を異にす、或は地明に或は造林に。砂防工事は二三學年生交替に之が實習にあたり、演習林通路の破壞したる二三個所に設けり、伊藤、小松雨先生竝に川崎助手日々生徒の監督さる、植栽樹種は檜、さわら等なり。床替苗圃は第二、第三苗圃（長福寺前）播種苗圃は昨年の跡地即ち第一苗圃にあつ。

[illegible]試驗播種苗圃と實地的播種との二

區に分ちたり、未だ其成蹟わからず。

修學旅行

五月十七日、恒例によりて三學年は關東方面に、二學年は關西に修學旅行を企つ、乃ち午前六時半職員生徒これを寢覺迄送る。

三學年旅行生廿九名は伊藤教諭に、二學年生卅三名は江畑校長に引率せられ、いでや千里も踏み破りかねまじき勢もて其の途につきぬ。

越ねて卅日、十四日間關西の地を踏みならしたる三學年生を再び寢覺に迎ひ、翌六月一日十六日間の長途旅行を終へたる三學年生を宮越に迎へぬ、士氣頗る旺盛にして喜色滿面に溢ふる。一同嬉々として相語る。

西澤、河野兩先生を迎ふ

六月三日、前靜岡縣立農林學校教諭たりし西澤先生を迎へ、續いて七日、盛岡高等農林學校農科出身の河野先生を迎ふ。

願くは賢明なる兩先生よ、豊富なる學識と優秀なる手腕を振て、生等の痴呆を啓めず指導薫陶せられん事を、生等も亦一意專心先生が御教訓を講じ聊か皆戻せざらん事を之れ契ふ。

職員辭令

川崎本雄君

同君は去る卅九年度本校卒業生にして、其後一年志願兵として、豊橋歩兵第十八聯隊に一個年の軍務生活を味はられ、滿期除隊後は帝室林野監理局木曾支廳に勤められ、本年四月十七日より本校林業助手に轉せられ熱心に掌職されつゝあり。

任長野縣立甲種木曾山林學校教諭　伊藤門次
（明治四十一年十二月十八日）

長野縣立甲種木曾山林學校林業助手を命ず　川崎本雄
（明治四十二年四月十七日）

長野縣立甲種木曾山林學校教諭　有川仙之助
任長野師範學校訓導兼教諭
（明治四十二年五月十日）

靜岡縣立農學校教諭　西澤靜人
任長野縣立甲種木曾山林學校教諭
（明治四十二年五月十八日）

任長野縣立木曾山林學校教諭　河野長六
（明治四十二年六月六日）

本校職員及び受持學科（六月八日より實施）

職名	資格	受持學科 三學年	二學年	一學年	姓名
學校長兼教諭	林學士	經理		通論	江畑徹之允
教諭	林學士	法制 經濟 英語			伊藤門次
教諭	農科大學林學科實科	測量 土木	測量 測樹學 英語	幾何、保護、	小松吉次郎
教諭	農科大學林學科實科	林學、林價算法、造林學	利用學 造林學	林用、造林、植物、	西澤靜人
教諭兼舍監	長野縣師範學校	三角	代數 物理 化學	代數 化學	林重郎
教諭	盛岡高等農林學校農科	土壤 地質	氣象 農學	農學 園藝	河野長六
助教諭兼舍監		倫理 國語 漢文	倫理 國語 漢文	倫理 國語 語文 漢文	高木本枝
助教諭兼書記	后備騎兵特務曹長	兵式體操	仝上	普通體操	征矢野茂樹
書記					安井正夫
書記					森田長次郎
林業助手	木曾山林學校				川崎本雄
教授囑託	林學士	利用			赤浦力次
學校醫士	醫學得業				芦澤三郎

校友會彙報

本誌改名に就て

本號より本誌名、木曾山林學校々友會々報を岐蘇校友と改稱せり。之れ別に意味あるにあらずたゞ長たらしく「木曾山林學校々友會々報」と更らに振はず、加之傍に又木曾山林學校、校友會とありて繁に過きたる感あり、理事會の協議の結果万場一致を以て可決し會長の許可を經て茲に岐蘇校友と改稱したるなり。本校に縁り深き此の木曾――岐蘇二字を冠に取れり。本校の此の木曾に生るゝや己に百七十有余の岐蘇健兒或は北米に、滿韓の野に内地に擴張して活動を試みつゝあるにあらずや

卽ち此の岐蘇の天地を根據として日本國はたゝか世界迄も幷呑せんとする意に他ならざる也。

臨時會並に例會

例會四十二年二月六日

本日午後一時半より雨中体操場に於て開會す、帝室林野管理局木曾支廳長田中技師の演說を乞ふ外交政略上の歷史の要に氏の豫測する將來に就て一時半に涉る長演說あり續ひて本校第三回卒業生にて現在木曾支廳測量科に在る前野慶一君の測量に於ての歷史並に學理次に第四回卒業生にて同じく木曾支廳の同科技手西野入德君の根と枝條と題し在校生に對する頗る痛直なる長演說あり吾人大いに顧みざるべからずかくて閉會を告ぐ午後四時半

例會　三月六日

本日午後一時半より講堂に於て通常例會を開く、中島研究部長の開會の辭、並に左記の事項。

一、研究部長として氏一ヶ年の經驗談

一、各部役員の引渡しを每年三月に於て之れを決行したき事。

一、米山、江崎兩教諭に紀念品贈呈に付き委員六名を擧ぐ。

松本清太　長谷部兵治　金田美行
伊藤憲一　德弘正夫　藤田要吾

一、今後卒業生より實費徵收を理事會に於て會長の原案通り可決したる事

次に宮入汎省君の生徒間に於ける制裁、本多清右衛門君の樺太の大富源山林業、宮崎新太郎君の生存競爭、服部啓次郎君の豪壯の意氣と實力に就て演說あり。午後四時半閉會す。

臨時會＝新卒業生の送別會　三月廿五日

本日午後一時半より第六回卒業生の送別會を講堂に開く、江畑會長の開會の辭、並に卒業後に對する訓辭あり次に卒業生總代倉科浦一郎君の謝辭續ひて金田、新田、松本、長谷部等諸君の送別の辭有川教諭の卒業生に對する訓話あり。和氣藹々の裡に時うつりて、つきせぬ別れを惜みつゝ茲に卒業生の万歲を三唱して閉會を告ぐ、時正に三時半

通常例會　四月二十日

本日午後一時半より雨中体操場に於て開會す。

本年度役員改選を行ふ、左の如し

研究雜誌部顧問　伊藤敎諭
一、谷部研究部長　高木助敎諭
一、谷部研究部長　長谷部兵治
中部研究部副部長　宮澤清輔
本日幹事部副部長　森田書記
庶務會計部顧問　松本清太
部長　金田美行
副部長　河野敎諭
庭球部顧問　向井正勝
部長　伊藤憲一
副部長　征矢野助敎諭
弓術部顧問　甲林林
部長　田林
副部長　小石彌三郎
擊劍部顧問　西澤敎諭
部長　新田忠次郎
副部長　磯村益雄
探險遠足部顧問　林敎諭
部長　原耕民
副部長　上原

午後四時閉會を告ぐ。

臨時部長會　四月廿二日

本日午後二時より第三學年級敎室に於て部長會を開く。各部の部長及副部長列す。

一、本會各部の委員撰出

二、來る十五日本校創立紀念日祝賀餘興委員八名撰出

右會長認定發表す

餘興委員　金田美行　新田忠次郎　甲林林　伊藤憲一　澤木儀一　小池一郎　神戸林三　宮崎新太郎

臨時會＝有川敎諭送別會　五月十三日

本日午後二時半有川敎諭の送別會を開く江畑校長の開會の辭、竹内に謝辭、校友生總代長谷部兵治君の送辭、有川敎諭の答辭あり。金田服部福田等諸君の送別の辭あり、痛惜感極つて肅々の裡に閉會せしゑ正に四時なりき。

願みれば明治四十の年皓々皚々として万山千野一望銀世界の頃先生を迎へてより年を閲すること二其間一日の如く懇々淳々として生等を指導され薫陶感化具さに至る、其の思や大、謝するに辭なし然るに今將に本校を去つて遠く北信の地に送らざるべからず一樹の影に宿り一河の流を汲むも尙且つ二世の結緣ありと、まして二ヶ年が間高敎を辱ふせし吾等何ぞ離別の感なからんや。

噫敬慕禁する能はざる先生よ、希くは自重自愛せられ邦家の爲め斯道の爲め盡瘁せられん事を、謹んで爰に先生を送る。

例　會　六月十九日（土）

本日午後一時半より講堂に於て、本月例會を開く長谷部研究部長の開會の辭ありて後左記辭士の演說あり。

昔話と題して意志の强固に就て　伊藤敎諭
克己心　西澤敎諭

雜　感　河野敎諭
軍艦の說明　金田美行
余が愛林思想　宮澤清輔
眞　理　福田寛二

午後四時半閉會す。

創立紀念祝賀會

五月十五日午後五時より雨中体操場に於て本校第九回創立紀念祝賀會を擧行す、職員生徒一同着席長谷部研究部長の開會の辭あり、大村、伊藤、原田、長谷部等諸君の最も滑稽なる、最も面白き五分間演說あり。終つて愈余興にうつる。新体詩＝吉澤君の今年の夏の休みには、山本保治君のポーランド等、愈佳境に入るや、宛然一同醉いるが如く、場内は水打ちたるが如く、誰れ一人一咳の聲を洩す者もなかりし、歌い終るや拍手の聲高く場内を破りて天地爲めに碎けんばかりなりし、他、和田君の八道の山、本日本校創立紀念日を祝して長谷部君の新体詩あり。手品にうつる＝市川君のイスアイ式、發火術、秋山、木藤兩君の手品あり

殊に市川君のものに至りては有餘にして且つ趣味多く一同の拍手喝采實に止まざりき、化學應用砂糖に水をかけて、火を出す法とか、口上終りて之をなすや忽ち轟然たる響は明を破りて青火丈余高く飛び上がりぬ、成功々々〃。甲田君の謠曲、金田君の琵琶歌及詩吟誠に妙妙を極む、常に拍手やまず〃〃小池一郎、十屋、神戸、福田、服部等諸君の勇壯なる劍舞、實に優柔なる懦夫をして起たしむる感あり、誰れなるか小嶋高德に擬せる活人畫最もよく出來たり他の白虎隊、八人白衣に、白光ひらく大刀拔きもちて、後ろにある老松の梢上に月に擬せるマクネシームの炎、モロ〳〵と立ちのぼる、げに云い難き風光なりき。

最后に今日が花とも稱すべき喜劇「將に滴らんとする露の雫」は開かれたり、段は四幕に分ちたり或は笑ひ、或は叫び、或は涙ぐみ〃手に汗を握つて次の幕の開くを待ちたり。一書生の朋友に對する義氣を表したるもの、吾等に取りて實に活きたる教訓は與へられたるなり。

一大學生、殺人の罪科に依り將に斷頭台の露と消ねんする一刹那、辯護士は飛び來りて、死刑中止！と絶叫しぬ、續いて一大學生飛び入りぬ、曩の殺人の罪科により死刑の宣告を受けたる彼、學生は無實の罪なること、確固たる證據を持ち來るなり。裁判長直ちに死刑中止を宣す。彼學生は晴天白實の身とはなれり、斷頭台下りて學生互に相まみゆ、手に手を取つて喜びぬ――アヽうもその時は如何なりけん、情溢れて涙禁ずる能はず……、こゝに最后の幕は閉ぢられたり。

常に音樂隊及び生徒一同は開校紀念祝賀歌を主とし其他の唱歌を歌ひつゝ今日が愛出度さを祝しぬ名殘はつきねど時間切迫の爲め午後十一時喜々轟々たる裡、長谷部研究部長閉會の辭を述べ、木曾山林學校万歳を三唱して散會す。

本日斯く盛大に終りしは偏に余與委員諸君の盡力よろしきに由る、深く茲に謝す。

本年度卒業生方向調

福島縣林業技手　松澤莊太郎
帝室林野監理局木曾支廳蔦舟澤伐木所　倉科浦一郎
帝室林野監理局木曾支廳三殿伐木所　松尾忠恕
青森大林區署　本多清右衛門
未定　宮入汎省
未定　一之瀨製茶舊
宮城大林區署　原喜四三
宮城大林區署　原纎助
日本木材防腐株式會社　栗野原治平
東京大林區署　岡戸郁二
一年志願兵　蜂須賀宮次郎
東京大林區署　宮川永三
青森大林區署　一木虎雄
未定　島田雄太郎
帝室林野監理局木曾支廳阿寺伐木所　中島要人
宮城大林區署　仲田惠令
宮城大林區署　南勝右衛門
宮城大林區署　田中吟重
西筑摩郡新開村上田小學校　山村治一
未定　向井辰次郎
未定　中田辰雄
秋田大林區署　原七郎
未定　野村光智
長野大林區署經理課　若林遊龜尾
未定　洞山鹿之助
西筑摩郡大瀧小學校　芦澤庸三
青森大林區署　鹽澤英一
修學の爲め上京　原田英二

新入會員紹介

一、本年度の入會員諸君姓名左の如し（入學願書到着順）

山梨縣　前田正義君
石川縣　吉田佐十郎君
岐阜縣　前田喜代次郎君
石川縣　福田寛二君
山口縣　山本保君
上高井郡　中嶋信敏君
諏訪郡　濱武雄君
諏訪郡　吉澤英雄君
岐阜縣　西尾嘉一君

北安曇郡　宮澤慶一君
南安曇郡　木藤信雄君
西筑摩郡　征矢野餘所夫君
西筑摩郡　下條茂八郎君
埴科郡　伊藤德之亟君
西筑摩郡　下村博君
北佐久郡　角田久福君
埴科郡　村松一清君
東筑摩郡　秋山昌平君
更級郡　中村栉韶君
東筑摩郡　丸山久雄君
岐阜縣　木下稗藏君
西筑摩郡　松岡清三君
下伊那郡　板倉清一君
西筑摩郡　山村克人君
西筑摩郡　小羽根安次君
西筑摩郡　篠原爲一君
南佐久郡　井出幸吉君
北海道　久保勝三君
埴科郡　吾妻良亮君
西筑摩郡　川合清行君
福嶋縣　飯田康雄君
東筑摩郡　赤羽進君
石川縣　岡山益善君
西筑摩郡　龜子壽一君
下高井郡　山本每次君
下高井郡　佐藤一郎君
更級郡　高野薫見君
南安曇郡　石曾根四郎君
下伊那郡　杉本直君
西筑摩郡　松嶋周一君

會員の逝逝

▲特別會員岡田直一君、君は本校第二回卒業生にして卒業後農科大學構内に於て林產物製造を研究され一時歸省中の所昨四十一年五月秋田大林區署に赴任されしが仝年七月に至り突然腹膜炎の襲ふ所となり仝年十二月歸省され金澤病院に療治中の所去る四月廿日病石刻なく遂に黄泉の客となられたり、嗚呼、傷い哉　吁哀い哉　玆に謹んで弔意を表す

▲會員山下廣治君　君は明治卅八年度本校に入學し將に卒業せんとする第三學年の十一月病魔の襲ふ所となり鄕里療養中の所遂に本年四月上旬を一期として白玉樓中の客となる。誠に痛惜の至りなり。

特別寄附金報告

米山、江崎兩教諭へ紀念品贈呈醵金爲ー下され候諸君へ紙上を以て乍略儀左に御芳名を掲載し以て御禮旁々領收の證に替へる次第に候間御承知の程願上げ候

特別會員

一金四圓六十五錢　大嶋角藏君
一金一圓六十五錢　鵜殿正雄君
一金一圓五十二錢　輪湖正由君
一金一圓五十錢　藤卷壽一君
一金一圓二十錢　横山治人君
一金一圓十五錢　坂本忠次君
一金一圓十五錢　澤田貞次郎君
一金一圓十五錢　仲俟伍市君
一金一圓　木下清君
一金一圓　樋口勇君
一金一圓　宮下作次君
一金一圓　杉本貢君
一金一圓　坪倉藤三郎君
一金一圓　小瀧升太郎君
一金一圓　加藤純一君
一金一圓　新井喜多雄君
一金一圓　山下藤一君
一金一圓　川岸滋次郎君
一金一圓　池田藤三郎君
一金一圓　小山山喜十郎君
一金一圓　遠藤宗作君
一金一圓　廣瀨靜之進君
一金五十錢　山村治一君
一金五十錢　鵬田義正君
一金五十錢　上田鈺二君
一金五十錢　林哲次君
一金五十錢　平野正平君

一金五十錢　園原咲也君
一金五十錢　岡戸廣次君
一金五十錢　原四郎君
一金五十錢　伊藤兵太君
一金四十錢　中嶋要人君
一金四十錢　一之瀬袈裟蓉君
一金四十錢　一木虎雄君
一金四十錢　原田英二君
一金四十錢　原喜四三君
一金四十錢　洞山鹿之助君
一金四十錢　野村光智君
一金四十錢　粟野原治平君
一金四十錢　中田辰雄君
一金四十錢　本田清右衛門君
一金四十錢　仲田惠令君
一金四十錢　田中玲重君
一金四十錢　若林遊龜尾君
一金四十錢　南勝右衛門君
一金四十錢　芦澤庸三君
一金四十錢　蜂須賀宮次郎君

一金四十錢　岡戸郁二君
一金四十錢　倉科浦一郎君
一金四十錢　向井辰二郎君
一金四十錢　原七郎君
一金四十錢　嶋田雄太郎君
一金四十錢　宮川永三君
一金四十錢　原纏助君
一金四十錢　鹽澤英一君
一金四十錢　松澤莊太郎君
一金四十錢　宮入汎省君
一金四十錢　松尾忠恕君
一金三十錢　市川潔君
一金十五錢　小藤作四郎君

通常會員

一金四十錢　加藤清一君
一金四十錢　磯村益雄君
一金三十錢　原耕民君
一金三十錢　日野雅亮君
一金三十錢　伊藤憲一君
一金三十錢　上原上君

一金三十錢　松本清太君
一金三十錢　長谷部兵治君
一金三十錢　原田久保作君
一金三十錢　中澤揚君
一金三十錢　甲田林君
一金三十錢　小石彌三郎君
一金三十錢　村井正三郎君
一金三十錢　北村竹次郎君
一金三十錢　向井政勝君
一金三十錢　米山修君
一金三十錢　市岡淳一郎君
一金三十錢　高柴眞次郎君
一金三十錢　小林佐久馬君
一金三十錢　遠山一郎君
一金三十錢　澤木儀一君
一金三十錢　小池金三郎君
一金三十錢　金田美行君
一金三十錢　新田忠次郎君
一金三十錢　森巖君
一金三十錢　今井健二君

一金二十錢　土屋浩三君
一金二十錢　小松六三郎君
一金二十錢　宮澤清輔君
一金二十錢　和田守衛君
一金二十錢　德弘正夫君
一金二十錢　多田慶次郎君
一金二十錢　小池一郎君
一金二十錢　藤田要吾君
一金二十錢　市川左金吾君
一金二十錢　纐纈鎗太郎君
一金二十錢　德武國久君
一金二十錢　宮崎新太郎君
一金二十錢　中澤淳四郎君
一金二十錢　嶋田勘四郎君
一金二十錢　梨原貞次君
一金二十錢　柏澤國治君
一金二十錢　宮崎光治君
一金二十錢　長谷川義雄君
一金二十錢　篠原昇士君
一金二十錢　曲田秀二君

一金二十錢　服部啓次郎君
一金二十錢　伊藤昇次郎君
一金二十錢　林恒君
一金二十錢　柳澤章二君
一金二十錢　神戸林三君
一金二十錢　今井實太郎君
一金二十錢　盧川金次君
一金二十錢　小林哲三君
一金二十錢　塚本三樹君
一金二十錢　倉澤建雄君
一金二十錢　吉村金次郎君
一金二十錢　加藤正治君
一金二十錢　岡西謙三君
一金二十錢　丸山金三郎君
一金二十錢　征矢野和夫君
一金二十錢　樋口久治郎君
一金二十錢　安藤次郎君
一金二十錢　瀧澤正雄君
一金二十錢　山本政之亟君
一金二十錢　征矢朴郎君
一金二十錢　大洞盛一君
一金二十錢　原芳太郎君
一金二十錢　小林秀一君

以上（六月廿日迄に領收の分）

右之通り相違無之候

明治四十二年六月廿日　委員

松本清太
長谷部兵治
金田美行
伊藤憲一
藤田要吾
德弘正夫

紀念品贈呈に就き

恩師米山、江崎兩教諭に贈呈すべき紀念品は已に贈呈致すべきに候へしが期日後（五月十五日）尚卒業生諸君より陸續御醵金下され、整理致し兼ね未た贈呈の運に相成らず候右御諒承相成り度候

尚ほ醵金御寄送下さる諸君は來る八月卅日迄に御送付相成り度く右整理の都合も有之候へば當日を限り締切と致すべく以後御送附の分は一切御申し受けさる次第に有之候條左樣御承知相成り度此段及御通知候也

明治四十一年度會計報告

收支決算書

一金三百八十六圓三十二錢三厘　總收入
一金三百六圓九十九錢六厘　總支出
差引七十九圓三十二錢七厘（四十二年度へ繰越）

內譯

收入ノ部

一金百二十三圓九十錢三厘　四十一年度繰越金
一金二百六十一圓三十五錢　會費領收高
一金一圓〇七錢　雜收入
計金三百八十六圓三十二錢三厘

支出ノ部

一金五拾三圓七拾一錢　例會及び臨時會費
一金五円四拾七錢　創立紀念日祝賀會費
一金三拾二圓三拾六錢三厘　運動會費
一金八拾八圓三拾九錢三厘　庭球部費
一金拾九圓拾八錢　擊劍部費
一金二拾七圓六拾一錢　弓術部費
一金五拾一圓三拾七錢　繪葉書發行費
一金九圓〇七錢　新聞購讀費
一金拾一圓七拾五錢五厘　通信運搬費
一金八圓〇七錢五厘　雜費
計金三百六圓九拾九錢六厘

右之通り相違無之候也

明治四十二年六月十九日

庶務會計顧問
書記　森田長次郎

寄宿舍便り

▲四月十五日　卅四名の新入生諸君を迎へ候舍生八十名を越ゆ、舍內狹隘を感じ殊に食道に至りては古今未曾有の大繁昌を來たし類例なき形にて、不都合ながら其の日を送りむり候

▲實習中より夕食を五時に濟まし、六時人員檢査を致し居り候此の一時間程も生等には樂しく、愉快にし食後の散步と洒落込み居り候

▲四月以來西舍の階上の十二室を十四室に十三室を十五室に、階下の十四室を十三室に、十五室を十二室に改稱され候何んとなく整理上誠に都合よく相成り申し候

△舊病室を利用して娯樂室は此處に新設され候世が變はれば變つたものに候中央には十六燭光の青光あはく冬は爐を開かれ暖を取るべく數個のベニチは備い付けられ候、碁盤、碁、歌留多等互に威張り居り候碁盤の大家は毎日バチリ〳〵となか〳〵熱心に候

（宮　澤）

◎福島の近況

△八澤町の火事

時は一月卅一日愉快なる正月も將に終りを告げんとせし夜の八時半、寂としたる自習の濟むや、俄然、顯行寺の鐘は例に なく早くゴーン、ゴーン、折しも一隅に起る火事の聲、山平？上の段、否八澤と忽ち判明しぬ、時しも冬最中なれば雪は屋上高く爲めに火勢地を這ひて炎々朦々當る可らざる勢をなし、燒失する事十八戸に及べり、燃る事四時間火は南端より發す、原因は過失との事なり、學校にては直に消防隊を繰り出し、大に力を致し當時奮闘第一番と稱せられたり、されど今は以前に勝る美麗なる家屋建築を畧ほ了せり。

△鐵道工事

中央西線貫徹工事は日露戦爭の大打擊を蒙り其後遲々として進捗意の如くならざりしが、昨年來急速なる工事に着手せられ最早遠からずして貫徹を見んとす、幸か不幸か吾々が健脚を用ふべき地は失なわれつゝあり、坂下（岐阜縣下）野尻間及び墟尻奈良井間は本年中に開通を見んとす、福島附近も三月頃より着手せられ、又小丸山、上の段の間には八澤川を横ぎるべき大なる鐵橋の架設工事に從事しつゝあり、福島停車場は種々競爭ありたるも大なる面積を要する爲め南端なる万郡と決定し、先般來地均し工事に着手せしが、現下畧成功せしを以て愈々宏壯なる大建築物は木曾の幽美なる大森林と互に肩比しつゝ壯と美と交々相競ひ或は人目を驚かす事ならんか。

△縣設西筑摩苗圖移轉

福嶋町字小丸山にありし同苗圖は他の縣設苗圖と共に本年を以て滿期の處連續して今後十ケ年經營する事となり、種々の事情の爲め當郡日義村に移轉せり

△罹病豫防事務所

學校の脇ょ有りし、同事務所は狹隘を感じたれば新に字中畑の中央に新築移轉せり。

△准教員養成所

西筑摩郡主催になる准教員養成所は今回學校の近傍なる長福寺内に開設せられたり。人員は男女合せて五十有余名講師一名、体操及唱歌の教師一名他教授嘱托として小學教師二名、帽子には櫻の徽章にホワイトラインを附し以て本校生徒と區別し居れり、生徒は管郡内なるも遠方の者の爲め三軒の下宿屋に分宿させ第一、第二、第三寄宿舍と稱し大に將來の教育家たる素養を眞面目に作りつゝあり。

△湯　屋

洗湯は昨年始めより大手橋の東北方なる空地の端にありしも、鐵道工事等の爲め愈不足を感ずるに至り又別に清水町（舊土居倉）に二ヶ所新設せられ何れも華の湯と名稱せり

▲關山座の移轉

前項の如く鐵道工事の進捗ょ伴ひ幾多敷地の街路たる人家は悉く移轉せられたるが、福島町唯一無二の劇場たる關山座も此街路に當り、止むなく取り拂はれたり。而して從前の建物に增したる宏壯なるものに非常なる改良を施され、今回上の段に改築せられたり。

▲稲荷神社燒失

山平ょ在りし同社は五月十四日の夕十一時頃出火し一時位にして全部燒失せり、原因は乞食の過失との事なり。

（三　支）

▲登山を勸む　探險遠足部

諸君眼を上げて四邊を觀よ、社會の繁雜にして其の生存競爭の烈しき而して其の狀月に日に進むに從ひて、劇烈となるを、かゝる世に立ちて難闘に向ひ奮闘し、成功せんには如何なる覺悟、如何なる方法を以て心身を練りきたへんか。然り學を究め智を進むる可なり然りと雖も、智のみ發達する

も身体强壯抱負大ならざるに於ては、競爭に堪へず遂に破れん。

嗚呼身體の强壯一、生等學生時代に於ては、一方に學を修むると共に他方に於ては大に身體を練りきたへ、而して其の壯健なる身体の内に、偉大なる抱負を貯へん事につとめざるべからず。彼の豐太閤又はビスマーク、ナポレオン、の偉業は何によりしか、何人も直に其の心膽の大、意志の豪氣を追想するならむ。然り彼れ等は實に偉大なる意志、抱負ありし故に成功せしなり。古語に云はずや「健全なる精神は健全なる身體に宿る」と。

然るに見よ諸君、現代學生は漸時心神腐敗しつゝあるにあらずや、其の身体抱負は如何、之れ亦虛弱に而して、細事に齷齪し少しの事に出合へば驚き騷ぎ廻る、其の心膽の小なる、實に憤慨に堪へざる次第ではなひか。かゝる徒豈如何で最後の勝利をゞ得べけん。

茲に幸我が校には探險遠足部あり。

其目的、事業たるや慮弱なる身體抱負を避け、偉大なる身心を養成せむ爲め或は高山に攀ぢ、或は河海を跋渉するにあり。凡り青年の旺盛なる士氣を鼓舞し、遠大なる抱負を養成するは高山攀躋に若くものなかるべし。

時恰も夏季に向はんとす、登山の好時季、――夫れ青年の夏季登山――、其名のみにても如何に快ならずや。

嗚呼夏季登山、――莫逆の學友相携へて、人界の熱鬧を去り田圃の間を徑して、幽谿に入り、手に清泉を掬して苔石に居せむか、松籟は頻に琴音を弄して、遠來の客を慰むべく、又森林を縫うて鳥逕を辿れば、泉聲幽に耳朶を掠め來るべし。かゝる現象は到底不潔なる低地に齷齪しつゝある者の味ひ得ざる興味なり。而して殊に喜ぶべきは、森林帶の變化を目擊し得るの一事なり。即ち垂直的森林帶なるものを。

吾人は其のハヒマツ帶の邊に到れば、たぼへず快を叫ぶならむ。百聞は一見に若かず」實に然り既にして、溪澗を過ぎ、森林を出で、高きに登るに從ひて、氣温漸く寒を覺ゆ、空氣亦漸く稀薄となり、一歩一喘、奄々として杖に縋り、雲の低く脚下にあるを眺めつゝ、岩をおしのけ、苦に倒れんとし、百難を犯して登り、やがて目的とする頂上點に達すれば、眼界たちまち開けて、一望涯際なく遠近の群峯は兒孫の如く脚下に集まり、田野の遠く開展せるは恰も綠色の金巾を敷けるに異ならず、河流の蜒蜿として此の間を走りて海に朝するは、一條の銀綫に似たり。此の時の快樂、氣宇抱負、眼識等は如何、総べての心意は鼓舞作興せられて、天地の如何に廣大なるかを感じ、天然力の如何に壯大なるかを覺へ、自然の如何に秀美なるかを知るならむ。それと同時に又此の五尺の身の如何に小なるされ共其の心事は見渡す天地を一呑にせし感起るなるべし。

嗚呼、青年の身體を錬磨し、精神を修養し、遠大なる抱負を養成するには、實に峻嶽に攀ぢ、高山を蹈むに若くはなし。

諸君此の快なる登山の好時節夏季休暇は、目前に來れり。而して我が探險遠足部は、此の休暇を利用して彼の東海の空に高く聳ゆる、富嶽に登らむとす。諸君奮つて登山せよ、快なる登山を試みよ。

徒らに蝸屋に蟄伏して、暑熱を喞ちながら、不健全なる小冊子を嚼讀し、或は解體放逸して午睡を貪り、数旬の好閑を碌々に過さむよりは、寧ろ三寸の草鞋、三尺の輕笻を高山の岩角に、試み神心を千仞の雲間に修養すべし。奮ひ立てよ、――我が校健兒。

編輯局より

▽牡丹も芍藥も、己にながめ果て候のちは、目にさはやかな新綠こそ尤もうれしく感せられ候

そも東の間にていつしか新綠の匂ひ消ゆて、蓊鬱たる青葉の木がくれに郭公鳴く日と相成り候

編輯局の窓を透して流れ入る涼風に机上の紙片飄りて謂ふ可からざる快感を覺ゆ候

▽生等こゝにゆくりなくも先賢に代りて本誌編纂の任に當り候生等未た薑嘴若年の書何等の素養あるなく、何等の成筭あるなく寡聞罕覯の徒に候

され共大なる責任は決して免るゝ事能はず候必ずや光明を期し碎心事に當るべく、ベストを盡すべく候

而も本誌が本會の機關として、能く其の使命を完

うし得るや否やは、諸君の双肩に之あり候
幸に諸君、之れに顧みられて金編玉籠を遠慮なくドシ〳〵御投稿の程願上候

▽今回は豫想外の投稿之れ在り候へき紙面の都合上遺憾ながら次號に廻せしもの尠なからず候御諒承下され度候

今回の盛況を呈せしは誠に嬉しく候、本會として誠に賀すべきに候、諸君の御熱心の程、想像せられ候然し翻つて考へ候へば或は之が至當のことかと存じ候

凡て人と云ふものは如何に遠大な抱負や思想を持つて居つたとて之を筆に或は口にして公衆に發表し、之實行せさる時は何等の役にも立ちまじく候本校友は雖誌都員や、一二の投稿諸君の專有には無之候全會員諸君の校友にて候

會員諸君の抱負、氣焔の發表する所に候又本誌は校内會員諸君と卒業生諸君との中間に立つて相語るものに候

▽如何に御職掌柄御多忙の卒業生諸君でも年に一回や二回の通信は欲しきものに候又實地御研究の「有益と」否とにかゝはらず吾々に參考になる如きもの之れあり候ふ節は何卒御聞かせ被下度候

卒業生諸君よりの御通信は一切「端書便」欄に掲載すべく候

▽本誌も遷延に變遷を重ね漸く第十號を發刊することに相成り申候先年迄年二回の發刊規定の所なか〳〵種々の都合上左樣に參刊すること能ず昨年遂に年一回發刊と變更され候、確かに發刊は困難なる事業に候、然し困難だと云ふて發刊せざる譯にも行かず、其責は決して免るゝこと能はず候

而して本誌が本會の機關として一個年かゝつて大冊を發刊するよりも薄紙數に候ふとも幾回か發刊して内外の情報を交換するべくの方、優に有効の事と存じ候茲に生等鑑みる所有之大奮發候ふて本年度より年三回發刊致し諸君に贈呈致すべく候如何なるもの出來するや、刮目して御待被成度候

▽熱しき暑中休暇も間近く相成り候、炎帝の征矢は地上の万物を射繁茂旺盛其極に達すべく候

自然の美は四時盡きずと雖も最も完全なるは夏に候此の自然の美を味ふべき暑中休暇も間近く相成候半歳の久さしき學窓の下にこつ〳〵と、科學の勉强に從へし賜三旬の暑中休暇に接すべく候

諸君此の長い三旬の月日を無異に送り玉ふな、暑中休暇は青年修養の時に候ふよ、須からく或は高山に海に、精神の休養、身体の練磨實に此の時に講せざるべからず候よろしく新思想新光明を發見して贏らせられよ、切に諸君に希望致し候

▽本誌の内容、外形に就き御氣附の點有之候はゞ遠慮なく御申越下され度候

▽本號より七八號に續き口繪を挿入する事に致し候而して今回は本年度卒業生諸君の紀念寫眞を挿入致し候　（城　麓）

◎廣　告

○振替貯金又は郵便替爲を以て本會の會費（第九號雜誌代）を送付せられし諸君並に金額左の如し

一金八拾七錢
新井喜多雄君（内四十一年分五十二錢）

一金三拾六錢
小澤順君

一金七拾錢
園原咲也君（二冊分）

一金三拾五錢
千村重喜君　北原利雄君　坂本忠治君
澤田貞治君　仲俣伍市君　鵜殿正雄君
加藤純一君　横山治人君　平野正平君
山下藤一君　川岸滋次郎君　坪倉藤三郎君
小山田喜十郎君　遠藤宗作君　市川潔君
樋口勇君　上田鈩二君　杉本貫君
宮下作次君　林哲次君　脇田義正君
三原昇君　高橋金作君　小瀧升太郎君
小藤作四郎君　寺尾敬二君　宮崎二一郎君
小池新伍君　原四郎君　木下清君
北川信美君　野尻慶助君　正又實次郎君
藤巻壽一君　藤原周紫君　戸田績君
大島角藏君　小林泰一君　高樋博君

一金三拾四錢
赤岩藤太郎君　由尾忠助君

一金三拾一錢
岡戸廣次君　伊東兵太君　池田藤三郎君

一金八拾一錢
川崎本雄君（四十一年度分五十錢）

(右明治四十二年六月十九日迄領収の分)
尚ほ御送金無之者は本誌(十號)代金と共に至急御拂込願上候

木曾山林學校校友會

緊急會告

一、今回會員名簿編纂に付き卒業生諸君は至急履歴書御送り下され度候
一、卒業生諸君にして雜誌代御送金無之方には次號より會報の發送を停止する事に可相成候に付き一應御注意迄に申上候

投稿規則

一、投稿は政治法律に渉るもの及德義に悖るものたる可らず。
一、長篇なりとも未完の原稿は採らず、字体亂雜又然り。
一、用紙は半紙大にして、一行廿三字詰たるべし
一、原稿は平假名を用ひ、句讀點を施すべし。
一、題目を改むる毎は用紙を別にすべし
一、誌上は匿名を用ふるも原稿に氏名を附記すべし
一、原稿は一切返附せず、採否は編輯者の意見に依る。

岐蘇校友發刊規定

一、本誌は本校に縁故ある者の相互に氣脈を通じ知識を交換し交誼を厚ふするの目的を以て印刷し校友に頒つものとす
一、右の目的を達せんが爲め先輩諸君の贊助を仰ぐものとす。
一、本誌は研究雜誌部にて發刊するものとす。
一、本誌發刊は年三回とす。
(一回)　七月十五日
(二回)　十月十五日
(三回)　二月十五日
一、本誌の體裁は之を分ちて左の七欄とす。
論說
學術
文苑詞藻
雜錄
紀行
端書便り
雜報

明治四十二年七月十八日印刷
明治四十二年七月廿二日發行

長野縣立木曾山林學校
編纂兼發行者　校友會
長野縣立木曾山林學校
發行所　校友會雜誌部
長野縣下高井郡中野町二百九十三番地
印刷者　高橋惣太郎
仝縣仝郡仝町仝番地
印刷所　高錦堂印刷所